

平成23年6月15日発行 ライセンスメイト 第1巻228号通巻553号(年4回発行) 昭和36年11月6日第三種郵便物認可

LICENSE MATE

日台の生命の絆



発行所 株式会社 日本教育開発

獅頭山勸化堂(苗栗県南庄郷)

広枝警部も祀る勸化堂。ここは台湾仏教の聖地。原生林に蔽われたこの山には大小18にもおよぶ戒律厳しい寺院が自然そのままの景観を残す岩穴を背後に並んでいる。

LICENSE MATE

特集

台湾慰霊訪問団

- 1 日台の家族(兄弟)交流のあゆみ
- 3 十二周年おめでとうございます
- 5 台湾訪問の目的
- 9 台湾訪問の記録(第1次～第11次)
- 10 十二周年に寄せて
- 15 祭文/台湾訪問の旅訪台者一覧
- 17 一目でわかる訪問先・交歓先
- 19 訪問先・交歓先一覧(第1次～第12次)
- 22 台湾訪問の旅 帰朝報告
- 25 台湾訪問の旅 紀行文集(抄)
- 38 知られざる「神蹟の遺跡」
- 39 中華民國外交部・台日文化經濟協會表敬訪問
- 41 結団式・壮行会～帰朝報告会・新年会
- 43 台湾特別講演会



保安堂に掲げられた銘板



奉納した龍柱と対面した松俵ご夫妻(保安堂)

日台の家族(兄弟)交流のあゆみ

平成11年	3月 6日	第1次訪問旅行(3.6～3.9、23名) ※「結団式・解団式」含む...1
	5月 15日	ライセンスメイトにて連載開始...2
	11月 25日	慰霊祭参加(台中・宝寛寺、11.24～11.26、2名)...3
平成12年	11月 23日	第2次訪問旅行(11.23～11.26、17名) ※「結団式・解団式」含む...4
平成13年	5月 28日	読売新聞に一面広告掲載...5
	10月 13日	第3次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店60名)...6
	11月 23日	第3次訪問旅行(11.23～11.26、38名)...7
	12月 22日	第3次訪問団解団式・報告会(平和樓本店50名)...8
平成14年	4月 1日	訪問団ホームページ開設...9
	6月 8日	許国雄先生告別式参列(高雄・徳生長老教会、6.7～6.9、1名)...10
	9月 10日	産経新聞に見開き広告掲載...11
	10月 21日	全国の学校(8,443校)にパンフレットを郵送し、台湾への修学旅行先選定を呼びかける ※全国の高等学校5,054校、県内の保育園から大学まで3,389校...12
	11月 2日	第4次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店73名)...13
	11月 6日	台湾中日海交協会(胡順来会長以下16名)歓迎晩餐会(台湾18名)...14
	11月 23日	第4次訪問旅行(11.23～11.26、38名)...15

平成15年	1月 24日	第4次訪問団解団式・報告会(平和樓本店48名)...16
	6月 7日	第1回台湾特別講演会・懇親会(アーバン・オフィス 天神 講演会134名/懇親会36名) 山口秀範先生(国民文化研究会事務局長)「台湾に根づく日本精神—六士先生を中心に」...17
	11月 8日	第5次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店56名)...18
	11月 23日	第5次訪問旅行(11.23～11.26、23名)...19
平成16年	1月 24日	第5次訪問団解団式・報告会(平和樓本店35名)...20
	2月 22日	第1回台湾シリーズ放送(FM-MiMi日曜討論、2.22～3.28、6回)...21
	4月 29日	台中市日本文化協會(鍾子桓氏以下3名)来訪...22
	6月 5日	第2回台湾特別講演会・懇親会(講演会 アーバン・オフィス天神83名/懇親会 花万葉54名) 張国興先生(久留米大学法学部教授)「台湾の現状—総統選挙を中心に」...23
	6月 20日	沈・呉ご夫妻来訪...24
	9月 9日	台湾福祉実習団(陳徹氏以下8名)来訪...25
	11月 22日	第6次訪問団結団式・壮行会(アーバン・オフィス天神6名)...26
	11月 23日	第6次訪問旅行(11.23～11.26、8名)...27
	12月 26日	第2回台湾シリーズ放送(FM-MiMi日曜討論、12.26～H.17.1.2、2回)...28

平成17年	1月 22日	第6次訪問団解団式・報告会(平和樓本店30名)...29	平成21年	6月 6日	台湾支部長(黄・葉ご夫妻)歓迎晩餐会(花万葉10名)...60
	6月 4日	第3回台湾特別講演会・懇親会(講演会 テラホール100名/懇親会 チャタムダイニング70名) 黄文雄先生(文明史家)「反日教育を煽る中国の大罪—中国が反日・仇日に転じた本当の理由」...30		6月 7日	第7回台湾特別講演会・懇親会(福岡ガーデンパレス 講演会170名/懇親会69名) 黄文雄先生(文明史家)「台湾と日米中の現在と未来—台湾と中国の最終戦争は避けられるのか?」 柳原憲一先生(西日本台湾学友会会長)「江見政治と竹東大圳—今、甦る台湾水力発電の父」...61
	10月 22日	第7次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店51名)...31		6月 19日	フクニチ住宅新聞で「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載...62
	11月 5日	何・陳 ご夫妻歓迎晩餐会(平和樓本店16名)...32		8月 14日	産経新聞で「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載...63
平成18年	11月 23日	第7次訪問旅行(11.23~11.26、20名)...33	8月 21日	フクニチ住宅新聞で第2回目の「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載...64	
	平成18年 1月 8日	第3回台湾シリーズ放送(FM-MiMi日曜討論、1.8、1回)...34	9月 7日	李登輝元総統お出迎え(福岡空港43名)...65	
	1月 28日	第7次訪問団解団式・報告会(テラホール38名) ※「森晴治顧問を偲ぶ会」兼ねる...35	9月 10日	李登輝元総統お見送り(福岡空港26名)...66	
	6月 3日	第4回台湾特別講演会・懇親会(講演会 アーバン・オフィス天神 156名/懇親会 テラホール67名) 黄文雄先生(文明史家)「台湾・中国が衝突する日—これからの台・中・日・米関係の徹底分析」...36	9月 30日	産経新聞で第2回目の「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載...67	
平成19年	10月 21日	旅程説明会(アーバン・オフィス天神26名) 第8次訪問団結団式・壮行会(テラホール70名)...37	10月 31日	産経新聞で第3回目の「NHKは台湾人に謝罪を!」意見広告掲載...68	
	11月 20日	役員・班長会(アーバン・オフィス天神6名)...38	11月 1日	旅程説明会(平和樓本店20名) 第11次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店56名)...69	
	11月 23日	第8次訪問旅行(11.23~11.26、35名)...39	11月 13日	フクニチ住宅新聞で「台湾の国連専門機関参加」支援広告掲載...70	
	平成19年 1月 7日	第4回台湾シリーズ放送(StyleFM日曜討論、1.7、1回)...40	11月 21日	産経新聞で「台湾の国連専門機関参加」支援広告掲載...71	
平成20年	1月 27日	第8次訪問団解団式・報告会(平和樓本店68名)...41	11月 22日	第11次訪問旅行(11.22~11.26、30名)...72	
	6月 2日	第5回台湾特別講演会・懇親会(講演会 エルガーラホール 218名/懇親会 てら岡53名) 黄文雄先生(文明史家)「増大する覇権主義中国の軍事的脅威—日台はいかに対応すべきか?」...42	12月 20日	産経新聞で「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭で奏上された祭文」意見広告掲載...73	
	8月 24日	フクニチ住宅新聞で「台湾の国連加盟」支援広告掲載...43	平成22年 1月 23日	第11次訪問団結団式・報告会(平和樓本店61名)...74	
	10月 5日	台湾双十節式典参加(ホテルオークラ10名)...44	2月 21日	産経新聞で「日華(台)親善友好慰霊訪問の旅・感想文集」意見広告掲載...75	
平成21年	10月 27日	旅程説明会(平和樓本店19名) 第9次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店49名)...45	2月 26日	フクニチ住宅新聞で「日華(台)親善友好慰霊訪問の旅・感想文集」意見広告掲載...76	
	11月 23日	第9次訪問旅行(11.23~11.26、25名)...46	3月 7日	第7回台湾シリーズ放送(StyleFM日曜討論、3.7~4.11、6回)...77	
	平成20年 1月 26日	第9次訪問団解団式・報告会(平和樓本店51名)...47	3月 13日	林溪和先生告別式参列(台中・三一基督長老教会、3.13~3.14、2名)...78	
	3月 9日	第5回台湾シリーズ放送(StyleFM日曜討論、3.9~4.13、6回)...48	3月 21日	産経新聞で「明石元二郎台湾総督に対する福岡市教育委員会の態度には愛国心が感じられません」意見広告掲載...79	
平成22年	5月 2日	フクニチ住宅新聞で「台湾の世界保健機関加盟」支援広告掲載...49	6月 5日	第8回台湾特別講演会・懇親会(福岡ガーデンパレス 講演会123名/懇親会63名) 黄文雄先生(文明史家)「日本人の道と精神(こころ)」 清水馨八郎先生(千葉大学名誉教授)「日本文化の本質を知ろう—新『教育勅語』のすすめ」...50	
	6月 8日	第6回台湾特別講演会・懇親会(福岡ガーデンパレス 講演会123名/懇親会63名) 黄文雄先生(文明史家)「日本人の道と精神(こころ)」 清水馨八郎先生(千葉大学名誉教授)「日本文化の本質を知ろう—新『教育勅語』のすすめ」...50	6月 27日	台北駐福岡経済文化辦事處 周碩穎處長送別会(団長宅12名)...81	
	9月 3日	台北駐福岡経済文化辦事處 周碩穎處長主催懇親会(平和樓本店7名)...51	10月 8日	台湾双十節式典参加(ホテルオークラ12名)...82	
	9月 5日	フクニチ住宅新聞で「台湾の国連専門機関参加」支援広告掲載...52	10月 14日	台北駐福岡経済文化辦事處 曾念祖處長歓迎会(松幸26名)...83	
平成23年	10月 9日	台湾双十節式典参加(ホテルオークラ15名)...53	10月 23日	旅程説明会(平和樓本店21名) 第12次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店63名)...84	
	10月 25日	旅程説明会(平和樓本店18名) 第10次訪問団結団式・壮行会(平和樓本店48名) ※「東京支部・台湾支部設立」兼ねる...54	11月 22日	第12次訪問旅行(11.22~11.26、46名)(A班11.22~26 35名、B班11.24~26 11名)...85	
	11月 22日	第10次訪問旅行(11.22~11.26、31名)(A班11.22~26 19名、B班11.23~26、12名)...55	平成23年 1月 22日	第12次訪問団結団式・報告会(平和樓本店65名)...86	
	平成21年 1月 24日	第10次訪問団解団式・報告会(平和樓本店64名)...56	3月 15日	台北駐那覇経済文化辦事處 粘信士處長表敬訪問(3.15~3.16、4名)...87	
平成24年	2月 22日	第6回台湾シリーズ放送(StyleFM日曜討論、2.22~3.29、6回)...57	4月 3日	第8回台湾シリーズ放送(スタジオ日本 日曜討論、4.3~5.8、6回)...88	
	3月 9日	台北駐福岡経済文化辦事處 周碩穎處長主催懇親会(平和樓本店8名)...58	4月 23日	産経新聞で「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭で奏上された祭文」意見広告掲載...89	
	5月 15日	フクニチ住宅新聞で「台湾の世界保健機関加盟」支援広告掲載...59			



「台湾慰霊訪問団特集」に寄せて

台北駐福岡経済文化辦事處
處長 曾 念祖

日華(台)親善友好慰霊訪問団による台湾慰霊訪問が今年で13年目を迎えられること心よりお慶び申し上げます。小菅団長をはじめ団員の皆様には、毎年欠かさず台湾へ出向かれ、戦没者の慰霊そして日本と台湾との家族(兄弟)交流をされていることに心から敬意を表しますとともに、日頃においても日台友好親善交流に一方ならぬご尽力を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。

ご承知の通り、今年は我が中華民国建国100周年です。台湾における中華民国建国の父として慕われる孫文先生の革命は、当時の日本の友人たちからの物心両面に亘る並々ならぬご支援があったからこそ成功したといっても過言では

ありません。歴史的にも地理的にも日本と中華民國台湾との関係は長く深く、まさに切っても切れない固い絆で結ばれております。

こうした関係の上、この度3月11日の「東日本大震災」による未曾有の大災害には、台湾の人々は我が身に起こったことのように日本を心配し、心を痛めております。そして、その思いを実際の行動に移し、台湾全土から5月18日までに官民合わせてすでに169億円余の震災義援金が寄せられており、これは12年前の台湾大地震や、2年前の大水害における日本政府や民間からのご支援への恩返しであり、日台両国の強い絆の現れでもあります。被災地の復興にはわずかかかもしれませんが、これ

は台湾人の日本に対する心からの声援でございます。日本と台湾とは心と心の通じ合う真の友人であることがまさに今回の震災を通して改めて証明されました。

これまで築き上げてきたこの貴重な友情をより一層強め、緊密な関係を更に深めていくためにも、私どもは日台の友好親善促進に努めてまいりますので、貴訪問団には今後も引き続き日台友好関係の一翼を担って下さるようお願い申し上げます。

結びに、貴日華(台)親善友好慰霊訪問団のますますのご発展と、皆様方のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。



貴訪問団は慰霊祭の大きな柱です

台湾台日海交會
會長 林 德華

日本東北関東大震災に関して先ず、天佑日本、心の祖国日本の平安をお祈り申し上げます。東北関東大震災でM9.0の巨大な地震と津波で被災地で災難にあわれた災民に何とお慰め申してよいか言葉もありません。

日本の皆さまのご憔悴の心中も拝察致します。何とぞ日本の皆さまにはお気持ちを強く持たれ、この災難を乗り越っていかれることを心よりお祈り申し上げます。日本の皆さま、頑張ってください。

台湾慰霊訪問団は、平成11年より毎年11月25日には、台籍日本人軍人軍属戦没者秋季慰霊祭に三萬

三千余柱の英霊を悼むため、遙々国境を越え慰霊団を結成されご参祭いただき、感激と感謝に絶えません。

ご承知の通り、弊會をはじめ各地の會友は軍属出身が多く、皆高齢のため病弱で秋季慰霊祭に参加できないものが増えてまいりました。

そのような環境の中で多くの訪問団員を伴い、毎年台湾各地での慰霊祭を齎行される貴訪問団のご参祭は、今や慰霊祭の大きな柱となっております。

さて、私も台湾台日海交會會長を十数年に亘って努めて参りまし

たが、残念ながらこの度退任することになりました。在任中は日本の皆さまのご支援とご指導を仰ぎ、誠に有難うございました。心より感謝申し上げます。今後は簡朝陽氏が新任會長として継任することになりました。今後も変わらぬご支援ならびにご指導下さいますよう、宜しく願い申し上げます。

終わりに、小菅団長はじめ団員ご一同様のご健康とご多幸をお祈りし、併せて今年のご訪台を心よりお待ちしております。



我們台灣人的誠摯歡迎與熱情 台湾人の熱い想いで皆様を心より歓迎いたします

日華(台)親善友好慰靈訪問団
台湾支部長 黄 明山

各位日本先進、朋友們：
連日來觀賞「日華(台)親善友好慰靈訪問之旅」系列節目，感到十分感動，台灣人民為在台灣失去寶貴生命的日本戰士建造了紀念碑及廟宇，而訪問團員們秉持著對過往英靈的無限敬意，不辭千里渡海來台，莊嚴肅穆，恭謹守禮地祭拜先靈，更讓他們的靈魂得到來自祖國的追思，而能夠安息於異鄉。訪問

この何週間にわたってインターネット放送で「日華(台)親善友好慰靈訪問の旅」の番組を見て、とても感動しております。貴訪問団は、遙々海を渡り、かつて日本軍人・軍属として国の為、に尊い命を捧げられ、祖国を想い異郷の地に眠るご英霊を祀る台湾各地の記念碑や廟や寺院を参拝し、慰霊を続けておられます。私どもも訪問団の主旨に大いに賛同し、今後永らく日台の友好関係が続くことを夫婦共々暖かく見守っております。

團の諸位先進精神令人感佩，而台日間淵遠流長の友好情誼，也令人感到溫暖。近幾年來，因女兒楷茶有幸參與日華(台)親善友好慰靈訪問團來台的活動，內人與我有機會接待來自日本的各位先進朋友，能如此延續台日之間的美好友誼，感到無限珍惜。雖然每年只有餐會短暫聚，但深深希望能讓來自日本的各位感受到我們台灣人的誠摯歡

ここ数年来、娘である楷茶が日華(台)親善友好慰靈訪問団の活動に関わらせて戴いている関係で、私も妻も日本の皆様とお会いすることができ台湾と日本の友好の懸け橋として続けて参りたいと、とてもこの機会を大事に思っております。毎年わずか1日だけの懇親会での食事だけで少しの間しか皆様とはお話できませんが、できるだけ台湾人の熱い想いで皆様を心より歓迎いたします。

今年3月11日に日本で発生した

迎え熱情。
今年三月十一日在日本發生的地震浩劫，身在台灣的我同感遺憾與傷痛，看到日本舉國團結而沉著地面對巨災，亦感到萬分敬佩，在這裡，想為日本加油，相信各位必能走出創痛並順利重建。當然，還要為現正在日本努力的女兒楷茶說聲“加油喔”

東日本大震災には、台湾にいる私どもは大変心を痛めております。また国を挙げ、皆様が心をひとつにして大きな災害に立ち向かい前に進んでいっている姿を見てとても尊敬しております。日本の皆様、是非頑張ってください。日本は必ず立ち直ることができると信じています。そして、今日本にいる娘楷茶にも“がんばれ!”と伝えたいと思います。



我々老兵が台湾と日本との懸け橋に

台湾中日海交協会
会長 胡 順來

“天佑日本”このたびの東日本大震災で被災されたの皆様は何とお慰め申してよいか言葉もありません。

そして日本の皆様のご心中をお察し申し上げます。TVで災害のニュースを見て呆然となり、大変驚きました。いまは只々、日本の皆様様が自信を持ち、強くこの災難を乗り越えて、一日も早く復興されますよう心からお祈りしております。

かつて台湾はスペイン、オランダ、英国、シナ、日本などの統治下になりましたが、その中で日本だけが台湾人に教育を施し、大國

家建設を敢行しました。東南アジアの国々を見るにどこの植民地でも教育は施されていません。国家建設が振興しないため経済の発展はありません。しかし、日本の統治下の台湾、韓国、東国(旧満州国)はいずれも発展しました。日本は世界平和のため、アジアの国々の民族解放をした功労者であることを知って戴きたいと思えます。

日本国は絶対に侵略主義ではありません。もしも日本が侵略であれば、我々台湾人を侵略戦争に連れていったこととなります。大東亜戦争は聖戦なりと小生は固く信じています。

そして戦後、日本が台湾に残し

てくれた膨大な資産が基礎となり、今日の台湾は世界でも有数の工業国となり、豊かな経済大国となりました。

これは偏に我々の年代に日本が施した教育勅語の教えのお陰です。このような日本の功績を日本・台湾の後世の人たち、特に若者たちにも知って戴くため、小生は語り続けてゆく所存です。

残念ながら今は日本と台湾の間には国交がありませんので、我々老兵が日本との懸け橋となり、使命を果たしていく所存です。

日台の親交が尚一層、倍旧に発展することを念願しています。

旅の目的

1

「大東亜戦争で 散華された台湾同胞の 英霊三万三千余柱の顕彰」

- 11月22日(月) 士林／芝山公園／六士先生墓所(写真①②)
- 11月23日(火) 台南／八田與一夫妻墓所(「殉工碑」を含む)(写真③④)
台南／飛虎將軍廟(写真⑤⑥)
高雄／保安堂(写真⑦⑧)
- 11月25日(木) 台中／宝覺寺(写真⑨⑩)
イ. 日本人墓地(日本人遺骨安置所)
ロ. 英魂観音亭と「靈安故郷」の慰霊碑
苗栗／勸化堂(写真⑪⑫)
新竹／濟化宮(台湾の靖國神社)(写真⑬⑭)
- 11月26日(金) 烏來／高砂義勇隊戦没英霊記念碑(写真⑮⑯)



①



②



③



④



⑤



⑥



旅の目的
2

「台湾の皆様方との 家族交流・兄弟交流」

- 11月22日(月) 台北／蔡焜燦先生による講話／梅子(写真①)
- 11月23日(火) 新營／何怡涵・陳清華ご夫妻による招待昼食会／小園日本料理店(写真②③)
高雄／黃明山・葉美麗ご夫妻による招待夕食会／海慶澎湖海産(写真④⑤)
- 11月24日(水) 塩水／鹽水國民小學(劉信卿校長)歓迎式典(写真⑥⑦⑧)
台中／ラバウル會(王春茂會長)主催の懇親会／台中担仔麵婚宴会館(写真⑨)
台中／台湾台日海交會(林徳華會長)主催の懇親会／香蕉新樂園(写真⑩⑪)
- 11月25日(木) 台中／台湾中日海交協会(胡順來會長)主催の懇親会／大北京餐廳(写真⑫⑬)
- 11月26日(金) 台北／台日文化經濟協會(鄭祺燿會長)主催の懇親会／逸郷園(写真⑭)
台北／中華民國外交部(粘信士副秘書長)表敬訪問(写真⑮⑯)



①



②



③



④



⑤



⑥





濟化宮(新竹)



芝山公園、六士先生墓所(台北)



明石元二郎總督墓所(台北)



宝覺寺「靈安故郷」碑と森晴治顧問(台中)



蔡焜燦先生(台北)



高砂義勇隊戦没英霊記念碑(台北)



貞愛親王殿下登陸記念碑(布袋)



飛虎將軍廟(台南)



保安堂(高雄)



東方工商専科学校、許國雄先生と(高雄)



奇美博物館、許文龍先生と(台南)



潮音寺(墾丁)



日本人墓地(高雄)



蓮池潭、詹德寬先生と(高雄)



日台の魂の交流 — 台湾特別講演会に寄せて

日華(台)親善友好慰霊訪問団 団長 小菅 亥三郎

今回の東日本大震災に際し、終始一貫ご自身のこと以上に心痛し接して下さる台湾同胞の皆様から御礼を申し上げます。

さて、わが国日本は表面積37万km²ですが、地球の全表面積から見れば400分の1(0.25%)にしか過ぎません。しかるに有史以来記録されている「巨大地震」の2割(20%)がわが国で発生しています。それはとりもなおさず「(火山の)噴火」や「津波」の被害も連鎖して受けてきたということに外なりません。

このような地の底からの自然の脅威に加えて毎年夏には台風がやってきます。年中行事にまでなっている天からの猛威です。

かくなる環境下で私たち日本人は何万年・何十万年と生き延びてきたし、これからも生き抜いていかなければなりません。宿命とはいえ、これほどまでに悪条件に恵まれた国は世界広しといえども、あまり多くはないと思います。

「災害は忘れた頃にやってくる」との名言をもってして記憶されている随筆家の寺田寅彦氏の言葉にもうひとつ「日本人は災害を食って生き延びてきた種族である」というのがあります。まさしく至言ではないでしょうか。

私たちは、困難に逢着すればするほど、それを「恵み」に転化し、「共同社会建設」の樫にしていった先人の知恵と生命力に感動するばかりです。日本人が危機に際して発揮する「忍耐」や「団結」や「協力」は世界に誇る「国富」と思っております。そしてそれはいかなる環境にも動ずることのない「礼儀」を生み出し、「大化の改新」以来連綿と続く「公心」(おおやけごころ)を育みました。

私たち日本人が先祖から引き継いだこのような価値の体系を世界の中で唯一、両手(もろて)を挙げて歓迎し取り入れて下さった国が台湾です。

さて、私共は原台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱のご英霊に深甚なる慰霊の誠を捧げるため、平成11年から12ヶ年に亘り、訪台活動を継続して参りました。

名も無き市井の一民間団体の事業とはいえ、帯たる使命は①世界一の親日国・兄弟国の台湾とわが国との親善友好関係を牢固不拔のものとし、②東アジアの平和と安定に寄与する、という国家的見地に立つもので、それはこの12年間で訪台した団員339名、訪問した慰霊地・交歓先153ヶ所、その結果、ご縁の出来た台湾人同胞679名という数が物語っています。

ここで、既にご承知おきのことと存じますが、台湾を自国領土と嘯いてやまない中国はあろうことか尖閣諸島を手始めにわが国・沖縄にまで侵略(=併合)の鋒先を向けてきました。異常なまでの軍備拡張と並行して進められている国内法整備(「反国家分裂法」や「国防動員法」の制定と施行)はまさに共産党による一党独裁国家ならではのアジア侵略を目論む国内体制作りそのものであります。

しかるに、中国のこのようななりふりかまわぬ侵略体制構築とその発動の過程で最大の障壁として浮かびあがってきているのは、①日本統治50年と②大東亜戦争を共に担い抜いた戦友としての血盟関係に淵源を有する日台両国民の精神的一体感であります。天然の要害である台湾海峡や東支那海に優るとも劣

らないこの精神的防壁を破砕する以外一歩も前に進捗しないのが今日の中国の対台湾・対日本政策とっていいと思います。

それゆえ今回の東日本大震災の報に接するや否や台湾の皆様からわが国に寄せられた160億円以上にのぼる義援金や様々な支援・声援の洪水に中国が色を失いながらも懸命に平静を装っているのはまさにこの一体感・連帯感の健在と同志的紐帯の強さを目のあたりにしたからに他なりません。

有史以来、隣接国や周辺地域を侵略し、併合し、無辜の民を虐げてきた国のみが持つ特有の本能から、日台の精神的一体感を育む私たち訪問団の家族(兄弟)交流を忌み嫌い、魂の交流の深化拡大を恐れてやまない中国は私たちの訪台活動に露骨な干渉や妨害を加えてきました。

平成14年の読売新聞における団員募集広告は、在福岡中国総領事館の圧力により掲載中止に追い込まれましたが、以来、産経新聞を除く全国紙(「西日本新聞」を含む)ではこの訪問の団員募集ができない状況が続いています。それは私たちの活動の歴史変革的意義を察知した中国当局とその顔色を伺う大手マスコミの不甲斐なきのせざる業以外の何物でもありません。

かかる事情から、平成15年開始のこの台湾特別講演会が唯一の団員募集窓口となった次第であります。それゆえ、この講演会の成否は、日台の魂の交流の成否に直接影響しますゆえ何卒倍旧のご支援・ご協力をお願い申し上げます。



「白衣の兵士」による医療戦

産経新聞九州総局 総局長
野口 裕之

国連平和維持活動や治安の悪い国での災害復旧・医療支援といった非軍事活動でも、軍事と同じノウハウが投入される。中国軍も力を入れ始めた。

中国海軍の病院船は昨年、ソマリア沖で海賊対処活動中の中国艦隊に医療支援実施後、初めてアフリカ5カ国で活動し、バングラデシュでも医療活動を行った。帰国行事で某提督は「海上兵站能力検証」「国際義務を積極的に履行する責任大国のイメージを示した」と、真の目的を明らかにした。

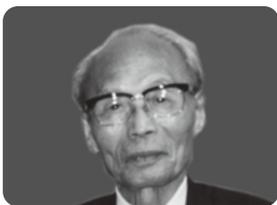
訓示に、中国空軍が1999年に発表した軍事理論「超限戦」を思い出した。軍事・政治・外交・経済・文化・宗教・心理・メディアを全て戦争手段ととらえ、平時・戦時を超えた総力戦こそ中国の目指す戦い方だという理論だ。

「中国軍政治工作条例」に03年、「三戦」が加えられた。その一つ「世論戦」は「軍事行動への大衆や国際社

会の支持を取り付け、敵が反中政策を行わぬよう国内外の世論に影響を与える」戦法。「責任大国のイメージ」戦略そのものだ。

米国防総省は「三戦」を警戒するが実は、イラク戦争でメディアを利用し情報操作を謀った米国から、中国は「三戦」を学んだとされる。実際、米海軍太平洋艦隊と海兵隊はオセアニアや東南アジアにおいて人道支援・民政支援活動を実施。07年から強襲揚陸艦、大型病院船、補給艦を派遣している。

昨夏には海上自衛隊も輸送艦と医療チームを東南アジアに派遣した。ただし、「危険が伴わない」のが条件。活動に伴う医療施設工事受注や、論功行賞としての資源開発に対する優先権獲得など官民一体化の「商売」もうまくない。世界をまたにかけ「善意の押し売り」をはじめている中国の鉄面皮を見習いたい。



台湾に慰霊親善の拠点一点から線へ、そして全土へ

福岡県郷友連盟 常任顧問
日高 清

アジア大陸の東端に民族の伝統、文化と地域を守るため、独立旗を掲げ、中華民国として台湾は自主独立し、堂々と外交を展開している。

一衣帯水、対岸には共産中国が、虎視眈々と侵略奪回の好機を狙っている状況はあまりに悲壮な姿である。台湾は日本人にとって、全世界で一番親しい隣組の国家であり、海外旅行者も先ず同国を希望する。台湾蕃族として恐れられた山地民族は、大東亜戦でニューギニア、ボルネオ等の南方各地域で、日本軍人として活躍し、その実績戦功は高く称賛され、戦死者は靖国神社に合祀され、神霊として尊敬されていることは、日台関係を実証する姿である。

斯る台湾に「日華親善と慰霊訪問」の指標を掲げる日華(台)親善友好慰霊訪問団は、十周年を機に現地台湾に支部を設け素晴らしい活動の拠点を構築した。平成11年の社員研修旅行を契機として始められ

た訪問団の13年の永きに亘る、その努力と実行力、加えて熱意と組織力は実に天晴れである。

蒋介石一党の占領統治中には事件、紛争が多発、台湾族は塗炭の苦しみを味わってきた。李登輝より陳水扁統治時代を迎え、本来の台湾政治曙光が見え出した途端、親中派の馬英九政権となり、極めて遺憾な現状と憂慮の至りである。

現地民族の大同団結、中でも日本の国歌、軍歌を熱唱する山地系民族三十万の民族精神を活かし、明治以来、日本民族によって開発、建設、振興された産業を継承発展することを希うものである。

貴団の慰霊親善、家族(兄弟)交流の成果は、点より線へ、更には地域に及び全土に波及することをば信じて止まない。



日中国交回復により台湾と断交したことは誤りであった

日華(台)親善友好慰霊訪問団 名誉顧問
日高 誠

東日本大震災への対応で、民主党政権の右往左往ぶりには目に余るものがある。然し、自民党が政権を担っていたら果たしてどうだろうか？と考えると、私には五十歩百歩であろうと思われてならない。何故ならば敗戦後の吉田内閣の講和条約成立まではよかったが、その後の施策の中で最も誤った問題は田中内閣による日中国交回復で台湾を中国の一部と認め断交したことである。今回の震災でいち早く救援隊の派遣を申し出、また官民合わせて169億円余を越す義援金を提供してくれたのは、その台湾である。

恐らく財界の圧力も有ったであろうが「政経分離」の美名の許に中国と国交を回復し、多くの日本企業が大陸に進出したが、昨年秋の尖閣事件で見ると日本企業の社員を逮捕し、レアアースの輸出等を制限した。即ち対等な外交関係と自由な経済関係をもたないのが共産中国である。

第2に自民党は政権欲しさに社会党と手を結び謝罪

外交を展開した。その影響は甚大で、靖国問題への内政干渉により歴代首相は参拝を取り止めた。日本国民に誤った歴史認識を与え、日本人としての自信と国家観念を喪失させてきた。そして遂に民主党政権が成立し、今や外国人の参政権付与まで企図している。これはソ連共産党革命以来のコミンテルンの世界戦略の筋書き通りである。日本赤化の第一は、東京裁判と米国の占領政策であり、いわゆる「平和憲法」の制定による戦争放棄は、理想と現実を無視した日本弱体化の最たるものである。

今回の福島原発による放射能の海洋汚染を恐らく執拗に問題視してくるのは中国とロシアと韓国であろう。国家観念のない政治家たちは如何に対処するのか、我々は今後の日本の問題として注視していかなくてはならない。

一昨年の奇美博物館に於ける許文龍先生の講話が脳裏からはなれないのは私だけでしょうか。台湾の実業家の逞しさを学ぶべきだと思う。



台湾の皆様こそわが国にとって本当の“雨天の友”です

九州不動産専門学院グループ九栄会（同窓会）会長
角 洋一郎

日華(台)親善友好慰霊訪問団は平成11年より毎年台湾訪問を実行し、昨年で12次を数えるに至りました。この訪問は大東亜戦争で散華された英霊の顕彰と、現地の皆様方との家族交流・兄弟交流を主な目的としており、行政等の公式訪問でもなければ、多くの議員を擁しているわけでもなく、一市井の人々からなる民間の団体です。台湾各地で催される各分野での交流促進への熱意は訪問団への信頼であり、台湾人元日本兵軍人軍属への継続的で且つ誠実な慰霊訪問は、台湾の人たちに感動と尊敬の念を与えているように思います。そのために親密な紐帯を構築しています。

九州不動産専門学院グループの同窓会である九栄会は、その趣旨に賛同して、第2次訪問より積極的にかかわるようになり、その結果今までに50名を越

える会員の皆様に参加されました。

また、この度の東日本大震災に際し台湾は、いち早く救援隊を派遣して下さり、民間も含め169億円余にもものぼる莫大な義援金を提供して下さいました。衷心よりお礼申し上げます。マスコミ等はこれをあまり報道しませんが、台湾の皆様こそわが国にとって本当の“雨天の友”なのです。日台両国民は互いに心の通じ合う親密な仲なのです。現在は台湾政府への表敬訪問も認められ、手厚い歓迎をいただいています。私たちの誇りあるこの活動を大切に、『日本』を発見する訪問を未永く継続してゆきたいと思えます。

今後も世界一の親日国である台湾との関係強化と、一日も早い両国の国交回復を目指して、訪問団と共に邁進して行きたいと考えております。

10年偉大なり 20年畏るべし 30年にして歴史なる

※副団長ならびに支部長よりごあいさつをいただきました。

中山 茂氏 九州不動産専門学校グループ同窓会「九栄会」 監査



第12次日華(台)親善友好慰霊訪問団が、小菅団長及び団員の方々の方々の熱い志のもと挙行され、台湾各地において慰霊の誠を捧げられ、家族・兄弟交流を深められましたことに敬意を表します。帰朝報告を伺いますと、従来にも増して参加者の方が多く、また地元の方々からは熱烈な歓迎を受けられたとのこと、心よりお慶び申し上げます。

さて、去る3月11日の東日本大震災については、犠牲になられた方々へ心より哀悼の意を表し、被災された方々にはお見舞いを申し上げます。この未曾有の大災害では、我が日本へは多くの外国からの支援を受けましたが、中でもいち早く台湾政府より救援隊派遣の意思表明があり、また、官民合わせて169億円余の多額の義援金とお見舞いの言葉が寄せられましたことに、衷心より感謝を申し上げます。改めて、日本に対する台湾の方々の真情を知ること出来、感激致しました。

我が国は、敗戦後の廃墟の中から復興を遂げ、今日の物質的な繁栄がもたらされましたが、精神的には自虐史観のもと、自存自衛であるべき安全保障を米国に委ねたがため独立自尊の気概までも喪失して、今は、中国からの脅威に晒されて危機、存亡の事態にあります。このような中、私たちに今般の大震災は、天が我が国民に与えた痛烈な覚醒の仕業でないかと察せられます。我々は、過酷な状況にある被災された方々と共に、物質的のみならず精神的にも復興をはかる好機と捉え、性根をすえて復興に邁進すべきであろうと思う次第です。また今は、我が国の盛衰・存亡に係る歴史的な分岐点にあって、真に自主独立を果たすことが出来るか否か、正に我々一人ひとりの覚悟が問われているものと認識致します。

それはともあれ、親善慰霊訪問につきましては、第13次の実施に向けて更に充実・発展を図られ、栄光ある歴史を築き上げられますようこころより祈念申し上げます。(第4・10次参加)

金澤明夫氏 日本協議会福岡県支部 代表幹事



台湾への親善友好慰霊訪問の旅は平成11年より始まり、第10次の節目の年には、台湾に支部が設立される年に到りました。この10年間で第1ステージとすると、一昨年の第11回は、第2ステージの幕開けの年ということになります。第1ステージの中で、私は副団長として3回参加させていただきましたが、4回目となりました今回は、明らかに以前とは違った次の段階へ踏み込んだ感のある旅ではなかったかと思われます。

それは、10年間の積み重ねによって、内外ともに貴重な価値ある事業として幅広く認知されるようになってきたということでもあります。

例えば、日本国内では大手新聞記者の同行取材や遠方からのご遺族等の参加、また台湾では台南県長(知事)や元李登輝友の会台湾会長の歓迎レセプションへのご参加、あるいは、この日のために長い準備をかけて歓迎会を催された国民学校の意気込み、そして台湾政府の外交部や台日文化経済協会の手厚い歓迎ぶり等々がそのことを物語っています。

これらの成果は小菅団長の強固な意志と丁寧な心配り、そしてスタッフの皆様のご努力によるものですが、貴重な経験をさせていただいた者の一人として、微力ではありますが、これからの10年を見据えて、より広く、より深く浸透を図り、益々交流が盛んになり、日本と台湾との紐帯が更に強固なものになるよう私も努力していかねばならないと思う次第であります。(第7・9・10・11次参加)

大橋昭仁氏 行政書士



本親善友好慰霊訪問団の最大の目的は台中市宝覺寺で毎年11月25日実施の「大東亜戦争元日本軍台湾軍人、軍属慰霊祭」に参加することですが、私も昨年までに通算8回参加することができ、光栄に存じております。現地の皆様とも随分と親しくなり、一昨年11月には、中日海交協会々長胡順来氏に、昼食をご馳走して頂いたことが

ありました。席上、私は恐る恐る「今、仮に日本統治下であったとしても、独立運動が起きているでしょうか?」とお尋ねしました。それに対するご返事は、「いや、それはない」、「礼節を重んじる日本国民になれるのなら、そのままよい(独立運動はしないの意)」とお答え下さいました。勿論この場合の「日本」、日本統治時代の日本及び日本人の事であり現在の我々のことではないでしょう。それでも我々が親切にして頂けるのはまさに台湾統治に当たられた、私共の大先輩方の善行のいわばご相伴に預かっているだけのことです。

省みて現在のわが国の精神的状況は情けない有様です。自信喪失に陥り、固くとした精神生活を送っている私共にとり、台湾日本語世代の方々との交流から得るものは今後の私たち個人の生き方及びわが国の進むべき道を定めるにあたってその方向を示すまさに天啓である、と存じます。この心暖まる交流事業を企画し、実行して下さっている関係者の方々に感謝致しますと共に今後この活動が長く続く事を心より願うものです。(第3・4・5・6・7・9・11・12次参加)

家村茂氏 自衛隊援護協会福岡支部 援護課長



私が本会の皆様と台湾を訪れたのは、3年くらい前になりました。そのきっかけは、以前沖縄で勤務していた頃、隣の与那国島から眺めた台湾の遠景が夢のあふれた大きな大陸のように見え、一度訪ねてみたいという衝動を覚えたからです。

多少の事前情報に頼るだけのやや不安な訪問でした。しかし到着して迎えていただいた台湾の方々、私たちの訪問の間、終始日本、特に過去の日本人に対する熱い感謝の思いを表されているのに驚かされました。過去の日本の皆さんが身を挺して台湾のために尽くされたことのひとつひとつが、ひとつときも忘れ去られていなかったのです。

今、日本人が忘れてきている「恩恵を受けた人への感謝」「国への感謝」のあり方が、今の台湾に立派に生き残っているのです。自分達の先祖が過去に日本人から受けた恩恵を、まるで自分自身が受けたかのように御礼という形で、その子孫である私たちに表し続けているのです。終戦後六十数年がたつて世界情勢の変化にもかかわらず、感謝の気持ちを忘れずに持ち続けている方が多くいることに、心が洗われ逆に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

日本人自身がこのことに早く気がつき、人への感謝、地域への感謝、そして国への感謝を大いに学ばなければならないと感じた次第です。(第8次参加)

木村秀人氏 高等学校 教諭



迷う者の足取りはおぼつかない。何かに憑かれたかのように下を向いて歩く。安全も危険も考えず、先に何が待ち構え、何が襲って来ようとしているかも見えない。背骨を伸ばし胸を張る者には、周りはおのずと見え、遠くもまた見える。行く先の危険を察知し、まだどこへ行くべきかを考えることも

できる。日常的な簡単な個人的体験である。これが、日本の国にそのままあてはまる。

迷いは戦後世代にかわるにつれてますますひどくなる。歩みに自信の無い者は、いくら歩み続けても成長できない。精神の低年齢化である。偉大な政治家を生み出すこともなく、経済も低迷し、教育も人を育てない。迷いをもたらしたのは、戦後全体に及ぶ反日の嘘である。嘘の本を読み、嘘の新聞で日常を作られた者が、テレビで嘘のドキュメンタリーを見て、嘘の本を更によく書く。この複雑に固まった嘘の塊を一撃の下に砕くのは、更なる情報ではない。見ることである。百聞は一見にしかず。

台湾が見るべくそこにある、訪れるべくそこにある。何が見え何を訪れて、下向く日々が劇的に変化し、ニッポンが背骨をしっかりと立てたかは、すでにいくたの感想文の中に見られるであろう。台湾は、もはや観光地ではない、海の彼方のニッポンである。台湾は日本の宝であり、日本は台湾の宝である。宝は、護るべし。

この宝の守護が、慰霊訪問団の意義となろうとしている。二つの国の精神と存在とを護る守護者となろうとしている。英霊よ、見守りたまえ。(第4・5・8・9次参加)

永田昌巳氏 前筑後市議会議員



日華(台)親善友好慰霊訪問団に11次、12次と参加した。初回は無知であったが、二度目の訪問ではその役割と責任の重さを自覚しての参加であった。

かつて日本は台湾の国づくりを汗を流した。教育、産業、福祉にと日本人と台湾人は困難をさわめる中、共に汗を流し国づくりを行ったことがお互いの信頼を深め強固な絆となり、大東亜

戦争を心をひとつにして戦い、多くの尊い命が散華した。

訪問団も12次に亘り毎年11月25日に行われる宝覚寺における三万三千余柱の台湾人軍人軍属慰霊祭に参加してきたが、その他にも台湾各地で日本軍人の御霊を祀る慰霊祭が今なお現地の人達によって守られていることは驚きであり頭が下が

る。そのひとつに獅頭山勸化堂がある。その勸化堂には台湾青年2000名を救った日本人警察官、広枝警部が祀られているが日本では余り知られていないし、来る人もいない。訪問団も予定外であったが初めての参拝であった。台湾青年たちは故郷へ帰ることが出来たが、戦後65年たった今、生存者は劉維添さん(88)ひとりになったという。その劉さんから当時の話を詳しく聞くことができた。「私は最後の生き残りとなったが生ある限り広枝警部の御霊を弔う」という強固な決意は紛れもなく「報恩感謝」の誠をつくす大和魂である。

折しも日本では平成23年3月11日東日本大震災に見舞われ、多くの犠牲者が出て、ふるさは壊滅した。しかし日本人は如何なる事態においても冷静沈着、自分のことより人の救助に手を差し伸べる高潔なる行動に世界のマスコミは称賛の報道を行った。日本はまだまだ道義国家である。日台の魂の交流を続け、台湾に学び日本に学び、先人の偉業を顕彰すれば必ずや世界称賛の時はくると確信する。(第11・12次参加)

西山洋氏 福岡県防災アドバイザー



昨年11月、第12次日華(台)親善友好慰霊訪問団に参加する機会を得て、初めて台湾を訪問しましたが、大変感動に満ちた貴重な経験をする事ができました。

以前より台湾は、大変親日的な国であると聞いていましたが、このたび実際に同地を訪れて多くの方々とお会いし交流を重ねるにつれ、いかに台湾の

皆様が、日本に親しみと郷愁の念を抱いておられるかということを感じました。それは皆様がかつては日本人であったということが一つの理由でしょうが、さらに我々日本人の先達が、真心と犠牲を払って台湾の発展に尽くしたこと、そして台湾の方々をそれを十分に認めて下さっているからだ

と思います。

今回の東日本大震災に際しても、いち早く台湾中で募金活動を展開し、世界中で一番早くしかも169億円余という巨額の義援金を日本に送って下さいました。そして日本の復興を心から祈り支援してくれています。我々日本人は、親日国台湾の人々のこの信頼と期待と支援に感謝するとともに、これに立派に応えなければならぬと感じます。

最後に強い信念と行動力で今回12次を数えた日華(台)親善友好慰霊訪問の事業を実現されました小菅団長に心からの敬意と感謝の念を捧げます。(第12次参加)

安河内康彦氏 株式会社ダイアン 代表取締役社長



平成11年11月に不思議なご縁の元に第1次慰霊訪問の旅は始まったと小菅団長様からお聞きしました。

私もそのご縁の繋がりにより平成15年の第5次訪問参加をきっかけに昨年の第12次慰霊訪問の参加まで都合4回参加させて頂いております。この慰霊訪問の旅は一般の観光旅行とは大きく異なり、台湾各地に残っている日本と

台湾との深い絆の地を捜し出して訪問し、11月25日には台中市宝覚寺において、先の大東亜戦争で散華された台湾同胞三万三千余柱の英霊顕彰と日本人墓地での慰霊祭を執り行う旅が12年間続けられています。

そしてこの旅のもう一つの喜びは私たちが失った日本人としての誇りと有り難さを再発見する旅でもあります。私が最初の訪問の際にお会いした台湾の老年寄りから日本統治時代の事をお聞きした時、一緒に「日本人は皆とても凛として規律正しく親切で、素晴らしい人達だった」事や終戦後、進駐してきた中国国民党の軍人達の残虐非道ぶりや規律や道義心の無さ等々の話は、知っていたつもりでいた私が知らなかった現実の話ばかりで、正に「目から鱗が落ちる」とはこの事でありました。海の彼方にこれほど日本を慕い、恋しがっている人達がおられるということを知った事は私の日本人としての生き方、考え方を大きく変えるできごととなりました。

だからこそ、この度の東日本大震災に際して、どの国よりも多額の義援金を送ってくれたのです。しかし、その事はわが国の政府とマスコミは決して報じません。非常に悔しく残念に思っています。

台湾に行くたびに感じることで台湾の皆様もお歳を召され慰霊祭に出席される人数も櫛の歯が抜けるように少なくなり、往時を知る人がどんどん少なくなっているのが現状です。せめて私達日本人が彼等にご恩をお返しする為に是非ともこの訪問団に一度参加されることをお勧めしたいと心より思っております。(第5・9・10・12次参加)

藤田達男氏 日華(台)親善友好慰霊訪問団 東京支部長



台湾は今、中共の軍事的・政治的な圧力に加えて、精神的にも中共の浸透攻勢に晒されている。また中共の圧力は東シナ海、尖閣諸島、沖縄にも及んでおり、日台両国は共通の危機を迎えているのである。その一方で我が国には、台湾との親善友好を目的とした団体が数多く存在するが、戦没者の慰霊を中心とした団体は戦友会を除いては

当団体のほか極めて少ない。

真の日台両国の親善友好とは、訪問団の主旨である「大東亜戦争に際し日本軍人・軍属として散華された台湾出身の英霊三万三千余柱の慰霊」を通じて、両国民が親戚として交流を深める事にあるのではないだろうか。

また中共の影響力が浸透しつつある福岡県内で、「青天白日旗」が堂々と掲揚される場所は我々の行事会場の他少ないが、私たち訪問団の活動は、このような我が国の現状に一石を投ずる役割も担っている。しかも、訪問団の活動を通じて日台の親善友好を願う同志が年々増えてきている状況は喜ばしい限りである。今後の両国関係の強化に資するべく、訪問団の発展を祈る次第である。(第3・12次参加)

国家・国民の総力を挙げた三年と九ヶ月にわたる戦いにより、わが国は国家の尊厳と民族の名譽を死守し、大東亜解放の壮図を成し遂げました。とまれ、わが国が軍事的敗北を余儀なくされたとはいえ、四百年以上に及ぶ欧米列強の植民地支配に終止符をうち、アジアにおける全ての權益を失わせしめたのは紛れもない世界的事実であります。

これを偉業といわずして一体何と呼べばいいのでしょうか。わが国の国民として東洋平和のために共に血と汗を流した者同士の兄弟感・一体感はいくして形成されました。台湾の皆様が五十年間の日本統治時代の伝統や文化、はては「大和魂」を高く評価し、これを日本精神として継承している世界に類を見ない親日的な国家・国民である由縁はここに淵源があるのです。

私達は、この様な台湾の皆様への誠心に応えるためにも積極的に家族交流・兄弟交流を深め、その紐帯を今まで以上に強固なものにしていきます。それは今日の私達日本人に民族としての自覚と誇りを高めてゆく契機になると同時に戦後一貫して仕掛けられている情報戦に勝ち抜き、日米のみならず日台の分断工作に余念のない中共の攻撃を破砕する強力な桿になるからです。平成十一年以来、私達は宝覺寺における「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列させていただき、三万三千余柱の御霊の安らかならんことをお祈りしてまいりました。今後も、この顕彰事業を風化させることなく、更に充実・拡大し、若い次世代に継承してゆくことが、「日本人として散華された御英霊」にお応えする私達の務めであると考えております。

以上の決意も新たに、わが国の近代史に類稀なる勇氣と献身を刻まれた御英霊の御遺徳を偲び、御霊の平安を心より祈念し、慰霊の言葉といたします。

日台の生命の絆 死守せむと

吾日本の一角に起つ

平成二十二年
 民國九十九年
 皇紀二千六百七十年
 十一月二十五日

日華(台)親善友好慰霊訪問団

団長 小菅 亥三郎

台湾訪問の旅 訪台者一覧 (第1次より第12次までの団員215名)

赤松 公昭
 浅見 晃甲
 阿部 敏彦
 安部 雅俊
 荒津 雅也
 荒牧 賢二
 有吉 忠助
 有吉 弘子
 安藤 政明
 安藤 由紀子
 飯島 志津子
 家村 茂美
 池田 裕二
 石原 章臣
 市川 憲三
 市来 徹夫
 井手田 洋基
 稲田 健二
 井上 俊治
 井上 昌俊
 井口 セツ子
 井原 四郎

今村 之昭
 岩渕 宣仁
 岩元 照周
 岩本 宣善
 カクマシノブラサニー
 牛島 康智
 江頭 伸一
 江崎 君公
 エドワーズ博美
 大嶋 俊英
 太田 玲子
 大塚 ヨシ子
 大西 敬吾
 大西 雅樹
 大橋 昭仁
 大庭 道夫
 大林 さやか
 緒方 俊美
 小川 聡子
 小倉 和彦
 小倉 弘子
 小倉 美帆

小副川 克江
 鬼塚 芳治
 小野 実里
 折居 一志
 折居 正規
 柏原 正広
 梶栗 勝敏
 金澤 明夫
 金澤 千代美
 金澤 礼
 亀渕 武史
 亀渕 喜久子
 茅野 輝章
 茅野 紀子
 河野 一寿
 木須 治彦
 北浜 道
 木付 辰生
 木付 靖子
 木村 権作
 木村 賢二
 木村 秀人

木村 孝子
 國武 利貴弥
 國友 健男
 黒田 務
 黄 楷棗
 古賀 誠
 古賀 靖啓
 小菅 紀武吾
 小菅 亥三郎
 小菅 順子
 小菅 那津子
 小辨野 聖也
 小松 正隆
 小松 友子
 小柳 陽太郎
 五郎丸 浩
 五郎丸 美佐江
 阪中 三幸
 坂本 彰
 櫻井 英夫
 佐護 美和子
 佐々木 建城

佐々木 朗子
 佐々木 佳重
 佐竹 秀三
 佐竹 冬子
 佐藤 正子
 佐藤 吉彦
 讃井 健三
 重松 源吉
 重松 博子
 篠原 章好
 柴田 知則
 柴田 好章
 下田 健一
 下田 純子
 白水 キミ子
 菅沼 寛
 菅沼 由美
 杉山 雄一
 角 洋一郎
 妹尾 和之
 高須賀 俊一
 高田 信一

『日華(巨)親善友好慰靈訪問団を代表し、
原台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱の御霊の御前にて
謹んで祭文を奏上いたします。』

祭文

『凡生ヲ我國ニ稟クルモノ誰カハ國ニ報ユルノ心ナカルヘキ』(軍人勅諭より)
『爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ』(教育勅諭より)

これは明治十五年の軍人勅諭と同一十二年の教育勅諭の一節であります。この中で明治天皇は、阿片戦争の勝利に酔う欧米列強の重圧をはね返し、新生日本を守り、世界に伍して建国していく御意志と、これを担うべく国民のあるべき姿をお示しにされました。

このような中で明治二十八年、台湾の皆様は日本人になりました。日清戦争に敗れた当時の宗主國・清が「鳥もさえずらない、木々には花も咲かない」といつてこの台湾を「化外の地」と切り捨て、わが国・日本に永久に割譲したからであります。

爾来、日台両民族の渾身の努力により、わが国でも有数の豊かで慈愛溢れる地となった台湾は、欧米諸國の羨望の的となり、支那大陸における満州國と同様に、国家建設のお手本とされるまでになりました。これは軍人勅諭として収斂されたわが國の武徳の伝統と教育勅諭に凝縮された民族共同体の理念を台湾の皆様が真心をもって受け止め、漲る意気と使命感をもって体現されたからに他なりません。

しかるに、昭和十六年十二月八日未明の大東亜戦争勃発により台湾の運命は大きく変わりました。今、御英霊として眠っておられる皆様は、南海の島々や熱帯の密林においてコミンテルン(國際共產主義運動)の陰謀に組み込まれた欧米列強と、また支那大陸においては蒋介石他率いる軍閥政権や共産匪賊と呼ばれたボルシェビキと生死を賭けて戦った同胞でした。とりわけ七百倍ともいわれる難関を突破し、血書歎願をしてまで志願してこられた皆様は、日本人以上の日本人として歴史に残る勇猛果敢さを発揮され、敵を圧倒し倒しましたのであります。

高野 治之
高橋 成子
高原 弘之
田尻 雄一
田中 伯央
田中 純夫
田中 秀男
田中 キミヨ
田中 美咲
田中 道夫
田中 秀幸
谷 亜希子
谷尾 侃
谷口 祐子
田村 邦明
團 宝誠
陳 怡勲
塚田 征二
塚本 能久
辻森 弘美
土山 彬
鶴 修輔

鶴田 栄一郎
出口 清
徳田 慎也
戸田 幸雄
中尾 博憲
中島 重夫
中嶋 大介
中島田 信輔
中園 公浩
中村 哲
中村 卓
中村 朝子
中村 英夫
中山 茂
永石 辰郎
永田 昌巳
永田 タマミ
永淵 裕章
永吉 正紀
南條 實
西田 一也
西山 洋

庭木 正二郎
野口 ヨシエ
野田 正治
野見山 優亮
羽音 修平
林 克紀
原 千里
原田 和典
原田 種雄
原田 經子
原田 泰宏
東 昭臣
久野 智教
久野 睦子
日高 誠
平泉 弘美
平尾 武敏
平永 明伍
平永 由子
平野 和彦
平松 扶二雄
廣石 有美

福岡 滋子
福田 史子
福原 洋子
藤田 達男
藤村 一
星野 孝典
星野 友秀
堀川 克巳
前田 治義
前原 清美
前原 照美
又丸 齊次
松岡 祐貴
松下 美佳
松下 実
松俵 義博
松俵 茂子
松永 亜弥
村山 淳
村山 初美
森 晴治
森 靖子

守田 昭雄
安河内 康彦
八尋 妙子
山鹿 好史
山口 自然
山口 秀範
山口 智子
山口 英明
山下 亜希子
山下 賢悟
山田 悟
横山 勝美
吉村 恭二
力武 崇樹
脇山 博文
渡邊 一弘
渡邊 瑞枝

敬称略

家族・個人共に50音順

〈一目でわかる訪問先・交歓先〉

〈訪問先〉(訪問年月日順/日付は初回訪問日)

- ①故宮博物院 / H11.3.6
- ②忠烈祠 / H11.3.6
- ③龍山寺 / H11.3.6
- ④阿美文化村 / H11.3.6
- ⑤太魯閣峽谷 / H11.3.7
- ⑥梨山 / H11.3.7
- ⑦日月潭 / H11.3.7
- ⑧宝覺寺 / H11.3.8
- ⑨日本人墓地(台中) / H11.3.8
- ⑩飛虎將軍廟 / H11.3.8
- ⑪安平古堡(紅毛城) / H11.3.8
- ⑫東方技術学院(旧東方工商専科学学校) / H11.3.8
- ⑬夜市(高雄・六合路) / H11.3.8
- ⑭寿山公園 / H11.3.9
- ⑮澄清湖 / H11.3.9
- ⑯蓮池潭 / H11.3.9
- ⑰育英医護管理専科学学校 / H12.11.24
- ⑱孔子廟(台南) / H12.11.24
- ⑲高砂義勇隊戦没英霊記念碑 / H13.11.26
- ⑳徳生長老教會 / H14.6.8
- ㉑愛河 / H14.11.23
- ㉒奇美博物館 / H14.11.24
- ㉓烏山頭ダム(烏山頭水庫) / H14.11.24
- ㉔芝山公園 / H14.11.26
- ㉕八田與一記念館 / H15.11.24
- ㉖南栄技術学院 / H15.11.24
- ㉗九族文化村 / H15.11.25
- ㉘日本人墓地(高雄) / H16.11.23
- ㉙潮音寺 / H16.11.24
- ㊀明石元二郎総督墓所 / H16.11.26
- ㊁保安堂 / H17.11.23
- ㊂孔子廟(台中) / H17.11.25
- ㊃台中公園 / H17.11.25
- ㊄夜市(台中・中華路) / H17.11.25
- ㊅国史館台湾文献館 / H17.11.25
- ㊆濟化宮 / H17.11.25
- ㊇貞愛親王殿下登陸記念碑 / H19.11.24
- ㊈夜市(台北・士林区) / H19.11.25
- ㊉中華民國外交部 / H19.11.26
- ㊊台北101ビル / H19.11.26
- ㊋鹽水國民小學 / H20.11.24
- ㊌八角樓 / H20.11.24
- ㊍富安宮 / H20.11.24
- ㊎鵝鑾鼻公園 / H21.11.23
- ㊏巴士海峡 / H21.11.23
- ㊐殉工碑 / H21.11.24
- ㊑三一基督長老教會 / H22.3.13

- ㊒桃園忠烈祠 / H22.3.14
- ㊓海尾朝皇宮 / H22.11.23
- ㊔勸化堂 / H22.11.25



高砂義勇隊戦没英霊記念碑(台北)



奇美博物館(台南)

〈交歓先〉(交歓年月日順/日付は初回交歓日)

- 許國雄先生 / H11.3.8
- 台湾中日海交協会 / H11.11.24
- 蘇金淵先生 / H11.11.25
- 蕭興從先生 / H11.11.25
- 詹徳寬先生 / H14.11.23
- 許文龍先生 / H14.11.24
- 何怡涵・陳清華ご夫妻 / H15.11.24
- 台灣台日海交會(旧「台灣台日海交聯誼會」) / H16.11.24
- 台中市日本文化協會 / H16.11.25
- 王春茂・馮英鳳ご夫妻 / H16.11.25
- 沈芳以・呉月雲ご夫妻 / H17.11.25
- 蔡焜燦先生 / H18.11.26
- 台日文化經濟協會 / H18.11.26
- 黄明山・葉美麗ご夫妻 / H20.11.24
- 黄崑虎先生 / H21.11.24
- ラバウル會 / H22.11.24

台湾慰霊の旅

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目
第1次訪問 23名 H.11.3.6～9 土～火 ガイド 李 燕光 神職 なし 旅行社 ヤマトトラベル (15ヶ所)	①故宮博物院 ②忠烈祠 ③龍山寺 ④阿美文化村 (花蓮泊)	⑤太魯閣峡谷 ⑥梨山 ⑦日月潭 (日月潭泊)	⑧宝覚寺 →日本人墓地(慰霊式) ⑨飛虎將軍廟(慰霊式) ⑩安平古堡 ⑪東方工商専科学校 →交歓会(許國雄先生) ⑫夜市 (高雄泊)	⑬寿山公園 ⑭澄清湖 ⑮蓮池潭
第2次訪問 17名 H.12.11.23～26 木～日 ガイド 陳 賜賢 神職 なし 旅行社 近畿日本ツーリスト (8ヶ所)	①蓮池潭 ②寿山公園 ③夜市 (高雄泊)	④育英医護管理専科学校 →東方工商専科学校 →交歓会(許國雄先生) ⑤孔子廟 ⑥安平古堡 ⑦飛虎將軍廟(慰霊式) (台中泊)	⑧日本人墓地(慰霊式) →宝覚寺(慰霊祭) →交歓会(台湾中日海交協会) (台北泊)	
第3次訪問 38名 H.13.11.23～26 金～月 ガイド 陳 賜賢 神職 古賀靖啓 旅行社 近畿日本ツーリスト (8ヶ所)	①故宮博物院 ②夜市 (高雄泊)	③東方工商専科学校 →交歓会(許國雄先生) ④孔子廟 ⑤安平古堡 ⑥飛虎將軍廟(神事) (台中泊)	⑦日本人墓地(神事) →宝覚寺(慰霊祭/神事) →交歓会(台湾中日海交協会) (台北泊)	⑧高砂義勇隊戦没英霊 記念碑(神事)
第4次訪問 38名 H.14.11.23～26 土～火 ガイド 呂 見涛 神職 古賀靖啓・田村邦明 旅行社 近畿日本ツーリスト (11ヶ所)	①蓮池潭 ②寿山公園 ③愛河→交歓会 (詹徳寛先生) ④夜市 (高雄泊)	⑤孔子廟 ⑥奇美博物館 →交歓会(許文龍先生) ⑦飛虎將軍廟(神事) ⑧烏山頭ダム (台中泊)	⑨日本人墓地(神事) →宝覚寺(慰霊祭/神事) →交歓会(台湾中日海交協会) ⑩日月潭 (台中泊)	⑪芝山公園(慰霊式)
第5次訪問 23名 H.15.11.23～26 日～水 ガイド 呂 見涛 神職 堀川克巳 旅行社 近畿日本ツーリスト (9ヶ所)	①飛虎將軍廟 (神事) (台南泊)	②烏山頭ダム →八田與一記念館 ③奇美博物館 →交歓会(許文龍先生) ④南栄技術学院 ⑤交歓会 (何怡涵・陳清華ご夫妻) (台中泊)	⑥日本人墓地(神事) →宝覚寺(慰霊祭/神事) ⑦九族文化村 ⑧交歓会(台湾中日海交協会) (台中泊)	⑨芝山公園(慰霊式)

●ご協賛ありがとうございました。

十一周年おめでとうございます
台北駐福岡経済文化辦事處

處長 曾 念祖

☎(092)734-2810

〒810-0024
 福岡市中央区桜坂3-12-42

不動産の総合プランナー
 福岡県知事免許第(11)2626号
榎本ビル商事(株)

取締役会長 榎本巳之助

☎(093)531-4488

〒802-0081
 北九州市小倉北区紺屋町1-12
 榎本ビル301

総合建設業

(株)松俵建設株式会社

取締役会長 松俵 義博

☎(0948)42-1033

〒820-0205
 嘉麻市岩崎1554-10
 榎本ビル301

訪問先・交歓先一覧

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目
第6次訪問 8名 H.16.11.23～26 火～金 ガイド 林 英志 神職 なし 旅行社 近畿日本ツーリスト (10ヶ所)	①日本人墓地(慰霊式) ②寿山公園 ③夜市 (高雄泊)	④潮音寺(慰霊式) ⑤飛虎將軍廟(慰霊式) ⑥交歓会(台湾台日海交聯誼會) (台中泊)	⑦日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台湾中日海交協會) ⑧交歓会(台中市日本文化協會) ⑨交歓会 (王春茂・馮英鳳ご夫妻) (台中泊)	⑩明石元二郎総督墓所(慰霊式)
第7次訪問 20名 H.17.11.23～26 水～土 ガイド 林 英志 神職 なし 旅行社 近畿日本ツーリスト (13ヶ所)	①保安堂 ②寿山公園 ③交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻) (台南泊)	④飛虎將軍廟(慰霊式) ⑤奇美博物館 ⑥烏山頭ダム ⑦交歓会(台湾台日海交聯誼會) (台中泊)	⑧日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台湾中日海交協會) ⑨交歓会(台中市日本文化協會) →孔子廟 →台中公園 ⑩交歓会(沈芳以・呉月雲ご夫妻) ⑪夜市 (台中泊)	⑫明石元二郎総督墓所(慰霊式) ⑬芝山公園(慰霊式)
第8次訪問 35名 H.18.11.23～26 木～日 ガイド 簡 添宗 神職 なし 旅行社 協進観光 (11ヶ所)	①保安堂(慰霊式) ②交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻) (台南泊)	③飛虎將軍廟(慰霊式) ④奇美博物館 →交歓会(許文龍先生) ⑤烏山頭ダム →八田與一記念館 ⑥交歓会(台湾中日海交協會) (台中泊)	⑦日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台湾台日海交會) ※台中市日本文化協會合流 ⑧国史館台湾文献館(調査) ⑨濟化宮 (台北泊)	⑩高砂義勇隊戦没英霊記念碑(慰霊式) ⑪講話(蔡焜燦先生) →交歓会(台日文化經濟協會)
第9次訪問 25名 H.19.11.23～26 金～月 ガイド 簡 添宗 神職 なし 旅行社 協進観光 (13ヶ所)	①保安堂(慰霊式) ②奇美博物館 →交歓会(許文龍先生) ③交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻) (台南泊)	④飛虎將軍廟(慰霊式) ⑤烏山頭ダム →八田與一記念館 ⑥貞愛親王殿下登陸記念碑 ⑦交歓会(台湾台日海交會) ※台中市日本文化協會合流 (台中泊)	⑧日本人墓地(慰霊式) →宝覺寺(慰霊祭) →交歓会(台湾中日海交協會) ⑨濟化宮 ⑩夜市 (台北泊)	⑪中華民國外交部 ⑫台北101ビル ⑬交歓会(台日文化經濟協會)

※ →について ①同じ所在地の中での移動、②ガイド以外の同一人による連続した案内箇所

●ご協賛ありがとうございました。

旅行代理店
(社)日本旅行業協会会員
(株)JTBトラベル九州
取締役支店長 弓岡 正敏
☎(092)732-8811
〒810-0001
福岡市中央区天神3-2-8
エクスプレビル3階

教育正常化教職員ネットワーク
福岡教育連盟
執行委員長 副島 賢三
☎(092)631-2901
〒812-0045
福岡市博多区東公園7-7
福岡県庁地下1階

ふれあい 学びあい 助けあい
九州不動産専門学校グループ同窓会
九 栄 会
会長 角 洋一郎
☎(092)714-4341
〒810-0001
福岡市中央区天神1-3-38
天神121ビル13階

台湾慰霊の旅 訪問先・交歓先一覧

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目	第5日目
第10次訪問 31名 H20.11.22～26 土～水 ガイド 簡 添宗 神職 なし 旅行社 JTBトラベル九州 (18ヶ所)	①高砂義勇隊戦没英霊記念碑(慰霊式) ②芝山公園(慰霊式)	③保安堂(慰霊式) ④東方技術学院 ⑤奇美博物館→交歓会(許文龍先生) ⑥飛虎將軍廟(慰霊式) ⑦交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻)	⑧烏山頭ダム→八田與一記念館 ⑨鹽水國民小學→八角樓 ⑩交歓会(黄明山・葉美麗ご夫妻) ⑪貞愛親王殿下陸記念碑 ⑫富安宮 ⑬交歓会(台灣台日海交會)	⑭日本人墓地(慰霊式)→宝覺寺(慰霊祭)→交歓会(台湾中日海交協会) ⑮濟化宮 ⑯夜市	⑰中華民國外交部 ⑱交歓会(台日文化經濟協會)
第11次訪問 30名 H21.11.22～26 日～木 ガイド 簡 添宗 神職 なし 旅行社 JTBトラベル九州 (18ヶ所)	①保安堂(慰霊式)	②鵝鑾鼻公園 ③潮音寺(慰霊式) ④巴士海峡(献花式) ⑤奇美博物館→交歓会(許文龍先生) ⑥飛虎將軍廟(慰霊式) ⑦交歓会(黄明山・葉美麗ご夫妻) ⑧夜市	⑨烏山頭ダム→殉工碑(献花式)→八田與一記念館 ⑩交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻) ⑪鹽水國民小學(歓迎式典)→八角樓 ⑫交歓会(黄崑虎先生) ⑬交歓会(台灣台日海交會)	⑭日本人墓地(慰霊式)→宝覺寺(慰霊祭)→孔子廟→交歓会(台湾中日海交協会) ⑮濟化宮(慰霊式)	⑯高砂義勇隊戦没英霊記念碑(慰霊式) ⑰中華民國外交部 ⑱交歓会(台日文化經濟協會)
第12次訪問 46名 H22.11.22～26 月～金 ガイド 簡 添宗 徐 永隆 神職 なし 旅行社 JTBトラベル九州 (19ヶ所)	①芝山公園(慰霊式) ②講話(蔡焜燦先生)	③烏山頭ダム→殉工碑(献花式)→八田與一記念館 ④交歓会(何怡涵・陳清華ご夫妻) ⑤海尾朝皇宮(献花式)→飛虎將軍廟(慰霊式) ⑥保安堂(慰霊式) ⑦交歓会(黄明山・葉美麗ご夫妻)	⑧鹽水國民小學(歓迎式典) ⑨交歓会(ラハウル會) ⑩宝覺寺(A班)、台中公園(B班) ⑪交歓会(台灣台日海交會) ⑫夜市	⑬日本人墓地(慰霊式)→宝覺寺(慰霊祭)→交歓会(台湾中日海交協会) ⑭勸化堂(献花式) ⑮濟化宮(慰霊式) ⑯交歓会(紅乙女酒造)	⑰高砂義勇隊戦没英霊記念碑(慰霊式) ⑱交歓会(台日文化經濟協會) ⑲中華民國外交部

※ ⇒について ①同じ所在地の中での移動、②ガイド以外の同一人による連続した案内箇所

●ご協賛ありがとうございました。

総合印刷
大道印刷(株)
 代表取締役 今村 由紀男
☎(092)582-0927
 〒816-0873
 春日市日の出町6-23

日台の生命の絆
日華(台)親善友好慰霊訪問団
 台湾支部長 黄 明山
☎(07)751-4906
 〒830-0092
 高雄縣鳳山市南正一路2巷11弄5號

ひとをつくり まちをつくり くをつくる
九州不動産専門学院グループ
 代表 小菅 亥三郎
☎(092)714-4131
 〒810-0001
 福岡市中央区天神1-3-38

第12次 台湾親善友好慰霊訪問の旅 帰朝報告

期間 平成二十二年十一月二十二日(月)～二十六日(金)

参加者 四十六名

■十一月二十二日(月)

機内放送で訪問団を呼名

現地合流組を含めて四十六名の今次訪問団員のうち、二十二日福岡出発の二十八名は、八時に福岡空港国際線出発ロビーに集合し、出国手続きを終えた後、VIPルームで簡単な出発式を行いました。第十次と第十一次は、台湾の蔡國恵さんに桃園空港以降の行動をDVDに収録してもらいましたが、今回はシネマトグラフにお願いしましたので、同社の又丸育次さんが福岡から団員として参加されました。VIPルームでの出発式を終えようとした時、中華航空・JTB・新亞旅行社の各支店長がわざわざ訪ねて来られて挨拶をされました。その後記念写真の撮影をして、いつも通りチャイナエアライン一一便に乗り込みましたが、離陸前の機内放送に耳を疑いました。客室乗務員の方が「本日も搭乗の皆様。並びに日華(台)親善友好慰霊訪問団の皆様、本日もチャイナエアラインをご利用いただき、有難うございます」と訪問団を固有名詞でアナウンスされたのです。支店長直々のお見送りといい、十二回続けてきた訪問団に対する暖かいエールだと有難く思いました。定刻より十分遅れて十時二十分に福岡空港を飛び立った飛行機は、定刻より五分程遅れて現地時間十一時四十五分、台湾の桃園国際空港に無事着陸しました。入国手続きを済ませて空港の待合室に行くと、すっかり顔馴染みになったガイドの簡添宗さんが暖かく一行を出迎えて下さいました。成田出発組と合流するまでの空き時間を活用し、班毎に各自自己紹介をして、参加の目的や経緯を披露しました。頃合いよく成田出発組の六名の団員の皆さんが到着しましたので、彼等にも自己紹介をしてもらい、専用バスへと乗り込みました。

最初の訪問地は三芝郷の福音山クリスチャン墓地にある明石元二郎台湾総督の墓所でした。ところが、バスの運転手の準備不足で道がわからずに墓所に到着することができず、最終的に団長の判断で断念しました。六月五日の第八回台湾特別講演会で、黄文雄・明石元紹両先生に明石元二郎総督についての講演をしていただき、墓参を楽しみにしておられた団員の方も多く、主催者として誠に申し訳なく、断腸の思いです。今回「事前の確認」の確認がいかにか大事かを身をもって体得しました。

二度目の幻想的な墓参

気を取り直した一行は台北市内へ戻り、士林の芝山公園内にある「六士先生の墓」を訪れました。しかし十七時を回っていて日が暮れかかっており、ランタンの明かりを頼りに山中にある墓前に到着しました。お墓の周りは足元が悪く転倒の危険もありましたので、一部の人のみ墓前に集い、他の人は遊歩道上でのお参りとなりました。六名の先生のご冥福をお祈りして黙祷を捧げた後、小菅団長と教育界を代表して福岡教育連盟の藤村一先生に献花をしていただきました。丁度二年前の第十次訪問の時も六士先生の墓参が十八時過ぎになり、二度目の幻想的なお墓参りになりました。

蔡焜燦先生から講話

一時間程して下山した一行は一旦ホテルにチェックインした後、夕食会場の「梅子」へと向いました。実は出発の前日、台北在住の蔡焜燦先生から、台北市内の夕食会にご一緒したいと申し出があり講話をお願いしました。ところで訪問団が先生とお会いするのは二度目で、第一回は第八次訪問の最終日の昼食会場でした。この日鳥来の高砂義勇隊戦没英霊記念碑を訪れて慰霊式を齎行したのですが、台北へ戻る際に渋滞に巻き込まれ、蔡先生との約束の時間に一時間以上も遅れてしまったのです。怒ってもう待っておられないだろうとの思いで会場に着くと、先生は「帰ろうと思ったが、あなた方が鳥来に参拝に行っていると聞いて、待つことにしました」と汗顔の私たちを思いやり講話と食事におつき合いしていただきました。

あの時の二の舞いにはならず、少し遅れた程度で会場につき、先生と名刺交換をして席につきました。開宴に先立ち、仲介の労をとって下さった原田泰宏氏が「鶴亀」を舞われて先生のご長寿をお祝いされました。講話をお願いしたところ、皆さんお腹が空いているだろうから食事をしながら話しましょうと、ご配慮下さいました。講話は明石元二郎総督のエピソードから、荒牧賢二氏が顧問をされている紅乙女酒造の胡麻焼酎にまつわる話まで実に多岐に亘り、時には鋭いブラックユーモアを交えて「空き管」批判まで飛び出して、飽くことがありませんでした。

二十一時過ぎ、蔡先生との名残を惜しみつつ、一行は宿泊先の三徳大飯店に戻りました。ただ希望者十三名は、紅乙女酒造の荒牧さんの粋な取っ払いで用意されたスナックでカラオケに興じ、大いに盛り上がりました。

■十一月二十三日(火)

ホテルで早目の朝食を摂った後、一行は台北駅八時発の新幹線に乗り、台南駅までの一時間四十五分間快適な新幹線の旅を楽しみました。台南駅で専用バスに乗り換えた一行は、烏山頭ダムを目指しました。十一時にダムに到着すると、早速八田與一・外代樹夫妻の墓前に整列しました。昨年よりも更に周囲の整備が進んでいるのを確認して安堵しました。全員で国旗敬礼、国歌斉唱後、ご夫妻の御霊の平安を祈って黙祷を捧げ、名誉顧問の日高誠氏が墓前にお花を供えられました。その後各人がお線香を上げて回向を済ませダムの中腹にある殉工碑へと向かいました。ダム建設の過程で犠牲となられた方々を日本人と現地の方を分け隔てることなく手厚く弔っているこの碑を見るたびに、台湾の人も内地の人と同じと考えた先達の心の広さに感動を覚えます。碑前で黙祷を捧げた後、建設会社を営んでいる松俵義博常任顧問が団を代表してお花を捧げ、献花式を終えました。

その後八田與一記念館で、八田技士の遺業を紹介するDVDを観賞しましたが、昨年迄はいつもこの記念館には林溪和さんがおられて、「領台時代に感念」等のご自身の著書を頒布されていました。けれども昨年急逝され、第十一次までのおつき合いになってしまいました。もっと領台時代の日本の良さをお聞きしておけば良かったと惜しまれます。

台湾で日本料理に舌鼓

烏山頭ダムの訪問を終えた一行は、昨年と同じ新營市の、「小園日本料理店」で何怡涵・陳清華ご夫妻のご歓待を受けました。一年振りの再会でしたが、お二人ともお元氣なので安心しました。会場には陳さんのお弟さんの陳徹さんをはじめご親戚の方々や塩水小学校の劉信卿校長先生、台南縣政府の蘇煥智縣長の秘書の張淑娥さん等懐かしい方々がご集まりでした。何さんのご挨拶、小菅団長の答礼の挨拶、記念品の交換に続いて乾杯となり、昨年同様美味しい日本料理に舌鼓を打ちました。何・陳ご夫妻はともに八十歳を超えておられ、齢と共に足腰が弱られることは判りますが、何だか最近顔艶がよく、精神的に充実してあるのではないかと思います。各テーブルで大いに盛り上がりつつ、来年の再会を固く約して、次の訪問地である海尾朝皇宮へと向かいました。

海尾朝皇宮を初めて訪問

海尾朝皇宮は昨年までの行程にはなかった所で、飛虎將軍廟の上宮にあたるそうで、飛虎將軍廟にお参りする前にここにお参りするのが礼儀であるとして、飛虎將軍廟顧問の蔡志宏氏から要請されて今次採用した訪問先です。現地に着くと爆竹で迎えられ、確かに飛虎將軍廟より大きな堂で風格は感じられました。蔡氏の進行で、献香・献花・献果の献上式と寄付金の贈呈式は十分程で終わり、直ちに飛虎將軍廟へ移動しました。

飛虎將軍廟では恒例の爆竹による熱烈歓迎を受けましたが、殊の他今年は爆竹の音が大きく感じられました。つい最近当地で祭事があったばかりだそうで、供物も例年より豪華に感じられました。いつもでしたらここで訪問団独自の慰霊式を齎行していたのですが、今回は蔡顧問の進行で、国歌斉唱、献上式(香・花・酒・煙草)、祭文奏上、玉串拝礼、「海ゆかば」斉唱、萬歳三声と本来の作法に従って執り行われました。その後地元の皆様方と交歓し、バナナやジュースを沢山お土産にいただきました。今までと少し勝手が違うのは、これまで中心的存在であった呉金魁氏が亡くなられたことも影響しているのかと想像しましたが、皆様の暖かさは基本的に変わっていないことにホッとしました。

常任顧問が龍柱二柱を奉納

この日最後の訪問地、高雄の保安堂に着いたのは十八時を回っていましたが、趙麗恵さんをはじめ地元の方々が多名程集まっておられ、一年振りの再会を喜び合いました。早速班毎に整列して、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷、献花、団長挨拶の順序で慰霊式を齎行しました。現在堂を新築中で、完成は来年以降になりそうですが、松儀義博常任顧問が龍柱を二柱奉納されたことへの御礼として感謝状が団長と常任顧問に贈呈されました。龍柱は堂々たるもので荘厳でしたし、傍らの「龍柱の沿革」の銘板も立派なもので、完成が楽しみです。

建設中のお堂を見学した後、いつもの美味しいぜんざいやバナナ、ボンカン、お菓子が歓待を受け、地元の方々とは談笑したり、「にっぽんぐんかん」を見学したりして、しばし和やかな時間を過ごしました。周囲はすっかり暗闇に包まれ、十九時近くになりましたが皆さんいつまでも名残を惜しまれ、お暇乞いをするのが心苦しい限りでしたが、来年の再会を約してバスに乗り込み出発しました。

大好評だった団長の

「アイビージャエイヤー」

バスは三十分程で黄明山台湾支部長主催の歓迎夕食会場に到着し、黄支部長をはじめご家族の皆さんや支部長の会社の方など大勢の皆さんに暖かく迎えてい

ただきました。黄楷棻の通訳で支部長の歓迎の挨拶、団長の答礼の挨拶、お土産贈呈に続いて祝宴となり、身内同士の心安さもあって、各テーブルともに大いに盛り上がりしました。支部長ご夫妻がそれぞれのテーブルを回られて全員に挨拶されましたが、この作法は日本では以前から実行されており、日本精神がここにも受け継がれていると感慨を深くしました。最後は団長が「アイビージャエイヤー」を台湾の皆さんと台湾語で熱唱して締め、二時間の祝宴はお開きになりました。その後一行は宿泊先の華王大飯店で旅の疲れを癒しました。

■十一月二十四日(水)

三日目の最初の訪問は塩水小学校です。昨年、私達の為に三ヶ月間も練習をして待ってくれていたにもかかわらず、一時間も子供達を待たせてしまい、申し訳なかったという反省から、今年が一番最初の訪問にしました。小学校に到着すると劉信卿校長先生をはじめ大勢の児童が待っていてくれましたが、その中に、昨日の歓迎昼食会を開いて下さった何怡涵・陳清華ご夫妻の姿もありました。

龍舞と楽器の演奏に感動

まず小学校高学年の子供達が龍の舞を躍動的に披露してくれました。ぴつたりと全員の息の合った踊りかたを吞んで見守っているうちに、大変だったであろう練習を思い、目頭が熱くなりました。次に、赤いベレー帽とスカートの幼稚園児による太鼓やシンバルの演奏、更に小学校低学年の子供達の勇壮な演奏と続いて、歓迎会は盛り上がりを見せました。子供達と記念写真を撮った後、校長先生の案内で、出来たばかりの和風の教室に入り、記念品を交換した後、映像を使った学校紹介を見ました。真新しい教室を使うのは私達が第一号と聞き、気を使って下さっているのだなあと感動しました。その後校内にある神社に二礼二拍手一礼で参拝しましたが、昨年奉納した願い事を書いた竹を発見し、一年前を懐かしく思い出しました。この間、無邪気な子供達に名刺をせがまれ、大盤振る舞いしましたが、大切に保管して将来台湾の要人になった時にひょっこり見せてくれたら嬉しいだろうと想像したりしました。塩水名物のラーメンをお土産にいただき、明るい子供達の笑顔に見送られながら、塩水小学校を後にしました。

子供達に元氣をもらった一行は、ラバウル会の皆さんが待っておられる台中市を目指しました。ラバウル会の王春茂会長がぜひ自分達の会でも歓迎したいとかねてより申されていたのですが、今回初めて実現しました。会長ご夫妻以外は殆んど初対面の方々でしたが、すぐに打ち解けて戦地での話や健康の話題に花が咲き、あっという間に二時間が過ぎました。

宝覚寺をゆっくりと散策

ラバウル会の皆様と別れた後、本来は台中市政府を表敬訪問する予定でしたが、出発直前に台湾の五大都市選挙の準備で忙しく十分な接遇ができないので今回は見合おせたいとの連絡があり、急遽宝覚寺の見学に切り替えました。宝覚寺に着くと、明日の慰霊祭の準備が整っていましたが、境内は他の団体客も含めそれ程人影が多くなく、ゆっくりと散策できました。毎年訪れていますが、いつもは慰霊祭が終ると記念写真を撮って次の懇親会場へと慌しく移動し、時間的な余裕がなかったのですが、今回は閑かな境内を心ゆくまで堪能できました。宝覚寺本殿を包み込むように大きな屋根がしつらえてあり、台湾の方々宝覚寺を大切に保存しようという暖かい心根を感じることができたのかとても印象的でした。

Bプランの団員と無事合流

宝覚寺を後にした一行は、この日の宿泊先である通豪大飯店で、二泊三日のBプランの十一名の団員と合流しました。Bプランの皆さんと名刺交換や自己紹介をして、ホテルで一息ついた後、総勢四十六名の大部隊となった一行は、台湾台日海交会主催の歓迎会に臨みました。二列縦隊で会場に入場すると、林徳華会長をはじめ顔馴染みの会員の皆様が拍手で迎えて下さいました。海交会の皆様と混在の席に着くと、林会長の挨拶に続いて、小菅団長、海原会の洪井氏、石川県海交会の湊氏がそれぞれ挨拶をされて、開宴となりました。旧知の方が多く、初参加の方も直ぐに打ち解けて、談笑やカラオケに興じましたが、その中に海交会会員であった故林溪和氏の娘さんの林瑜娟さんと娘婿で前回と前回DVDを制作してもらった蔡國恵さんの姿があり、想い出話に花を咲かせました。ただ、年々日本の戦友会の皆さんの参加が少なくなっているのが気がかりで、それだけに八十歳代から三十歳代まで幅広い参加者を擁する慰霊訪問団の存在意義は大きいと感じました。

翌日の宝覚寺での再会を約して海交会の皆さんと別れた一行は、台湾名物の台中市の夜市見学に繰り出しました。珍しい食材やフルーツ、衣料品等の露店が軒を連ねる夜市をそぞろ歩きしながら、休日の前だけではなく、毎晩開かれている夜市に集う人々の活力が、中国と対峙して渡り合う台湾の原動力となっていることを今年もまざまざと感じました。小一時間の心地よい散策の後、ホテルに戻ると中日海交協会の胡順來会長が、団員へのお土産のピーフンと龍眼を持って待っておられました。お礼を述べて受け取りましたが、翌日の懇親会での再会を楽しみにお嬢さん、お孫さんと一緒に愛車に乗って帰られました。

■十一月二十五日(木)

日本人観光客も一緒に焼香

昨日Bプランの団員と合流した一行は、大型バスとスタッフ車輛の二台で、慰霊訪問の最大の目的である「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列するため宝覺寺へ向いました。門前に飾られた慰霊団の花輪の前を二列縦隊で行進して境内に入り、先ず日本人遺骨安置所(日本人墓地)において団独自の慰霊式を齎行しました。お酒と果物をお供えした後、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷、献花、団長の挨拶に続いて二人ずつお線香を上げて、一万四千余柱のご冥福をお祈り申し上げました。私達の慰霊式を遠まきに見ておられた日本人観光客十数名にも声をかけて焼香してもらい、一緒に回向しました。記念写真の撮影には「日台の生命の絆」の横断幕の他に、林溪和さん愛用の横断幕を娘さんからお借りして、林さんの霊にも参加してもらいました。

その後、「靈安故郷」の碑の前の慰霊祭会場へ移動し、参列しました。今年も我々訪問団が最大の団体で、日台両国共に参列者の先細りが懸念されます。許世楷前駐日台湾代表もそのことを心配され、挨拶の中で「来年からはもっと沢山の台湾の若い人達を連れてきて、両国の交流の場を拡充していきたい」と述べられたのが心を打ちました。各団体の長の祭文奏上の中で、今年も小菅団長の祭文は、日台両国の歴史的なかかわりから昨今の緊迫した東アジア情勢を踏まえた上で、日台の絆の強化を力強く訴える格調高いもので、多くの参列者の共感を博しました。

慰霊祭が終ると、台湾の皆さんと一緒に記念写真を撮り、三万三千余柱の位牌や英魂観音亭、布袋様の大仏等を見学した後、懇親会場へと向かいました。会場には中日海交協会の皆さんがお揃いで、昨夜お土産をホテルへ届けて下さった胡順來会長の挨拶、小菅団長の答礼の挨拶の後、懇親会が開宴しました。酒盃を重ねるうちに宴は盛り上がりを見せ、胡会長が今では珍しくなったアコーデオンを弾いてサービスして下さいました。一年振りの再会で話は尽きませんでした。名残を惜しみつつかお暇乞いをしました。

感動的だった劉維添さんの話

ここで藤田達男東京支部長が合流され、総勢四十七名で、次の訪問地勸化堂を目指しました。勸化堂は今初めて訪ねるところで、林阿勇さんが自分が案内するから、ぜひ寄ってほしいと懇願されて実現しました。苗栗縣の獅頭山にある勸化堂は、フィリピンのマニラで台湾兵に帰国命令を発し、自ら生命を断った広枝警部をお祀りするお堂で、バスを降りると地面に水溜りができていたことから直前まで雨が降っていたようで、第四次訪問の芝山公園の時と同様、私達が到着すると雨がやむという不思議な現象に、ご英霊

のご加護を感じました。階段を登って講話室に着くと、警部の命令を受けた台湾人の最後の生き残りの劉維添氏が黄錦源理事長と待っておられ、原稿を手に当時のいきさつ等をかみしめるように日本語で語られました。警部への恩義がひしひしと伝わり、「最後の一人となった私が、命ある限りお祀り申し上げる」と語られるお姿に熱いものがこみ上げました。因みに、日本人の慰霊団では私達が初めてと聞き驚きました。感動的な講話を拝聴した後、本殿にお参りして下山しましたが、山上からの眺めは絶景で、了度夕陽が沈みかけていて、オレンジ色の光が非常に神々しく、神秘的な雰囲気でした。

勸化堂を後にして、台湾の靖國神社濟化宮に着いた時は十八時を回っていて、周囲は暗闇に包まれていましたが、山門の電飾と「歓迎訪問団」の電光掲示板が出迎えてくれました。予定より一時間以上遅れたにもかかわらず、謝鏡清董事長らが待って下さっていました。早速本殿へ昇り、献花に続いて二礼二拍手一礼で参拝した後、永石辰郎氏が自筆の靖國神社の日本画を奉納されました。その後靖國神社から分祀された四万余のご英霊の霊璽を拝見させていただきました。社務所の前でいつものお餅とお茶を美味しくいただきました。おそくまで接待していただいたお礼を述べ、来年の再会を約して下山し、台北市内へと向かいました。

夕食会場に着いたのは二十一時十分で、かなり遅れましたが、会場に新亞旅行社の社長とバス会社の担当者が、初日の不手際のお詫びに來られていました。二度とこういうことのないように確約してもらって帰っていただきました。夕食の後、初日同様紅乙女酒造の荒牧氏が二次会を設けて下さいましたので、希望者十名がご好意に甘え、台湾旅行最後の夜を満喫しました。

■十一月二十六日(金)

澄み切った空気の中で慰霊式

訪問最後のこの日は、ホテルで早めに朝食を摂り、七時過ぎに鳥來に向けて出発しました。台北市内の渋滞に巻き込まれることなく順調に八時三十分には鳥來に到着し、高砂義勇隊戦没英霊記念碑の前に集合しました。澄み切った空気の中で、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷、献花、団長挨拶と慰霊式を齎行し、勇猛果敢に戦い散華されたご英霊に追悼の誠を捧げました。高砂義勇隊記念協会の皆さんのご尽力で公園の整備が進み、碑文も覆われることなく日の目を見て、ご英霊もさぞかし安堵なさっていることと思えました。

慰霊式を終えて鳥來首長文化村に立ち寄り、茶菓のもとなしを受けながらショッピングを楽しみました。お店の眼前には壮大な瀑布があり、そこで記念写真を撮ったりして現地の方々とも交流を深めました。

一息ついた一行は台北市内に戻り、土産物店に立ち寄ってショッピングを楽しんだ後、日台文化経済協会主催の歓迎昼食会に臨みました。昨年と同じ会場の逸郷園に到着すると鄭耀燾会長以下協会の理事の皆様がお店の入口で待っておられ、握手で出迎えて下さいました。団員の一人ひとりの名前が書かれた席札が各テーブルに準備されており、昨年同様細やかな配慮を感じ入りました。鄭会長の歓迎の挨拶、団長の答礼の挨拶が終わると早速食会に移り、これまでとは少し違う素朴な客家料理に舌鼓を打ちました。料理の早い段階で御飯が出て、御飯と一緒に料理を楽しむのが特徴とかで、すぐ後に外交部表敬訪問を控えた私たちには打ってつけの内容で、ここでも協会の皆様の配慮を感じました。来年の再会を約した後一行は、会場すぐ近くにある中華民國外交部を表敬訪問しました。

ユーモア溢れる話術で団員を魅了

当初は午前中に予定されていたのですが、参加者が四十七名に増えたため、収容定員の関係で午後に変更になりました。広いレセプションルームに通された一行を待ち受けておられたのは、昨年接待された外交部亞東関係協会副秘書長の粘信士氏です。名刺交換、記念品交換に続いて、粘氏が六ヶ所の辦事處に勤務し、大阪が一番長かったので関西訛りであるとユーモアたっぷり自己紹介された後、先祖からの日台関係を維持、発展させることが自分たちの責務であると強調されました。小菅団長は、三万三千余柱のご英霊を今も顕彰し、宝覺寺を大切に遺しておられる台湾の皆様へ謝意を述べた後、今次的特徴と永続的な全国版のプロジェクトに発展してきたことを答礼で話しました。成田組の飛行機時間の関係で質疑応答は割愛し、全員揃っての正式な挨拶もなйма慌しく退去し、記念写真の撮影も省略してバスに乗り込み、失礼であったと反省しています。

空港へ向かう途中一時渋滞に巻き込まれ、ヒヤリとしましたが、ぎりぎり成田組は搭乗時刻に間に合いました。福岡組は時間的に余裕があったので、五日間お世話になったガイドの簡さんにお礼を述べ、来年のお世話をお願いして出国手続きに移りました。

福岡組の三十九名は十七時三十分発のチャイナエアライン一一〇便で桃園国際空港を飛び立ち、二十時四十分(日本時間)、福岡空港に着陸しました。入国手続きを済ませた一行は、空港ロビーで簡単な解散式を行い、全員の無事の帰国と台湾の皆様方の心温まるおもてなしに感謝しつつ、沢山のお土産と思い出を抱え、一月の帰朝報告会での再会を約して帰路につきました。

(文責 原田和典)

第12次 台湾親善友好慰霊訪問の旅 紀行文集(抄)

配列は名誉顧問・常任顧問・副団長・班長・副班長・一般団員の順とした。

日本の為に従軍して戦死された
台湾人の慰霊に参加するのは
日本人の義務であるひだか まこと
名誉顧問 日高 誠氏

昨年引き続き二回目の台湾慰霊の旅に参加して、八十歳以上の老人は私と同期生の永石君の二人だけだろうと思っていたら、出口清氏と田中純夫氏の二名の四名であって心強い次第であった。出口氏は陸軍の司令部偵察機のパイロットで、台湾の台北地区の飛行場におられた由。また田中氏は陸軍の整備兵として満州の錦州の飛行場におられた由、私の部隊の特攻機一ヶ隊六機が二十年の六月に展開しお世話になった飛行場である。

今回は初めての参加の方が多く昔話をしてみると懐かしい次第であった。私の部隊は北朝鮮の日本海側の威興地区の海岸に在った飛行場で、少年飛行兵の戦闘機の教育飛行隊であった。敗戦後ソ連の飛行機が着陸して来て、部隊長以下全員捕虜になりソ連に抑留されたのであるが、田中氏は入院中で捕虜にならずに済んだ、との事であったが、私は四年間もソ連の捕虜生活を送ったのである。

又四国の香川県からB班として参加された森靖子さんと福岡滋子さんは昨年参加した同期生の谷尾君の縁によるものである。ご二人の友人、さぬき市の玉貴幸子さんの父君は支那事変で戦死されているが、その戦死の通知文が大変父君を讀んでいるのに感銘を受け(幼時は全く理解不能)、発信者横井忠道部隊長のせめて遺族にでも感謝の意を表したいと強く願う昨今となった。香川県偕行会員の某氏が「五八期に横井姓の生徒がいた、同期生の世話人谷尾君に依頼すれば、その生徒が遺族か否か調べてくれるだろう」と勧告された。上記の調査依頼を受けた谷尾が調べたが、五八期の横井は全く無縁。そこで偕行会員名簿で全会員を調べると、東幼四八期(幼年学校二年生で終戦)に横井忠康が居る事が判明し、横浜の横井忠康君に電話を入れて見るとズバリ御子息であった。この事を玉貴さんに連絡したら大変な喜びよう(平成十九年十二月)、お墓に刻んであ

る白文の読み方を連絡したり、文通を続けていたが二十二年三月発行の台湾慰霊の[LICENSE MATE]を送り、「こんな奇特な旅行団がある事を広く世間に知らせて下さい」と一筆した。それを讀んだ友人が感激され四人参加の予定であったが、お二人が体調での取り止めもあり、森・福岡両女史が参加されたものである。

今回の参加で特に感銘を受けたのは、済化宮の山の東側にある苗栗県の獅頭山勸化堂の参拝であった。台北の六士の墓と同様に百段位の階段には膝の悪い小生には応えたが、日本の禅宗の曹洞宗に相当する由で、新竹警友会の海軍警察の出身者(九十一歳)の話であった。台湾人二千名から選ばれた警察官五百名は日本人の警察隊長広枝氏に率いられて比島のマニラに行った。昭和十九年正月米軍が上陸し、我々も戦ったが戦勢利あらず、全滅の直前広枝隊長は我々台湾出身の者を集めて、「お前達台湾人はどんなことをしても良いから、生きて台湾に帰れ。おれは独断で命ずるので、その責任を取って自決する。」と言って自決された。そのお蔭で今日の私共がある。毎年その遺徳を偲んで慰霊祭を実施して来たが、今や私一人になった。然し死ぬまで私は慰霊を続けます。「どうか日本人の皆さん米軍にやられた教育勸話を復活して下さい、それが日本再建の道です。」と言われたことである。マニラの戦闘状況は調べた事があるが、今回の話は初めて聞く話であり、占領行政に警察官が必要な事は分かるが、如何なる考え方で台湾人の警察官を募集し、連れて行ったのか私には八田技師を連れて行ったのと同様に理解に苦しむ次第であり、今後の研究課題にしたいと思う。

王春茂会長以下のラバウル会の皆さんに歓迎をうけたのであるが、これもあの南半球のラバウルに農業指導員として五百人も台湾人軍属を連れて行ったのか、当時の軍の考え方が良く分からない次第である。

宝覚寺に於ける慰霊祭に際して有名な許世楷氏の尊顔を拝した事は、かねて谷尾君から「台湾という新しい国」と云う本を讀めと薦められ讀んでいたもので無上の喜びであった。

許御夫妻が日本に留学し、日本の大学の教授になられ、人権問題・憲法問題に造詣が深く留学生時代に国民党政権によりパスポートの交付を拒否されたり、送金も儘ならなかった話を讀んでいたで、台湾人の心意気を知るには是非皆さんにも讀んで欲しい本である(まどか書房)。今回は特に松俵夫妻や若い藤村一氏とじっくり話が出来て有意義であった。一人でも二人でも同志と言える方と御交誼出来る事は幸せである。小菅団長夫妻・黄さん・原田さんのご好意に感謝しております。

奉納した龍柱と銘板に感動

まつだわら よしひろ しげこ
常任顧問 松俵 義博 藤村班 茂子氏

日華(台)親善友好慰霊訪問団として第十一回と第十二回と参加させていただいて日本と台湾との友好のきずなをあらためて実感しました。四泊五日のスケジュールの中で初日よりハブニングにびっくり。大型バスの移動大変だったですね。二回目の参加で保安堂の龍の柱を見る事が出来感動し、少しでも役に立てたと思うと訪問団に出会えて本当によかったです。

小菅団長ありがとうございました。

塩水小学校では校長先生や生徒の皆さんのやさしい笑顔、蛇踊り、鼓笛隊のかわいいしぐさなどの歓迎を受け思い出になりました。

十一月二十五日の宝覚寺での戦役者大慰霊祭で奏上された小菅団長の祭文は大東亜戦争で散華された台湾の方々への最大の感謝の気持ちがかぎまれており、日本軍人として従事した戦友のご英霊をお祀りし感謝の意を祈りつけて下さっている地元の方々にも胸を打たれました。

また、行く先々の皆さんのお出迎えやたくさんのお接待と心温まるおもてなしに厚くお礼申し上げます。

本当に参加してよかった。再会も出来たし又新しい出会いがあり感謝感謝です。

日華(台)親善友好慰霊訪問団のますますのご発展とこれをささえてくれたスタッフの皆さんに厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。又の機会を楽しみに。

真実で尊い行動は 必ず継続される

ながた まさみ
副団長 永田 昌巳氏

第十二次日華(台)親善友好慰霊訪問団に参加した。昨年に引き続き二回目の台湾訪問である。昨年の訪台では五十年に及ぶ日本の領台政策の歴史について全くの無知であり、台湾が親日国家であることすら少々の疑問を持つての訪問であった。

しかし実際、台湾の地を踏んで初めて日台の永い歴史の真実に触れ、そこに誇りある日本魂の存在を確かめることが出来た。領台五十年、大東亜戦争終結後六十五年を経た今日、日本精神が何故台湾で不滅なのか問わざるをえない。それは大東亜戦争を共に戦い散華した日台の同胞に対しての敬虔なる祈りの中に見出せる。

これも偏に領台時代の教育と十一年に及ぶ永きにわたっての日台交流の成果である。

この尊い日台の家族(兄弟)交流の歩みについて、小菅団長は「幾多の万難を排しての国家的・民族的課題を担った十一年であった」と回顧され、十二年目の出発にあたり、皆様と一緒に「海の彼方のニッポン・台湾を訪問する」と崇高で尊い決意をされた。私にとっても今回の第十二次訪問団への参加は日本人としての責任の一端を背負っての参加であった。

訪問の初日は旅行社の不手際でわが郷土の偉人、明石元二郎台湾総督の墓参りが出来なかった。ご令孫の明石元紹先生を招いての特別講演会にも出席し、心待ちの墓参りだけだけに残念であった。

台北の六士先生の墓参りも私にとっては初めてであり、心打たれるものであった。日本統治時代の教育がここまで台湾を変えたのかと思うと感無量であった。それに引き換え今日の日本の自虐・偏向教育の現状をみるとときやるせなさを感じずにはいられない。

日本が台湾統治を始めた明治二十八年(一八九五)真っ先に行ったのが教育への取り組みであった。優秀な教師が日本から台湾へ派遣された。そして台北・芝山の地で芝山巖学堂として台湾人への教育が始まった。

私たちが到着した芝山公園はもうすっかり暗くなり、小高い丘は森に囲まれ、足元はおぼつかなかった。石段を

登りつめるとそこに街燈に照らされ浮かび上がった六士先生の墓をしっかりと確かめることが出来た。岩盤の上に建てられた墓に手を合わせると脳裏がいたむ。

当時、新年祝賀のため総督府に向かった六人の日本人先生は日本統治に反対する暴徒により惨殺された。死をも覚悟して授業を続け「死して余榮あり、実に死に甲斐あり」と台湾の教育に身も心も打ち込んだ六士先生の墓前に立つ時、畏敬の念におののかざるを得ない。

この墓は芝山巖学堂百年祭を記念して平成七年(一九九五)一月一日に新たに建てられ、今この日には台湾の全ての学校で一斉に黙祷を捧げるといふ。台湾教育のメッカで日本教育を受けた者の何とも崇高なる日本魂・芝山巖精神であろうか。

台湾各地を訪問し又、慰霊祭に参加して思われることは台湾軍人軍属の方々の高齢化による参加及び継続についてである。宝覺寺における慰霊祭を取り仕切っておられる台湾台日海交會会長の林德華氏も原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者三万三千余柱の秋季慰霊祭への参加者は各地の軍属出身が多く、皆高齢のため病弱で参加できないものが多くなり、今後が心配だと話されている。

このことに関し、本年も来賓として参列された元台北駐日大使、許世楷先生は挨拶の中で、今回十二次を数える小菅団長以下慰霊訪問団の尊さに敬意を表されたあと、年々歳を重ね高齢化する実行委員会の今後を心配され、この尊い慰霊祭を日本と台湾で守っていくため、私が知っているいくつかの若いグループに参加を呼びかけていることに触れられた。この日も台湾の青年たちが揃いのジャンパー姿で世話をしている姿が目をついた。又、日本人墓地での慰霊式では団長の心遣いで居合わせた、一般日本人旅行者にも線香がわたされ、線香をあげ手を合わせる姿を見る時、心は和む。きつといい思い出として日本に持って帰るだろう。真実で尊い行動は必ず継続されると信ずる。このような光景は訪問した塩水小学校をはじめ、保安堂、飛虎將軍廟、烏来の地、中華民国外交部など行く先々で感じられた。

第十二次を迎え第二ステージに上った今、我々が担う慰霊による民間外交は日台両国の絆をしっかりと築くと同時に、又、英霊に報いることであると強く自覚した訪台であった。

台湾との絆の強化は 日本再生への道

にしやま ひろし
副団長 西山 洋氏

大東亜戦争終結までの五十年間、まぎれもなく日本であった台湾を親善友好慰霊の目的で訪れた今回の旅は、私にとってはまさに驚きと感激の日々でありました。そこは、古き良き日本と日本人、そして日本人として戦った台湾の方々の眠る国でした。当時日本であった台湾の発展に尽くした先人達の偉大な業績や地元の人々に範を示した人間としての高潔な生き方が、今なお大きな尊敬の念を持って台湾の人々の間に語り継がれている事を知り、日本人として秘かな誇りを感じた次第でした。

歓迎会の席で、八十歳を超えた元日本兵の方々が、「私は特攻隊員でした」あるいは、「私は海軍兵学校出身です」と熱く語る姿は、生氣と誇りに満ちていました。

塩水国民小学校では、戦前の日本の教育方針が受け継がれており、先生と生徒が共に教える喜びと信頼感に溢れていました。学校の敷地内には神社があり、校内では日本国旗や『日本はこんなに良い国だった』というビデオテープ等も売られていました。

この他に、今でも日本を愛し日本に憧れを抱き日本のことを思っている多くの方々がおられることを知って、自信喪失と混迷の現在の日本から行った私にとっては、深い感銘と本来の我家に帰ったような安らぎを覚えるものでした。

十一月二十五日、台中市の宝覺寺における慰霊祭では、日本人と日本軍人として戦って散華された台湾の方々の英霊に対して冥目し、その安からんことを祈りました。その時、英霊から「我々を忘れずによく来てくれました。」という言葉に続いて「今の日本よ、日本人よ、しっかりしなさい」と諭すように言葉かけられたような気がしました。その言葉に私は恐れ畏み恥入りました。

台湾は世界で最も親日的な国だと言われています。その通りだと思います。しかし今回の訪問で私は、台湾はそれ以上の存在であることを確信しました。なぜなら、戦前、戦中を通じて我々の先人達が大きな理想を抱き、心血を注いで造った新しい日本、それが台湾であり、その心は今もなお多くの台湾の人々の心の中に生き続けているからです。

又、台湾が我国の安全保障上、いかに重要であるかということも現地に立ってみてよく理解できました。台湾との絆の強化は日本再生の道でもあると思います。

魂の奥の不思議なふれあ いを感じる唯一の国・台湾

やすこうち やすひこ
副団長 安河内 康彦 氏

私はこの日の日台親善友好慰霊訪問団に参加する事は今回で数えて三回目になりました。

私は第二陣Bグループの参加という事で十一月二十四日に出発し二十六日には帰国するという二泊三日の行程での旅でした。Bグループはほとんどの人がこの慰霊団に初参加という事だったのでお互い面識もなく空港にて初めて顔を合わせるという方々ばかりでした。しかし夫々に目的意識がはっきりした方々ばかりの為お互いすぐに打ち解けた雰囲気になれました。台北空港に到着後すぐに台湾新幹線に乗り換えて台中駅に向かいましたが台湾に入ってからいつも感じる事は出会う台湾の皆様が私達が日本人と解ると途端に優しく接してくれる様な気がするのには私だけではないと思います。この感覚は以前韓国や中国に行った時には決して感じる事の出来ないものです。なにか魂の奥の不思議なふれあを感じる事の出来る世界で唯一の国であると言っても過言ではないと思います。

その後Aグループと合流し、台日海交会主催の夕食会に参加させて頂きました。海交会の皆様が相も変わらず頑張っておられるのを見て私も元気が出ました。今回は日台親善友好慰霊訪問も十二次との事で小菅団長の今迄のご苦労が団長挨拶にも切々と感じられ台湾の皆様との心の紐帯がより深く感じられた宴でした。

翌日は宝覚寺での日本人墓地参拝とその後の慰霊祭に参加させて頂き多くの台湾の方々との交流に感激致しました。その後、中日海交協会主催の昼食会に参加させて頂き前日と同じ感激を台湾の方々と共に共有出来ました。この日はこの後大変な強行軍で二十一時過ぎに台北のホテルに到着するという状況でしたが皆様元気で頑張る事が出来ました。これもひとえに台湾英霊の皆様方の後押しのおかげではないかと感じました。

三日目に入りこの日は前日の強行

軍にも拘らず早朝の出発でしたが私の今回の参加目的の一つは前回参拝出来なかった高砂義勇隊戦没慰霊碑の参拝でした。到着までは雨模様でしたが着いた頃には雨も上がり矢張り英霊の皆様は私達が参拝するのを待って居られるんだと感じる事が出来ました。参拝後慰霊碑を守って居られる台湾の皆様方と一緒に歌った「君が代」と「海ゆかば」は終生忘れる事が出来ない程の感激でありました。その後「日文化経済協会」の皆様との昼食会の後、中華民国外交部を表敬訪問させて頂き、無事帰国しました。

慰霊訪問の旅は終わりましたが、今年も多くの得難い体験をさせて頂きました。今回特に何度も感じました事は英霊は生きて我々を見守って下さっているという事。それだけになお現在の日本の情けない状況が恥ずかしく申し訳ない気持ちで台湾を後にしました。小菅団長以下訪問団参加の皆様ご苦勞様、また台湾でお会いしましょう。

台湾有情～宝覚寺慰霊 (供養)祭の参加十年～

おおはし あきひと
前副団長 大橋 昭仁 氏

1. 平成十三年の本慰霊訪問団に参加して以来、連続十年台湾台中宝覚寺の慰霊祭に参加させて頂いた。両国国旗の掲揚、国歌の斉唱等その間の同寺での慰霊(供養)祭の式次第はほとんど変わっていない。そして初参加の時から気になっていたことの一つがお坊さんの衣の色が黒、つまり墨染の衣だった事である。これは日本とは同じだが東南アジア地域は茶色系統がほとんどである。宝覚寺は元來曹洞宗のお寺を起源にもつのであるから法事の際は黄色の衣でも良いはずだが黒を着ておられる。それとお経の音声から北京語ではないと思った。今回たまたま三人のお坊さんたちの読経の終りが、私どもの参拝時間よりも少し長びいたのでお経の本を覗き込むことができた。するとなんと「阿弥陀経」という日本でもポピュラーなお経であった。おそらくそれを台湾語読みしているのであろう。曹洞宗のお寺で浄土宗系のお経を読んで問題にはならない。台湾らしいおおらかさである。

2. 「なぜ台湾に行くのか」という質問をよく受ける。答は「日本人に会う為に」ということになる。ただし我々の父母祖父母、の代の日本人にである。それが

日本語世代の台湾人に会う目的である。それらの人々は私どもと繋がっており私どもそのものの生きる姿だと言ってよい。それを体現しているのが台湾の皆さんなのである。

3. 私の親しい友人で論語を学びに関西地方まで新幹線を通っている人がいる。道を求めて・・・ということであろう。しかし、その様な人と言えども論語を読んで感涙する事はあまりないであろう。何しろ登場する孔子先生はじめ皆様、古い時代の方々であるだけではなく直接自分と血縁的にも社会的にも無関係の皆さんだからである。

ところが、台湾で会う日本語世代の皆さんを教え導いたのは、まぎれもない我々と代代的に近い最近の大先輩たちである。私たちは台湾人のお姿から我々日本人の本来の姿を見ることが出来るのである。それはまさに自己の体験である。戦後の「民主教育」というリズムによって屈折されてあやしく光り放つネオンサインと異なり素朴に周囲を照らす焚火の炎なのである。

4. 同じような体験はさつま義士の慰霊供養祭で自覚することが出来る。あの時のぼうばくたる落涙はいまでも忘れる事が出来ない。いづれも素朴な感情なのであって理屈ではない。我々にこやかに話しかけて下さる元日本人の皆さんの向こうに紛れもなく我々の先輩方が立っておられるのである。この台湾の大地を踏みつけしっかりと両足で立つてこそ感じる事の出来る感慨なのである。

台湾での新発見、 そして再発見

ふしむら はじめ
第一班班長 藤村 一 氏

実はこの慰霊訪問の旅の前日は、金美齡先生の講演会を行い、私はその責任者の一人であったので、十一月二十日から直方泊り込んで準備にあたった。この大きな会を終えて直後の台湾行きは、正直に言っただけの不安があった。しかしこんな体験をできる機会は滅多にないから行って来いという先輩や同僚の後押しを受け、また台湾出身の金先生の講演に強い励ましをいただき、参加させていただいた次第である。しかし、無理をしてでも参加させていただいて本当によかったと実感している。

この慰霊訪問では、未知のことを数多く体験させていただいたが、その中

でも、強く胸に刻まれたことが三点ある。

まず第一は台北に到着したその日、芝山巖を訪れ、小菅団長のご配慮で、六士先生の墓前に花を手向けさせていただいたことである。小菅団長より、「福岡教育連盟の先生を代表して」という紹介を受けたとき、自ずと背筋が伸び、花束がずしりと両腕に重みを加えたような気がした。

日清戦争終結後、日本統治下となった台湾において教育を施そうと、高い志を持って渡海した六人の教師たちは、台湾の子供たちと寝食を共にして日本人同様にまたそれ以上に愛情を込めて教育を施し、それが台湾の近代教育に繋がったという。六士先生は志半ばで非命に倒れたが、その意志を継ごうと、その後も三〇〇名を超える多くの教師たちが、危険を顧みず、命を賭して異郷の地の教育に身を捧げたという話を聞き、同じ教育者として、身の引き締まる思いを抱いた。我が身を賭して、これだけの愛情をもって子供たちの教育にあたることができるか、同じ教育者として深く自問自答せざるを得なかった。

もう一つ忘れられない体験は鹽水小学校の訪問である。われわれを歓迎するセレモニーにおける子供たちの真剣な姿に心を打たれると同時に、授業はほとんどの教室でパソコンを活用した授業で、プロジェクターから投影された画面が黒板代わりになっており、日本よりもICT化が進んでいることに驚いた。また、校内に神社があることにも感激だったが、校舎の入り口に「禮義廉耻」と額が掲げられていたことが印象的であった。「禮義廉耻」とはつまり「礼儀を重んじ、悪い行いを恥じ、謙虚に正しい行いをせよ」ということであろう。まさにわが国から失われつつある精神がこのようなところに生きているということを感じた。古い精神文化を大事にしながらも、新しい技術を取り入れる姿勢に大いに学ぶものがあつた。

そして最後に、この慰霊訪問の間、小菅団長を始め、皆さんが口を揃えて「教育が大事だ」とおっしゃり、「先生頑張れ」と激励の言葉をいただいたことである。

鹽水小学校に掲げてあつた「禮義廉耻」をはじめとして、今も台湾に息づいている「日本精神」をもう一度子供たちに徹底して教えること、子供たちを戦後教育の自虐史観から解放し、正しい歴史観を持たせて自尊感情を育てること等々、これからの教育に対して、皆様から期待されているもの大きさを実感した。折しもこの訪問期間中に、北

朝鮮が韓国に向けて砲弾を放つという事件が起こった。折からの尖閣諸島の問題もあり、これからの日本を担う子供たちにきちんとした国家観、国際感覚を身に付けさせること、そして日台の望ましい関係を構築させるには教育をおいてほかにないということ、改めて深く認識し、教育に携わるものとして、その責任を痛感した。

正直なところ、私自身も身近な国「台湾」を意識したことは今までほとんどなかったが、今回の訪問によって多くのことを学ばせていただいた。台湾の方々の我が国に対する思い、そして、我が国の良さ、素晴らしさ、子供たちに教えるべきことを、新発見そして再発見した。いつか修学旅行で高校生を台湾に引率し、私がいただいた感動を生徒たちにも味わわせ、日本人としての誇りや自覚を深めさせたいと思っている。

皆様のご期待に応え、我が国の教育の正常化を果たしていくことをお誓いし、お礼に代えたいと思う。

日本人は真の親日国家である 台湾を見誤ることなかれ

しもだ けんいち
第二班班長 下田 健一氏

今回で二度目となる標記の旅に参加させて戴き、初回にも増して感動できる旅となり誠に有難く思っております。

それにも拘わらず日本政府や、マスコミの対応とは言えば、日本の経済的なメリットのみを求め、一九七二年、(何時まで経っても中の国である)シナと国交正常化に踏み切り、それと引き換えに台湾との親密な関係を断ち切つてしまいました。その後は、日本にとっては人的にも地理的にも最重要国家であるのに【台湾】を歴代内閣は粗末に扱っています。

その様な扱いの中でも、台湾の方々は、戦前の日本の統治時代の恩義を忘れることなく、律儀に淡々と日本精神を受け継ぎ、各地で日本兵や日本兵として大東亜戦争で亡くなられた方々を神として崇め、鄭重に祭って戴いています。そこを見極めることができるのは、初日夕方訪れた芝山公園「六士先生の墓」、明治二十九年(一八九六)一月一日、芝山巖事件で殉職なされた十八歳から三十代の小学校の先生の墓にお参りました。また二日目に訪問した飛虎將軍廟(共に日本人がご祭神)を現地台湾の方々が建立し、また、この訪問団のメインテーマ行事の慰霊祭が行わ

れる宝覺寺の本堂の中や高砂義勇隊戦没英霊記念碑、保安堂、更に、烏山頭ダムの中や八田與一記念像や記念館を訪問すると、その保存の仕方や日々のお祈りを大事にした生き方が分かり、ここに、【台湾で日本を知る】ことが出来ます。正に戦前の日本精神そのものを見出すことができるのです。

それにしても平成二十一年放送のNHK【ジャパンデビュー、アジアの一等国】の台湾人感情の表現の偏向ぶりは許せないものでした。現在我々は、NHKに対し、この番組の捏造、偽装、偏向、放送法違反で係争中ではありますが、台湾国や台湾人が日本を敵視しているが如き内容になっており、真実の報道がなされておらず、多くの日本国民が台湾を悪しき国と誤解するように仕組まれたもので、正に日台を分断する中国共産党のプロパガンダと化しました。この番組は多くの台湾の方々に対して同じ日本国民として、全く申し訳ないものであつたと思っております。見事、シナの戦略、即ち台湾とシナの共通の敵が日本という図式に乗せ、その後台湾をシナが飲み込むという戦略というものであります。

訪問先での歓迎の仕方は熱烈でありまして、何度行っても感動します。今年、五月には私達の小グループでもミニ訪問を実施いたしました。歓迎ぶりには全く変わらず、感動の連続であります。この様な親日国台湾と反日を叫び、人権侵害を平気で貫き通すシナを比較すれば、火を見るより明らかに台湾との親交を図ることが大事であると今後も訴え続けて参ります。

日本語世代の方はかけ がえのない日本の宝です

はらだ やすひろ
第三班班長 原田 泰宏氏

慰霊訪問の旅は一昨年に続き、今回が二回目となります。初回は、駅や訪問した所で日本語で話しかけお話ししたことが印象に残っております。その方々は先の戦争に負けるまで日本人として生きてこられた日本語世代の方々で、『私は台湾に残った日本人、あなた方は帰った日本人』と懐かしく話し掛けられ、日本人であったことを今も誇りに思っていると聞かれていました。また、六十四年、五年経った今も日本語を忘れず流暢に話されています。会話はわかりやすく、漢字・ひらがな・カタカナを日本人同様に書かれることが、手紙のやり取

りで分かりました。語彙などは今の日本人以上に豊富でその当時の教育水準の高さを感じさせるものでした。今回の訪問では、前回お会いした方々や手紙をやり取りした方に再会する楽しみや、新たな出会いもあり、今度もまた非常に充実した旅となりました。慰霊訪問の旅は、観光地廻りは一切ない、朝は七時集合・夕食は十時になることもあるハードスケジュール、ほとんどが台湾の方との昼食会や夕食会で気が抜けない(私はいろんな方とお会いする楽しみの方が勝っております。他の方も会食の終わりに打ち解けておられます)といった一般的な旅とは異なりますが、帰国の途に着くや否や、また行きたい思いが強くなってくる有意義な旅です。

さて、今までの旅で出会った台湾の日本語世代の方々からは、『日本の御蔭で今の台湾はある』『厳しくとも愛情ある先生の指導の御蔭で自分たちがある』『もっと自信をもちなさい』等のお礼や温かい励ましの言葉をいただきます。今回の旅で一緒に写った写真をお送りしましたら、すべての方からお礼の手紙やクリスマス・年賀のカードが送られるなど非常に礼儀正しいです。また、ある地域ではお世話になった日本人をいまだに祀ったり、慰霊をされています。これらは台湾の方のすばらしさであるわけですが、戦前の日本人や文化も同時に反映しているのではないかと思います。今、戦後日本では戦前日本は周辺諸国に対し悪いことをしてきたと教育され、マスコミや近隣諸国からの偏向情報がたれ流されていますが、台湾ではまったく違います。どちらが真実でしょうか。その時代を生きてきた生き証人である日本語世代の方の話や台湾で行われていることを日本国民が知れば、戦後の歴史観のおかしさに気がつきびっくりするのではないのでしょうか。それは日本の誇りを取り戻すきっかけになると考えます。

私は、日本語世代の方々を救い台湾との絆を築くために欠くことのできない日本の宝と思えてなりません。しかし、日本語世代の方々八十歳代以上になっておられます。時間の猶予はありません。早急に、日本語世代の方々の思いを直接今の日本人に知らしめることはできないか、考えているところです。

次に、今回の旅の成果とでも申しましょうか、特に印象に残った体験を二つご紹介したいと思います。

【体験一】

〈たった一人になりながらも戦後六十五年間も日本人上司の慰霊を続けている劉さん〉

獅頭山参拝はスケジュールにありませんでしたが、どうしても請われて立ち寄ることになったところです。戦後六十五年間も元上司である広枝警部を慰霊されている劉さんのお話をお聞きしました。今は同僚の方も亡くなられ、劉さんたった一人で慰霊をされているとのこと。それも体調を壊され看護師を帯同されて行われていました。ここで劉さんのご説明が格調高い日本語で、当時十代の青年がこのような日本語を使っていたのか、それを忘れて六十五年も使っておられることに感動しました。更に感動は日本に帰ってからもありました。それは獅頭山で劉さん、林さん、私と一緒に撮りました写真をお送りしたことに關して次のようなお礼のはがきをいただいたことです。ご高齢にもかかわらず、小さな字でびっしりとかかれており、病弱で弱っておられるお体で必死にお書きになったであろうと想像すると胸が熱くなってきました。文面は、まさに日本人の筆跡で、漢字とかなで丁寧に書かれておりました。たった一人になられても六十五年間も慰霊を続けておられる劉さんの行いに感動するとともに、そのようにさせる立派な日本人がいたこと、台湾の方に対する戦前の日本教育の水準の高さなどに感心しました。お手紙を活字にしますと真価が半減しますが、内容を知っていただきたいので、ここにご紹介します。

◇◇劉さんからの手紙◇◇

『お礼を申し遅れまして申し訳ありません。私は御一行様が大事な旅程を割かれて獅頭山詣にいらした折に何のお構いもなく失礼さしていただいた元広枝警部の部下、劉維添と申す者です。今度御一行様の心のこもったお詣りに只管頭が下がりが胸が熱くお礼の言葉を知りませんでした。早くから御一行様にお礼を申す筈でしたが、老人故に遂び延び延びになりましたすみません。また台北の林阿勇さんを通して今生の記念とも云うべき写真をお送り下され嬉しさ一杯です。改めてお礼申し上げます。故広枝警部は大和魂を発露し人道主義に徹した長官でした。故事は多々ありますが短時間でしたので報告出来ませんでした。又機がありましたら語らせていただきます。今回簡単ですがお詫び方々お礼まで。日本の益々の御隆運と皆様方の御健勝をお祈りしています。台湾苗栗縣南庄郷東村中正路七二

劉維添

【体験二】

〈台湾との尖閣問題で戦争を食い止めた台日文化経済協会鄭会長〉

台湾の親日家がいかに日本のために尽くされているかを示す事例として、旅の最終日に「台日文化経済協会様による歓迎の昼食会」で、隣り合わせた鄭会長からお聞きしたお話をご紹介します。平成二十年六月十日尖閣諸島・魚釣島付近の日本領海内で、台湾の遊漁船「連合号」と海上保安庁の巡視船「こしき」が衝突し、連合号が沈没した事故がありました。台湾の政府筋は「最後の手段として開戦も排除しない」と豪語していたそうです。そこで鄭会長は、高校の後輩でもある馬總統に対して、日台関係についてよく説明し、『賠償金問題で片付けなさい』と諭され、大きな問題にはなりません。平成二十二年九月の中国との尖閣問題と比較すると、雲泥の差があります。日台の良好関係の維持に尽くされている方々がおられることを忘れず、大切にしていかなければならないと思ったところでした。

最後に、この旅を企画、運営されておられる小菅団長、事務局ほかの皆様のご尽力に敬意を捧げ、また厚くお礼を申し上げます。ずっと続けていただきたいとお願いいたします。

日本人のアイデンティティ を取り戻す巡礼の旅

いわた のぶよし
第五班班長 岩本 宣善氏

一昨年、昨年に続いて三度目の参加である。三年兵となればもはや新兵ではない。リピーターはそれなりにメリットもある。過去の旅日記を丹念に読み返し、頭に入れて行くのだ。そうすれば同じ場所と同じ人に会いに行くのだから、次はどんな展開になるか、凡その見当が付き、じつくりと見聞きし写真も良いアングルで決定的瞬間が取れると思うのだが、どっこいそうはいかないがこの旅で、初日の明石総督の墓、実は小生の唯一の未訪問先なので今回の目玉であったが思わざるハプニングで不発に終わった。又一年掛かりであしう、こうしてやろうと待っている訪問先では先方が進行のイニシャチヴを取る以上、当然ながら時間は相手のペースで流れて行くので、塩水小学校の時の様にずっかけて次の貞愛親王八角楼を割愛することも起きる。一年経つと様子

が変わることもあり、新たな感動もある。年に一度のお伊勢詣か、金毘羅さんである。

旅行の栞二ページに今時珍しい厳しい『行動指針』がある。軍人勅諭と教育勅語をパラダイムとする小菅軍団は軍規厳正・率先垂範・自己犠牲の集団である。訪問団の組織がきちんと出来ており各自の役割分担が明確、且つ適材適所である。お蔭で第五班長である小生の確認不足でバッグ取り間違えが発生したが幸い直ぐに解決、一人の怪我人・病人も無く相当の強行軍を消化出来た。小菅団長先生の卓越したリーダーシップの賜物である。明石総督の墓参り不発については小菅団長はお立場上筋を通して現地旅行社に対して厳重な謝罪を要求されたが、小生にとって来年の楽しみとさせてほしい。それにしても行く先々での想定外の事情に素早く対応される小菅団長にはその指揮能力、柔軟迅速な判断力に舌を巻いた次第である。

バス車中何度も行われた小菅セミナーは素晴らしかった。強烈な信念と哲学に基づく、借り物でない自分の言葉で、しかも『雨夜花』や『サヨンの鐘』までサービスされた。後で車に弱いと伺い並々ならぬことだと改めて感動した。小菅節に触発されて日高さんや下田さんがこれまた飾らぬ言葉で進んで語られたのも、むべなるかなと思った。

宝覚寺に於ける合同慰霊祭の席上小菅団長が奉読した祭文はいつもながら感服した。我等の歴史認識と訪台目的や志が明確に言い尽くされて余り有り、元駐日大使の許世楷閣下も評価しておられた。

台南の飛虎將軍廟では式典の運営がかつての海軍高座会の老兵から若い方に引き継がれていたことに注目した。日台共に志を等しくするメンバーの高齢化、世代交替引継ぎが課題である。聞けば小林よしのりの愛読者とのこと、心強い話であった。

この旅は台湾に残った日本人の真情に接し心の温もりを肌で感じ日本人のアイデンティティを取り戻す巡礼の旅である。そして軍事的政治的外交的文化的、あらゆる面で台湾防衛の重要性を認識する旅でもあった。

同時に素晴らしい日本人に遭遇する旅でもある。陸士五十八期の日高さん永石さん、お父上が台湾で恩師と慕われた下田さん、陸自機甲部隊・警察機動隊の中村さん、一昨年以来御世話になった井上さん等々。日頃同窓会、年金受給者仲間、地域の付き合いでは多

様な価値観を持った人達の集まり故に特定政党、特定宗派、歴史認識の話はご法度である。しかしこの訪問団の中では安心して語りあうことが出来て、筋金入りの同憂の士であることが嬉しかった。

歳を取っても感激する人間でありたい。宝覚寺の慰霊祭は日本には滅多に味わえない感動の場であった。国旗・国歌・海ゆかばにこんなに感動を以て接することがあろうか。来年も再来年も十年先も足腰立つ限りはお供をさせて頂きたいと思う。物凄い気配りで慰霊団の行動を支えて下さったスタッフの皆さん、そして毎度ながらユニークで立派なガイドの簡さんに厚く御礼申し上げます。

霧襖突き破りいま離陸せり(成田)
冬虹を渡り蓬萊にランディング(台北)
冬日燦水庫(ダム)を見守る八田像(烏山頭)
巡礼往く高南平野の冬落暉(台南)
子等の眸(め)に未来を見たり冬日燦(塩水)
『靈安故郷』軍歌に混じる鳥の声(台中)
冬の虹天の清めし道登る(烏来)
冬桜勇士の像は南向く(烏来)

台湾を想う

なかむら さとし
藤村班 中村 哲氏

今年五月十一次団員の高原氏と訪台し芝山巖等を訪れました。その時八十四歳の御婦人と話をする機会にめぐまれ、彼女は終戦時女学生だった方で、とても流暢で綺麗な日本語を話される品のある女性で、私たちは問われるままに訪台目的や十二次訪問団の事などをお話ししました。彼女は『日本語を話すのは六十数年ぶりです。日本時代は多少の差別はありましたが学校の先生や警察官にはとてもお世話になり、今でも日本人であったことを誇りに思っています』と日本人と日本語で話が出来たことをとても嬉しそうにしていました。彼女は戦後基隆港に上陸した国民党をみてその姿にこれが祖国の軍隊か、こんな軍隊に日本はほんとうに負けたのかとがっかりしたそうです。その後二二八事件が起き暗黒の時代が始まり日本語が話せなくなった事、又ある時友人の女学生といるとき友人が[禿げ頭]のことを話題にしたのを特務(秘密警察)に咎められ蒋介石を侮辱したと言って連行され今日まで音信不通です。おそらく国民党に殺されたのでしょうと、

涙ながらに語っていました。宝覚寺での再会を楽しみにしていましたが残念ながらお会いすることが出来ず元気でもらえるか心配しています。

今回は明石総督の墓参りは出来ないままでしたが林阿勇先生の案内で獅頭山勸化堂に参詣できましたことは大きな収穫でした。また新たに大勢の方と知り合うことが出来、現地の方との懐かしい再会ができましたことについて訪問団スタッフの皆様へ感謝申し上げます。

日本政府は支那や朝鮮に対しては謝罪を繰り返していますが元日本人である台湾の人々に対し「日本人として日本のために命をかけて戦いご苦労をかけ申し訳ありませんでした。ありがとうございます」と、なぜ言えないのか、この一言をどれだけ台湾の元日本人の方は待っていることでしょうか。私は一日本人としてほんとうに申し訳ない気持ちでいっぱいです。

私たち訪問団は民間外交の魁として小菅団長を先頭にこれから日台友好の絆を深め前進して行こうではありませんか。台湾独立を応援しましょう。

日本の命運在台湾 台湾翠青 台湾加油

日本人の誇りを取り戻す慰霊訪問の旅

しもだ すみこ
下田班 下田 純子氏

昨年に引き続き二度目の日台親善友好慰霊訪問団に参加出来ました事、そして台湾の地でおいした方々、全ての方々に感謝申し上げます。

本来は日本政府が行うべきと思うのですが、日本は中国と国交を結び、台湾を切つてしまいました。それを憂いて立ち上がった小菅団長、それに賛同する人々により行われ、私も主人と共に一員に加えて戴きました。

私は、父が台湾で先生をしていたので、台湾の生徒さん達と両親が交流する姿を見ながら育ってきました。そんな中、世では、先の大戦は全て日本が悪いと自虐史観を植えつけられ、現在もそれに捉われた人も多く、そのまま子孫に伝えられたら、日本人として日本の為戦った方々に申し訳ないと思います。台湾時代のことを良く話してくれた祖父母や両親も今は亡くなり、話を聞いた私も六十五歳、今、本当の事を伝えないと、ひしひしと思っています。機会を捉え、色々な所で、お話をしていますが、皆さん、半信半疑、これではとの思いが、この慰霊団参加のきっかけ

六十五年目に 念願適った慰霊の旅

でくち きよし
下田班 出口 清氏

となり、また、過去、別途に七回(台湾に学ぶ日本精神等)の訪台となり、教科書で教えない日本と台湾の繋がりが等、多くのことを学び知ることが出来ました。

今回、台湾で出会った元日本軍人の方達は、過去、日本人であったことを誇りに思っていたら、日本人本来の姿を見せて下さいました。六士先生の墓にお参り思うことは、当時の日本は台湾を日本本土並みに教育しようと考え、日本から送り込まれた志の大きい先生方六人が殺されるという事件が起こったが、その後も志願して台湾へ渡った先生、今の日本では考えられません。父から、佐賀県から志を持って台湾へ行かれた人の資料を見せてもらったことがあります。若い先生方の多くは、志半ばでマラリア等で亡くなった方が多かったと。表には出ないが、日本精神の根っこになった方の事にも思いを馳せました。台湾の全学校では年の初めに、この六士先生の墓の方角に向かって、感謝の祈りを捧げているとのこと、こんな事も私達は知らずにいました。日台交流で訪問した【鹽水小学校】の子供達の生き生きとした姿に感動し女性校長先生のお話からも、教育の素晴らしさを感じました。そして、校庭に鳥居があり、神社があるのです。その上に二宮金次郎の生き方に学ぶと言う事で、二宮金次郎の銅像を建てる計画をしているとのこと。日本では、戦後、殆どどの学校から、徐々にこの銅像が撤去され、残されている学校は珍しい程です。現在の日本の教育は、個人主義や人権、男女同権などに、とって変わっていますが、日本の素晴らしい教育は台湾の中に残っています。以前、父が勤めていた学校を訪ねた時、その校長先生が「先生、立派な教育をして下さって有難うございました。どうぞご安心下さい。当時の教育精神を守って教育しておりますから…」とおっしゃられ、驚いた事もありました。

今の日本人は台湾をく食べ物(美味しい)と観光地として捉えている人が多いけど、もつと日本と台湾の繋がりの大切さに気付くことが大事です。日台親善友好慰霊訪問団として台湾を訪問して、先の大戦で日本人として亡くなられた三万三千余柱の軍人軍属の方々と一万四千人の日本人の魂と日本人として生きていらつした今も、お元氣な台湾の人に、日本人としての誇りを取り戻すことを教えて戴きました。ありがとうございました。

昭和二十一年、さらば台湾よ又来るまでとは基隆の港から復員しました。それから六十五年目に今までの念願適って訪台することが出来て何よりの幸と思っています。三年前に慰霊訪問団の存在を知り参加申込みの手続を終っておりましたが出発直前に体調不良となり、涙ながらの残念な思いを致しましたが今回無事参加出来たことの喜びは一人であります。大東亜戦に於て日本人として戦没された多くの台湾の方々の慰霊に徹することは、何とも痛いことであると思います。又私個人としては、かつて陸軍航空隊飛行第十戦隊に配属、松山飛行場を主地とし桃園、塩水飛行場を前進基地として、台湾沖航空戦、沖繩戦に参戦、多くの先輩、同僚が戦死し、又特別攻撃隊として散華した最後の場所でもあります。特に松山飛行場周辺、内湖付近の想い出の地に往時を偲び慰霊することが出来ればと願っておりましたところ、最後帰国の日、約一時間半の許可をいただき、現地に至り六十五年ぶりの思いを果すことが出来たことは感謝に耐えず特別な御配慮、有難く感謝し、無上の喜びであります。

この度の慰霊訪問団に参加させていただいて感じたことは、行く先々で心温まる歓待行事の連続でありました。小菅団長の高邁な深慮の努力の目標とその一つ一つが誠心誠意の行動となりその成果を現地に現実に見ることが出来たことは特に感無量でありました。又黄様御夫妻をはじめ何御夫妻の心からのご歓待、塩水小学校の校長先生を先頭に全校あげての歓迎、この日のために練習に次ぐ練習の成果を見せていただき、本当に心の底から溢れる誠心を感じ生涯忘れられることはないと思います。又烏山頭ダム建設八田興一記念像、飛虎將軍廟の日本人に対して台湾の方々の義理堅い心情が偲ばれ、祭神もさぞ喜んでいられることと思います。又保安堂、宝覺寺、日本人墓地、済化宮とお詣り出来てよかったです。最終日、高砂義勇隊戦没英霊記念碑の前で高砂族代表の方の言葉が意義深く印象に残っています。

訪れる先々ごとに事前に分かり易く説明されたのは非常に適切であったと感謝しています。

さてこの訪問団の目標は日本人とし

ては当然のことではありますが、これが益々盛大に発展し永続することを切願致します。

歴史的に日本人と関係の深い台湾人の中で十七世紀頃の鄭成功はよく知られた人ですが、長崎島平戸の日本人を母として生れた後に台湾に渡り、台湾に住み付いたオランダ人を追放し白人の侵略を阻止した気概ある軍人であり又政治家でありました。台湾ではその偉徳を称え神々として祭られています。勿論その子孫である鄭一族及び地元台南市はこれを誇りと尊敬で毎年平戸の先祖地にお参りに来ています。今年も台南市の副市長以下多数の方々も台南市の副市長以下多数の方々が参拝されています。その写真入りの新聞と写真を台南市に差し上げたところ後日丁寧なお礼の電話がありました。このことは嗣子孫々に受け継がれ永く続くものと思います。

六十五年來の願望を果し得た喜びは特別に感動的なものであります。末筆乍ら日台親善友好慰霊団の益々の御発展を心よりお祈り申し上げお礼の言葉といたします。

その感情は突然湧き起きた!

つる しゅうすけ
下田班 鶴 修輔氏

その感情は突然湧き起きた!旅の最終日、烏来郷の高砂族義勇隊戦没英霊記念碑での慰霊感謝の式典時、小菅団長の挨拶で、高砂族の英雄戦士達が南洋の島々やインパールのジャングルでの勇猛果敢なく活躍!彼等の日本人としての(誇り・心意気・スピリット)の話をされた。その話を聞きながら元いた会社の上司にインパール作戦で戦った兵士がいて、小野田さんの話にあるように雨季には斜面で顔だけ直接雨に当たらないようにして立ったまま寝た話や、戦傷に蛆が湧く話など聞いたことを思い浮かべながら聞いていて、戦士に対し(申し訳ない・すまない)と感謝と慰霊の気持ちに浸っていた。その時!その感情は突然湧き起きた!

自分の親父様の声かしたような気がした、顔(写真顔は知っている)も声も覚えていないが、伯叔父貴達やお袋様から聞いている親父様は理想の好漢として自分の中に鎮座して御座る。

①満州で五族協和の楽土を実現せんものと粉骨砕身して建国に邁進した話。

②敗戦時は家族離散や死をも覚悟し女房子供を最後まで手許におき、家族離散に備え各自の左腕肘付近に二

ミリ程度の入れ墨を入れた話(当時私は三歳七ヶ月・妹は生後五ヶ月)。

③自分は満州国引き渡しの責任者の仕事をして後、暫くして、昼は蒋介石軍の高級将校、夜は八路軍の指揮官との噂のあった支那の軍人と一寸と出てくる)と出て行ったきり二度と帰らず(私の長兄は出る前の親父様に呼ばれ話をしているので親父様の覚悟は聞いているものと思う、話によるとその後の兄貴は今までの〈坊ちゃん〉とは打って変わって強くなったとか。(引き揚げ後の兄貴は確かに中学・高校共に勉強も一番・喧嘩も一番を通した。)

詳細は省くが話によると満州の佳木斯(チャムス)で刑死したとか(この話はお袋様の通夜の挨拶で親父様はまだ生きてると一番主張して、葬儀の真似事や遺族申請・死亡宣告の受け入れをお袋様にさせなかった伯父貴から聞いた話として述べた。)この話も兄貴に遠慮したのか、何か自分でも分からないが、いろいろあって間も無く兄貴が亡くなり詳しく聞いていない自分が悔しい、その親父様の五十年忌はやったが、〈中国は嫌いだとの一言〉で満州を尋ねることも、今回のような(慰霊の旅)など想念いもしなかった自分に対する腹立ちさ・悔しさ・満蒙の地で散華した日本人はじめ満州建国に動んだ五族の人達への感情・特に親父様には〈済まない〉〈申し訳ない〉〈可哀想〉〈……〉で満たされた。また、台湾で亡くなった日本人(台湾の人も含)がうらやましかった!。

子供の頃から親父様は快男児だったようで逸話には事欠かない(井上靖の自伝的小説三部作の最終〈北の海〉の城下町の章に〈鶴永次〉を振り〈鳶永太郎〉という名で登場する。)それ等の話を中心に他人様には話していた。自分の中では笑って話せるようになっていた。つもりが、とんでもない! 今後は笑うどころか話も出来ない。台湾からの帰りの道中、時には親父様のこと思い出して〈すまない〉〈すまない〉と胸の内では、一方では現状どうするものと思いついて〈あれ〉や〈これ〉や思いつく帰路に就いた。多分これからは話出す前に…の涙が先に出るだろう。



心ゆくまで君が代を斉唱 できたのも爽快の極み

すがぬま ひろし、ゆみ
原田班 菅沼 寛、由美氏

夫婦揃って初めての台湾への旅。おかげさまで爽り多い印象的なものになりました。まずは、大変お世話いただいた事務局の方々に心より謝意を申し述べます。ありがとうございました。南米以外の世界中のほとんどの国々を訪れ、いくつかの国では何年も生活しましたが、なぜかこれまで台湾にはご縁がありませんでした。ただ、従前より情報だけは蓄積していたので、今回は自分の認識を改めて確認する旅になりました。

結果はほぼ予想通りで、心ゆくまで君が代を唱和できたのもまた爽快の極みでした。坦懐に申せば、全行程を通じて最も感銘深かったのは、小菅団長の、穏やかで謙虚であるにも拘らず、熱い想いが浸々と伝播してくるスピーチの数々だったかと思えます。

台湾がわが国にとってかけがえのないパートナーであることに今更議論の余地はありませんし、台湾に深い思い入れがある方々の気持ちもよく理解できます。相互の共通する国益のためにも、この二国間の紐帯を増々堅固なものにしていなければならぬ必要性も激しく感じます。ただ親日国という点では台湾のみが特殊ではなく、程度の差はあれ、アジアの大半がそうなのです。ほとんどの国々が親日と言いつても過言ではありません。欧米の植民地として永年搾取され続けてきたこれら諸国の人々が、鼓舞され、有形無形の援助を受け、時に連帯して、ついに独立まで勝ち得たのは、まさに日本のおかげだからです。さらに遠くエジプト、トルコ、また当初まともな国名すらなかったアフリカの諸地域、日清・日露戦争の勝利の頃まで遡れば、いまだ東郷元帥を敬愛してやまぬフィンランド、他の東欧諸国など、親日国家は世界中に遍在しています。小生自身、外国で日本人であるがゆえに、誇らしく嬉しい思いはしても、不快な経験をしたことは皆無です。

所謂親日の国々をその拠って来た理由により①日本に鼓舞されて国造りをした国、②日本兵が直接間接に国造りに貢献した国、③日本の一部として運命共同体を形成した国…と便宜的に分類してみます。就中、散華した日本兵が祭祀せられ、元日本兵や軍属がいまもなお英靈顕彰を受けている台湾は、明らかに稀有で特異な国に見えます。

ただ、その多くの事例は、小菅団長が時間をかけて発掘してきた労に負うところが大きいと思います。乃ち、大東亜戦争を戦った②③の国々にも、類似の例が少なからず埋没しているはずと推察される所以です。

私見では、台湾が他の親日諸国と決定的に異なる点は日本語の存在だと思量します。この意味では台湾に比肩する国は他に見出せません。言語は、技術であり、芸術であり、歴史であり、文化です。

二国を繋ぐ具体的な紐帯である日本語世代は、今後は八十代の元日本人とともに急激に減少・消失します。フランスに倣うわけではないが、時の日本政府が支那に投下してきた援助資金の千分の一、万分の一でも遣って、なぜ台湾における日本語学校を存続・増強しなかったのか非常に悔やまれます。旧日本人の諸兄弟が教師になればまさに一石二鳥だったでしょうに。数少ないというより、唯一の日本国以外の国語拠点が失われる損失の度合いがとてつもないということに、なぜ気がつかなかったのでしょうか。共通言語の日本語が消滅すれば、心に響く団長の講話も日本人参加者にしか届かなくなりま

す。最後に家内からのコメントを付記。団長夫人が目立たぬように、しかもしっかりと夫君を支え、参加者の誰彼にさりげなく目を配られる様子はまさに内助の功を目の当たりにする思いで、大変感銘を受けました。

同胞の深い絆に感謝

さご みわこ
原田班 佐護 美和子氏

いつか行きたいと思っていた台湾に第十二回日台親善慰霊の旅で参加できた事大変嬉しく感謝しております。

これまで諸外国に行きましたが、こんなにも友好的で心から歓迎して下さいた国は初めてです。皆様がきれいな日本語を話され日本を日本人で大事に思ってくださり懐かしかったり「日本名で今も呼びあつてるの。」と言われたり私は驚き又感激しました。訪問前に親日国とは聞いていましたがそれ以上のお心を感じ、心身共に温かい気持ちになりました。観光旅行ではない慰霊の旅も初めてです。日本人として自分を見つめ直し、絆の旅、感謝の旅となりました。

日本統治時代台湾にダムを建設し発展に寄与した日本人達。八田與一技師は偉大な人だったと初めて知りまし

た。丘の上には銅像があり墓前にお線香をあげてお参りました。八田技師はしっかりと烏山頭ダムを見守っているようで、近くの木々にはうす紅色の花が咲いていました。保安堂では「につぼんぐんかん」と書いた船が祀られていました。大勢の方が暗くなっても待っていて下さり、心温まるおもてなしをありがとうございました。鎮安堂飛虎將軍廟では神さまとして杉浦茂峰少尉が祀られており、軍人姿の写真には正義感と凛々しさが見えました。台湾の人にとっては命の恩人であり英雄です。塩水小学校では子供達の蛇踊りや鼓笛隊で迎えてくれて感動しました。獅頭山の勸化堂は、広枝隊長の部下で最後の生き残りの方がおひとりで供養されており、頭の下がる思いでした。この為に生きるとおっしゃった事、心に深く残りました。つえについておられ「私はもうここまでしか送れません」と言われ私は大きく手を振りました。宝覺寺では慰霊式、慰霊祭が執り行われました。一点の曇りもない青空に日の丸、台湾の国旗、軍旗が高くそびえ、ここに日台の姿の印を見た思いです。心から君が代を唱えました。

訪問団の方との出会い、台湾の方との出会い、看護女子の方のお話、昼食会、夕食会を催してくださり、行く先々でのお接待、お土産、何から何まで感謝でいっぱいです。最後に小菅団長、事務局、参加された同志の皆様、有意義な旅をありがとうございました。

故郷に戻ったような安堵感

あらまき けんじ
林班 荒牧 賢二氏

まずは、小菅亥三郎団長以下スタッフの皆様には、大変お世話になりました。万事に抜かりなく、お手配、お心遣いいただきました事、改めて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

台湾は、私個人にとりまして、因縁浅からぬ国家であります。と、申しますのが、母方の祖父が、大正二年(一九一三)十二月二十七日に当時の台湾総督府南投庁拔手財務課に赴き、大正十二年(一九二二)十二月十一日に、台中州南投稅務署、酒課勤務を依願免官を願ひ出るまで十年間総督府に勤務いたしておりました。従いまして、私の母も台湾生まれで、五歳まで台湾浦里にて過ごしております。その祖父が、折に触れ、「この子が大きくなったら台湾の事を話してやろう」と、孫の中で唯一男子でありました私の成長を楽しみにしていたとの事。その祖父も私が小学

四年の冬、九十四歳を以ってなくなりましたので、残念ながら、詳しく聞く機会はないままに終わりました。

従いまして、平成十一年(一九九九)六月に雲海酒造の創業社長M氏に「ちょっと、台湾に行ってくれませんか」と下命を受けました折、これも「天命」だと思いました。営業管理部門にてお招きを受けておりました身です。断つても構わなかったと思われませんが、数多くの職歴を持つ祖父が、唯一、十年間勤務いたしたのが台湾総督府の勤務。そして最後は、日本で言う「酒税局長」を拝命いたしておりました事を考えれば、私が台湾にて、焼酎の市場構築を六十五歳の今日に至るも続けております事、寡黙な祖父でありましたので、生前余り話した記憶はありませんが、その祖父が一番喜んでくれているものと思っております。

私の母、台湾で生まれ、二歳の折、生母を台湾にて失っております。新しく継母が来るまでの間、台湾人の子守りが三年間母の面倒を見てくれたとの事。生前母が「高砂族」の台湾人の「おねちゃん」が住み込んでいたとはなしてきておりました。

また、神樂酒造勤務時代に、出張先の海外から直接台湾に入国した経緯が二度あります。一回はシンガポールから。二度目は、モスクワから。そのとき、桃園中正国際空港に降り立った時、ふと安堵した気分におそわれました。いかにも「故郷」に戻ったような、不思議な気分でありました。これもまた、因縁浅からぬ台湾であればこその実感でありました。

幾度となく訪問した台湾ですが、今までは、焼酎の市場構築と言う命題を抱えていただけに観光なるもの殆んどいたしておりません。

今回の日華(台)親善友好慰霊訪問の旅は、私にとりまして、新たな台湾との出会いでありましたし、台湾の方々が、日本人との交流を大事にされていることを感じましたし、表題にあります、海の彼方のニッポンを訪ねて、を改めて実感できた旅でもありました。

今後とも、何かと因縁浅からぬ立場にある、私、台湾の方々と交流を大事にして行きたいものと思っております。

先人の魂に感謝の意を捧げ祀る誠心

まつした みか
岩本班 松下 美佳氏

予定より少し遅れて到着した帰りの空港で、バスから降ろされる荷物の中

から自分のスーツケースと成田へ帰る組の荷物を慌てて見つけ出し、チェックインカウンターへ向かうとしたその時、腕を引き寄せ抱きしめてくれた人がいた。訪問団の唯一の台湾人スタッフの黄さんだ。お互いにどんな言葉を交わしたのか数日前の出来事なのに思い出せないが、腕に感じたぬくもりと離れ難い感覚に思わず涙が溢れてしまった。昨年に引き続き二度目の参加であったが、訪問団の方々と台湾への思いがこれ程強く自分の中に芽生えていたことに驚かされた。台湾の方々は臆するこも無く懐に飛び込んできてくれる人懐っこさと純粋な心を持ってもらえるようだ。ほんの一步を臆してしまう私に考える隙を与えない程ストレートに接して下さる姿に新鮮な喜びを何度も感じさせていただいた。

今回の訪台にも、思いがけない喜びがあった。それは、いつか行きたいと思っていた獅頭山勸化堂を予想外に訪れることができたことだ。ここに祀られているのは広枝警部だ。昭和二十年二月、アメリカ兵上陸との情報に二千人の台湾志願兵を率いる広枝警部(当時海軍巡査隊長)は全員玉碎の軍司令部からの命令に背き、内密にアメリカと取引をして台湾志願兵を全員帰還させた後、責任を取って自決した。その帰還された元台湾志願兵の方が勸化堂に迎えて下さり、広枝警部についてのお話をお聞きした。この方は今では、二千人の中でたった一人生きておられるとのことだ。長い文章を紙にしたため、読み上げる日本語の美しいこと。今では殆ど使うことがないであろう日本語をしっかりと記憶し、語る姿に元日本人であったことを改めて思われ感激した。そして、あの長文をどれだけの時間をかけて一所懸命に書かれたのだろうと。時間が許す限り、もっとお話を聞いていたかった。広枝警部のことは勿論のこと、元日本人として生きていたこと、日本をどのように捉えていたのか、日本文化と台湾文化をどのように融合させて生きてこられたのか。この勸化堂はひっそりとした長い階段を登り、台湾六景に指定されているというそれはそれは見事な緑の山間を目前に望める。帰る時に見た夕焼けは息をのむ美しさであった。広枝警部の魂はこの景色を毎日眺めているのだろうか。この地に広枝警部を祀り、後に夫人も共に祀って下さった台湾の方々に深く感謝したい。

去年、パシー海峡で戦死した祖父の遺影を靖國神社の遊就館に納めることができた。祖父は今の私よりも若くあ

りながら既に父親として三人の子供を儲け、その責任を果たせまいまま命を絶たれてしまった。死を予知しながら、乗り込んだ船の中での祖父の思いは如何ばかりだったか。まだ初々しさが残る。船員の制服を纏う祖父の写真を沢山の遺影の中から見つけたときには思わず目頭が熱くなった。遺影を壁に掲げていただく以前のこと、遊就館の受付の女性に祖父が靖國に祀られているのかを問い合わせたことがあった。戦地における祖父の情報は何もなく、名前と「陸軍軍属」としか伝えることができなかったのだが、パソコンでの検索により祀られていることがわかった。両親もその事実を認識していなかったにも関わらず、しっかりと祖父を祀り続けてくれた靖國。改めて、日本文化の懐の深さに感動した。現在私は靖國の近所に勤めているため、お昼には必ず靖國へ行く。祖父の魂に引き寄せられているのではないかとも思う。この国の礎を築いて下さった英霊の方々の存在を意識し、その魂と向き合える靖國。今では政治の道具に利用され、靖國の名も軽く取り上げられるようになってしまった。それでも、今年の終戦記念日の参拝者は十六万六千人だったそうだ。昨年十五万六千人を大きく上回っている。靖國は、英霊の魂と向き合える場所のみならず、伝統が守られ、真の癒しが齎される場所なのではないだろうか。以前読んだ雑誌に記されていた渡部昇一氏の言葉に、首相の靖國参拝に中国が干渉する理由として、国家を守る為には死を恐れない日本人の魂の根源が靖國にあるということ。中国は解っているからだとの記載があった。確かに、英霊の方々に手を合わせるということは、先人の生き様に感謝し、その姿勢を手本にすることを意味する。訪問団で行われる慰霊をする心は国民の愛国心を育て、引いては主権を侵害されることのない強い国家を築く基盤となるのではないだろうか。台湾の方々は獅頭山勸化堂や飛虎將軍廟に見られるように、先人の魂に感謝の意を捧げ祀る真心を持っておられるが、台湾の靖國に相当する済化宮に於いても、靖國と日本人の関係と同様のものが存在しているのではないか。時代がどう移り変わろうとも伝統文化を静かに守る靖國と済化宮がいつまでも失われることがないよう祈るばかりである。

今回の訪問団に参加して驚いたことは、昨年よりも確実に進化をしているということだ。飛虎將軍廟における、台湾の方主体のセレモニー、塩水小学校で

のお揃いの園児の衣装、宝覺寺における慰霊祭の司会進行、そして何よりも、訪問団員の松俵氏の出資金から、新しい保安堂に立派な龍の柱が2本立てられたこと、壁に十二年に亘る訪問団の慰霊活動の趣旨が刻まれ、誰の目にも触れることが可能になったことだ。また、塩水小学校の子供達が、私達訪問団の名刺を貰い集めていることも昨年にはないことであつた。彼らがその名刺から何かを見出し、将来これまでにない日台関係を生む可能性を感じる。地道ではあるが、この意義深い活動が歴史に刻みこまれ、ずっと継続していくことを心から願う。

真の歴史的史実を知らずして 真の外交は不可能である

ながいし たつろう
岩本 永石 辰郎 氏

去る平成二十二年十一月二十二日から二十六日まで四泊五日間の日程で陸軍航空士官学校五十八期生の同期生の日高誠兄の勧誘を受けて慰霊訪問団に参加する為、成田空港から「チャイナエアライン」にて台北空港(台湾)へ初めて旅立った。日頃私達は各種の著書、テレビ、ラジオ、新聞記事等のメディアに接し、それ等による当地の原風景やその土地の住民の生活や環境、また住民の土動並に歴史、文化など知識として知るが、昔から「百聞は一見に如かず」という言葉があるとおおり、今まで知識として得た認識と現地に足をふみ入れ、心と体で体験する実感は正に天地の差ほどの相違があり、はじめて真実が理解できた。

台湾の歴史を繙いてみると日清戦争後、日本の勝利により明治二十八年割譲され、日本の領有地となったことは説明する必要もないが、明治政府は統治の基本を日本国内と同じとする方針のもとに住民に対する教育、文化、福祉政策などあらゆる分野に亘って善政をいってきた。その影響が先祖代々現地民の間に浸透、受け止められているのではないかとこの実感を強く持った次第である。その最たるものは教育そのものであつたと本慰霊団の団長として十二年間に亘り活躍してこられた小菅玄三郎氏が訪問の各地で強調されていた。

戦後、台湾は一九四九年の共産党との内戦に敗れ、同年台湾への進出により現地民の惨殺があり、その数二万八千人に及び一九八七年に漸く戒厳令

も解除され一九八八年一月蔣経国の死去により、後を継いだ李登輝総統による善政がしかれ、日本との親善友好が一段と開花した時期でもあつた。同総統は一九九六年初の総統直接選挙で当選し第九代総統となり二〇〇〇年五月任期を終えて退任されている。そしてご在任中の政治理念として指導者は邪な心をもってはいけぬ。私をもってはいけぬ。「私は私でない私」であるという自らの心情を述べていらつしゃることも知り、ご人徳の高さに敬服いたしました次第。その後二〇〇八年の選挙により圧倒的多数により国民党の勝利となり、大中国の影響により常に圧力がかかり、原住民の不安は消えない現状である。

このような台湾(中華民国)の国内情勢下にあつて、私達慰霊訪問団一行四十六名は台北、台南、高雄、台中、新竹で現地の方々の出迎えをうけ、心温まる歓迎をいただき正に異国とは思えない親善友好の慰霊行事で台湾の原住民の方々は「心許せる友人同様」という感を深くした。そして現地住民一般、中でも識者の方々は戦前の日本精神を堅持され、今日でもこの精神が息づき識者の方々から逆に「日本どうした」という忠告さえ与えられるのではないかとこの感さえ、もったひとときでもあつた。日本と台湾はそれぞれ独立した二国ではあるが、精神的つながりの上では正に一国であると言える親善友好の国柄であろう。

真の歴史的史実を知らずして真の外交は不可能であろう。行く先々の訪問地での実態と感想は当訪問団の先輩格でもある日高誠兄にゆずり、小生自身は全般的な感想にとどめた。いよいよ最後の締めくくりとなりましたが、訪問してきた各慰霊地では団員ひとしく「君が代」と「海ゆかば」を合唱し、そのあと小菅団長は訪問した各地各地の住民の方々への歓迎にこたえ、第十二回を積み重ねてこられたご経験と、もちまへの英智と人徳でもあろうが、極めて行き届いた、然も心のごもった内容の答礼のご挨拶を述べられていたが、現地住民のご参加の方々も、ひとしく私達慰霊訪問団の現地に対する心の配慮を感じて頂いたのではないだろうか。

以上私は今回、慰霊訪問初参加の一員として率直な全般的な感想にのみとどめ、先輩団員の日高誠兄にハトンタッチを致し各所訪問先でのことについては割愛することにした。日高兄と同行したことは何よりの幸いであつた。

残念だった明石元二郎墓参

まえはら きよみ
岩本班 前原 清美氏

私の今回の台湾慰霊訪問の旅は二回目です。昨年は潮音寺を訪ねることができました。またバシー海峡に向けて献花をさせていただき私にとって最大の思い出となりました。

今年は明石元二郎の墓を楽しみにしていましたが行き着く事ができず残念でした。何冊か彼の本を読んでいますうちに明石元二郎の面白いところが判ってきました。

明石元二郎は数学、語学が得意な俗にいう頭のよい人だったのですね。そこで陸軍大学校長の児玉源太郎に見出されて、常に活躍しています。私の想像ですが明石元二郎は、誰にでも好かれる庶民性を持ち合せていました。好奇心と知識の吸収力が抜群ですから、児玉源太郎ばかりでなく伊藤博文や山縣などの知遇を得てますます大活躍できたのでした。杉山茂丸は明石元二郎と同郷の人でした。杉山は玄洋社の頭山満と近い関係で、台湾問題を深く研究する糸口を明石に与えることができました。福岡藩は五十二万石の雄藩ではあっても勤皇佐幕の間で姿勢が決まらず悩むばかりでした。そのような環境下で明石元二郎は幾多の英才の中で育ち、類をみない賢い人になっていったと思います。帝政ロシアが崩壊寸前であることをいち早く察知したのでした。その後の明石元二郎の活躍は知る人ぞ知ると云えるのでしょう。

明石さんの墓を断念して芝山巖を訪ねました。芝山巖は台湾教育の源であります。六人のすぐれた先生が殺害された所でもあります。その教育内容は愛国心を培うことであります。日本人の精神文化はそこに花が開いたのでした。

翌日は、烏山頭ダム、鎮安堂と保安堂を訪ねました。そこで松俵さんが龍の舞う二本の石柱を寄付なされたことを知りました。その心意気に感動いたしました。次には塩水小学校を訪ねました。小学生の龍の舞は、昨年に増して立派でした。また幼稚園の子達の可愛い演奏には感動いたしました。そして校長先生はじめ皆々様の御努力に深く感謝いたします。四日目には、宝覚寺を訪ねそこにある日本人墓地にもおまいりできました。団長さんからここは三つある日本人墓地の一つですと教えられて、日本人と台湾人が協力して大東亜戦争を戦ってきたのだということがよく判ってきました。

最終日に高砂義勇隊の戦没者慰霊記念碑を訪ねました。そこで高砂族の話の思い出しました。乃木将軍のことが思い出されます。乃木将軍が台湾総督になった時、二人の高砂族を射殺したら、高砂族の親分が軍に抗議して一步も引かない状態となり、時の実力者児玉源太郎は案じ、彼自身が乃木のあとに台湾総督になり、児玉は高砂族に交渉し、高砂族の要求を全部聞いて一件落着いたということでもあります。その時の高砂族の要求は無理なことではなく私も十分理解できることでした。高砂族は良識ある人だと痛感いたしました。だから、日本軍に協力できたのでした。船のマストの上にも恐れることなく登っていくと父が驚いたと云っていたことを思い出しました。

来年も参加したいです。皆様にお世話になり感謝しています。

その場所は慰霊祭を行うに最もふさわしい場所だった

まえはら てるみ
岩本班 前原 照美氏

昨年に引き続き二回目の参加にしてさらなる新しい発見と感動があった。

それは「追遠亭」である。宝覚寺での慰霊祭が終わった後のこと、「あの奥へ行ってもいいよ」とのガイドの簡さんに促されて「霊安故郷」碑の後方へ足を踏みこんだ時、「鄭春河」の名前が目飛び込んできた。ああ、この方は『台湾人元志願兵と大東亜戦争』の著者だ。遠い見知らぬ外国で知人に出会ったよううれしさを覚えた。その名前は「追遠亭銘記」の碑に建立者の一人として刻まれていた。

「追遠亭」は伊庭野政夫氏、小堀桂一郎氏ら十人が発起人となって結成した「台湾出身元日本人軍人軍属感謝表明期成会」の募金をもとにして、台湾の戦友会と遺族連合会により平成九年に建立されたものであった。まさに日本と台湾の協力で実現したものである。集合写真を撮るまでの僅かな時間ではあったが刻まれた文字を追いつつ立ち去り難い思いであった。

鄭氏のことが気になり帰ってから本を読み返してみた。そこには大東亜戦争で共に戦い散華された日本と台湾の英霊に対する純粋な思い、教育勅語の熏陶による日本精神、軍人精神が半世紀を経た今も彼の心に脈々と生き続けていること、祖国愛を失った軟弱精神の日本同胞に対する愛の鞭、更には

将来を担う日本の大学生を毎年夏に台湾へ呼んで研修している事等が記されている。

特に細川首相が大東亜戦争を「侵略戦争であり間違った戦争であった」と断定し謝罪したことに対して怒り心頭。これは英霊への冒瀆であり二百万の英霊は犬死となり、生き残りの我々は負け犬となったのかと。鄭氏はまさに日本人の中の日本人だ。戦後の日本の教育を経験しなかったために、台湾に明治の美しい日本精神がそのまま残った。鄭氏のような方達が生き残ったからこそ追遠亭の日台協力が可能だったと思う。鄭氏は四一八倍もの競争を乗り越えて血書嘆願をして採用された志願兵だった。

日台の協力によるものは追遠亭だけではない。台湾出身の元日本軍人軍属三万三千余柱を祀るあの「霊安故郷」碑の右傍らにある「和平英魂観音亭」も有末精三陸軍中將の筆になる。

してみれば、あの慰霊祭が行われる場所の碑のことごとくが日本と台湾の協力の賜。

また宝覚寺の他の一角には一万四千柱の日本人の遺骨安置所もある。

それにもまして宝覚寺自体が日本の寺で、その寺全体が台湾の方々によってコンクリートでがっちり覆い保護されている。この姿こそ日本と台湾の絆の象徴ではないか。

そう考えてみると、宝覚寺とその境内は何か特別のものに見えてくる。特に慰霊祭が行われるあの場所は。そう、その場所は慰霊祭を行うに最もふさわしい場所だったのだ。そのことに改めて気付かされ感動さえ覚える。今年の慰霊祭でまっ青な空に堂々とはためいていた三本の旗が今も目に浮ぶ。台湾旗、海軍旗、日の丸のはためきは英霊の喜びの声にもきこえる。

塩水小学校の印象は去年より強い。何といっても若い女性校長の熱意に感服。お揃いの服の可愛い園児達や力強い龍踊りの小学生達の精一杯の歓迎も全て校長先生の指導の賜。お茶を入れ接待して下さる若い先生の姿も去年より多いように感じた。驚いたことに校長先生のお話では「塩水五宝」の一つに鳥居、神社が入っていた。更に日本へ行った時買ってきたと小さな二宮尊徳像が披露された。また二宮尊徳の本を先生方に配っているとのこと。ここに戦前の日本の美しい道德教育が生きていると驚かされ感動を覚えた。今、日本にこんな教育がなされている学校があるだろうか。塩水神社の前で去年

同様ひと言書かせてもらったが、私は思わず「校長先生の熱意に感動」と書いてしまった。説明会場へ向う途中、突然一人の小学生が近寄ってきて手を差し出した。一瞬戸惑ったが名刺を求めていることが分かったので一枚渡すと次々とやってくる。十枚位渡したと思うが、これが先生の指導かその意図は分からない。しかしこれが将来の日台の絆の新たな芽となる事を期待したい。

もうひとつ心に残ったのは、団員松俵氏の新しい保安堂への龍柱二本の寄贈だ。大きな石柱で彫刻も着々と進んでいた。壁には「龍柱の沿革」と「感謝状」が立派な額に掲げられ、更には訪問団の存在が文字となって同じく額に掲げられていた。十二次にわたる小菅団長の努力の一端が報われたのではと団員の一人として誇らしくもありうれしかった。

私の台湾旅行記— 大きく変わる価値観

おぐら みほ
村山 小倉 美帆 氏

「台湾に行ってみるかい？」

それは突然の父からの誘いでした。私が最後にパスポートを手にして飛行機に乗ったのは、六年前…。久しぶりの海外旅行のチャンスに私の胸は高鳴りました。

しかし、父からの誘い…。一体、どういふ内容の旅行なのだろう。単なる観光旅行ではない気配を感じながらも心はずでに決まっていました。

「連れて行ってもらえるなら、行きたい！」そんな安易な気持ちで今回私の日華親善友好慰霊訪問団への入団が決まりました。

台湾…。どんな国なんだろう。あしつばやエステ、ショウロンポーが有名で、日本語を喋れるご年配の方がいる、という話は聞いたことあるけど…。日本とどんな関係があるのか、慰霊ってどんなことをしに行くのか…。最初はほんやりとイメージすることしかできませんでした。

しかし、旅を終えた今、私の中の台湾のイメージは大きく変わりました。日本との深い関係、信頼、友情…。それは私が学校では習っていない現実の姿でした。

旅の中では様々な感動があったのですが、一番印象に残っている訪問先は高砂義勇隊戦没英霊記念碑です。以前は記念碑の周りが竹柵で囲われて

いたというエピソードはとても複雑な気持ちになりました。そして、何より胸が熱くなった場面は小菅団長のお話でした。参加されているみなさんの思いを強く感じ取りました。

私は今回台湾で本当に多くのことを学びました。普通の観光旅行では決してできないことを体験させていただいて、今私の中の価値観や、日本に対する考え方が大きく変わろうとしています。

最後になりましたが、今回の日華親善友好慰霊訪問団の旅では、団員の方を始め、たくさんの方々にお世話になりました。本当にありがとうございました。そしてチャンスを与えてくれた両親に感謝します。

これからの日本を背負っていく社会人として、世界に恥じる事の無い国際人になれるように日々精進してまいります。

霧深い幽谷に響く 「君が代」に落涙

おぐら かずひこ
村山 小倉 和彦 氏

「武士は 玉も黄金も何かせん 命に代えて 名こそ惜しけれ」と詠んだ、乃木將軍の言霊を己の座右の銘に深く刻み込み、十一月二十四日から二泊三日の旅程で、本当に久しぶりに台湾を訪れました。

これまで台湾と云えば、ゴルフや観光に買い物と正に物見遊山の旅でしたが、今回は「第十二次日華親善友好慰霊訪問団」の一員として、襟元には日章旗と青天白日旗のバッジを佩用し、各種行事への参加やレストランに入店する際も、日章旗と軍艦旗の小旗を先頭に「二列縦隊」で行進したところです。(苦笑)

もしこんな光景を日本で見れば、かなり危ない集団と勘違いされる事でしょうが、台湾では遠く日本から同胞が来たと、各地万雷の拍手で迎えられました。

総勢四十六名の訪問団一番の目的は二十五日、台中市宝覺寺にて挙行された「第二十回原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者慰霊祭」に列席の上、大東亜戦争で日本陸海軍の一員として散華された三万三千余柱の台湾青少年の英霊に哀悼の誠を捧げると共に、八十歳を超えた元日本軍人達との再会でもあったのです。たどたどしい日本語を操る老兵達は、息子ほど年の離れた我々の手を握り、涙を流さんばかりに

何かを伝えようと、一所懸命しきりに話し掛けて来ます。

内容が理解できるのは半分程度ですが、その直向きさに心打たれ傾聴すると、日本統治時代の素晴らしさや日本軍人として欧米と干戈を交えた矜持、更に戦後蒋介石率いる国民党軍の圧政に苦しめられた歴史など多岐に亘りました。次に新竹県に建立され台湾の靖國神社と位置付けられる「済化宮」を参拝し、本殿のご案内を戴きましたところ、台湾全土三万三千余柱のご位牌が天井から床まで見事に整然と安置され、実に荘厳な感じを受け深く感銘した次第です。

翌二十六日早朝より「高砂義勇兵」で有名な烏来まで足を延ばし李登輝総統が揮毫された「靈安故郷」の碑に献花黙祷を捧げ、君が代斉唱を致しましたが、その歌声は霧深い幽谷に彷徨う通奏低音の如く、勇猛果敢で世に知られたタイヤル族の荒ぶる魂を慰撫してくれたものと確信せずにはおられませんでした。

彼等の忠誠心を語る際に必ず紹介される「餓死した高砂義勇兵の荷物を解いたら、軍の糧秣が手付かずで残されていた」とか「高砂義勇兵の捕虜に米軍が、なだめたり拷問して味方になるよう脅かしたが、彼等は誰一人として寝返らなかった」と等の逸話を思い出し乍ら、我々より一回り小さい躰の腰に蛮刀を下げ、槍を携え東面した銅像を見上げ、不覚にも落涙したのは私一人ではありません。閑話休題、過日尖閣諸島問題を嚆矢として「抗日有理・愛国無罪」を掲げた反日デモの団の一団の様子には、約百十年前「扶清滅洋」を唱えた「義和団」や、それに連なる「北清事変」を彷彿とさせられます。

北方領土、竹島、尖閣諸島と正に「前門の虎、後門の狼」の如き有様の我が祖国ですが、団員同志一丸となり「少々危険なアジテーター」を演じて頂き、現政権とその政策の全てを容認する「サイレントマジョリティー」等と決して呼ばせぬよう、大胆に活動して頂ければこれに勝る幸せはありません。

海自夏略服姿も凛々しい小菅団長の勇姿と、朗々たるスピーチを拝聴し乍ら、当初この旅行企画に疑念を抱いた自分を忸怩たる思いで猛省した次第です。

反省や後悔ばかりの「台湾慰霊訪問旅行」ではありましたが、ご同道戴きました四十六名の愛国の志士達との邂逅は、本当に大きな収穫でもありました。

特に陸士五十八期生の日高、永石

両先輩外皆様のお元気なご様子に感動し、我々若い者(五十六歳?)も安閑とはしておられません。(苦笑)

主人がつぶやいた 「深い意味のある旅行」・・・

おくら ひろこ
村山班 小倉 弘子氏

私が台湾に行ってみたくと思ったのは、親しい友人夫婦からの誘いがあったからでした。友人達と一緒に良いと言う私に、主人は「もっと深い意味のある旅行」に行こうと言ってくれたのです。

私の知識と云えば、日本と台湾との歴史的な背景は余り考えもせず、まして戦争中の出来事等、遙か大昔に僅かに社会の教科書で学んだ程度のものでした。

しかし訪れる各所で、小菅団長の物静かでありながらも、熱い想いが込められたご挨拶をお聞きする都度、徐々に散華された台湾人元日本軍人軍属のご英霊に対する敬意と感謝の気持ちがあふれてくるのを禁じえませんでした。

台中市「宝覚寺」で執り行われた慰霊祭に参列した折、日本人墓地やお寺等がゴミ一つも無いように綺麗に整備されており、とても感心した次第です。

慰霊祭は肅々と進められ無事に終わりましたが、気になることが一つありました。それは色々とお世話下さる方々が皆かなりのご高齢であり、今後この慰霊祭を引き継いで頂ける後継者があるかどうかです。

また台湾の靖國神社と呼ばれている「済化宮」での慰霊式も非常に感銘深いものでした。あの整然とお祀りされたご位牌やその前の勸化堂の社殿から眺めた美しい夕日は、多くの観光客が訪れるどんな場所よりも、清らかで美しく感じました。

今回、この「日華親善友好慰霊訪問の旅」に参加して、小菅団長はじめ同行の皆様方から様々な事を教えて頂き、また親切にして頂いた事に大変感謝しております。冒頭にも書きましたように主人がつぶやいた「深い意味」を、旅を終えた今、改めて噛み締めているところです。

今後この「台湾慰霊訪問団」で学んだ真実を、少しでも他の人々に伝えて、日華親善友好の架け橋となる事が出来るよう努力致します。

そして随所で我々をととても暖かく迎えて頂いた台湾の方々が、元気に長生きして下さる事をご祈念申し上げ、結びと

致します。ありがとうございました。

日本人としての誇りを感じた三日間

ひろみ 博美氏
羽音班 エドワーズ

祖父が屏東の製糖工場で戦前働き、母も幼少時代を台湾で過ごした経験があることから、以前より慰霊の旅に参加したいと思いつつ、今年やっと念願叶って参加することが出来ました。

参加するまでは「三度目の台湾旅行」と、軽い気持ちでいたのですが、行く先々での慰霊行事に参加し、日本人として大東亜戦争を戦った、日本人として日本人魂のある台湾人にお会いし、そしてバスの中で小菅団長の色々な説明を聞くうち、つくづく慰霊訪問の意義と重要性の深さに気付かされました。

私は三日間の慰霊旅行に参加したのですが、この三日間で一番心に残ったのは、二日目の勸化堂で、手元にある日本語の原稿を読みながら、広枝巡查との関係、そしてなぜ広枝巡查の供養をしているのかを一所懸命説明してください、元軍人の台湾人の方です。「一緒に供養してきた人がみんな亡くなって、三年前から供養するのは自分一人になったけど、私は死ぬまで供養を続ける」と言われたお言葉が忘れられません。

最後の台日文化経済協会との交流昼食会では、ニューヨークで親しくしていた台湾人の友人のお母様でもある、方水蓮氏と十年ぶりに偶然お会いすることも出来、人の世の巡り合わせ、縁の不思議さを感じる旅でした。

今更ながらに、先人が台湾に残した日本人魂、そしてそれを大切に守り育てて来られた台湾人のお心に触れ、日本人としての誇りを感じた三日間の旅でした。この慰霊訪問団が、今後も何年も続くことを、そして、年毎に慰霊団の人数が増えて行く事を祈念しています。次回はず、友人や娘を誘って参加したいと思います。

真実を伝えれば我々は目覚めます

もり やすこ
羽音班 森 靖子氏

「御英霊晴れ」だったのかしら、雨上りの後を歩いたり、さわやかなお天気に恵まれました。御英霊を敬い、日本を愛する素晴らしい方々と意義ある旅にどうとう思い叶って参加することができました。感謝で一杯です。

「海陸の いつへを知らず 姿なき

あまたの御霊 国護るらむ」

この御歌が心身に四六時中鳴り響いての旅でした。

宝覚寺でお坊様が鐘を鳴らしながら入場された時は涙が溢れました。日本人であった事を誇りに、そして御英霊を英雄と崇められ律儀に慰霊祭を催し続けて下さる台湾の方々の直き心!感謝感謝の旅でした。ああこの体感を「日本は悪い」と教へられている子供達に味わって貰いたい!そして苛酷な情報戦の国際社会の中を、日本人として立派に生きられる情念を養って貰いたい。台湾で義勇公に奉じられた父祖様方をしっかり受け止めて!

前日の台湾台日海交会様による歓迎の夕食会の時、施秀坤様と同席となりました。ラバウルで負傷した事もあったというのに、ニコニコとお元気で、二・二八事件で友人は行方不明だが私は母のお陰で生きています。そして

「新高の 山の麓の 民草も 繁り勝ると 聞かや嬉しき」

と明治天皇の御製を教へて下さいました。私は初めて知ることができました。大御心を御稜威として、そのまま普れに思っ下さっているからこそ覚へていらっしやるのだと存じます。

今日本で「台湾に行ってみたくのよ、観光ではなくて、感動感動の旅だったのよ」と私達が知らされていない獅子山勸化堂のこと、済化宮の事、高砂義勇隊の事等を話しています。

私達が御英霊を顕彰しなければ、御英霊が日本を護りたくても護れません。靖國神社を天晴れなものとし、自衛隊を栄ある国軍にしなければ、子供達の背筋は伸びません。

テレビよ、毎日尖閣や北方領土・竹島等を、本日はこのような模様ですと映し出して欲しい。真実を伝えれば我々は目覚めます。

この慰霊祭を十二年も続けて下さっている団長様を始め御家族に敬意を表します。本当にありがとうございます。どうぞ皆様お元気で過ごして下さいませ。

『わが体 翼となりて 日本列島抱きしめて 目覚む秋末明』

実録台湾 — これが真実の姿

第12次訪問の旅の収録映像を4月3日から5月8日の毎週日曜日、朝10時から昼12時30分の6回シリーズで、インターネット生放送番組でお送りいたします。下記の番組URLから過去の放送内容も、アーカイブでご覧いただけます。

宝覚寺(慰霊祭)

URL: <http://ust.neovoice.tv/touron>

知られざる「神蹟の遺跡」

獅頭山勸化堂 —

台湾人の部下を救った広枝音衛門警部

獅頭山といえば台湾仏教の聖地だ。海拔520メートル、原生林におおわれたこの山には大小18にもおよぶ戒律厳しい寺院が、自然そのままの景観を残す岩穴を背後にして並んでいる。

時は昭和51年(1976)9月26日、この獅頭山勸化堂に、戦前、苗栗県で巡査をしていた広枝音衛門をお祀りして供養する式典が、日台双方の関係者を集め、盛大かつ厳かに行われた。当初は台湾の人々が親しみを込めて呼ぶ「ひろえ」を取り「広枝廟」を建設しようという声があがったほど、この広枝音衛門という人は台湾人の元警察官たちから人望があった。それは人望というよりも尊崇といったほうがよいかもしれない。なぜなら広枝音衛門の自決によって、2千人にのぼる台湾人青年の生命が救われたからだ。

先の大東亜戦争中の昭和18年

(1943)12月、日本軍はフィリピンの防衛強化のため、総勢2千名に及ぶ海軍巡査隊を編成し派遣した。この巡査隊の総指揮官に任命されたのが広枝警部であった。

マニラでは厳しい訓練に次ぐ訓練のなか、広枝隊長は常に部下の先頭に立って励ました。巡査隊の任務は主に物資の運搬、補給など後方支援であったが、戦況は刻々と悪化する。昭和20年2月、マニラ市近郊に上陸した米軍に対峙すること3週間、広枝隊長率いる海軍巡査隊はよくマニラ市街防衛の任務を果たしたが、ついに軍上層部より総攻撃の命令が下達される。やがて巡査隊に棒地雷が渡され、「これで敵戦車に体当たりしてその場で全員玉砕せよ」との命令を受けた広枝隊長は、巡査隊の小隊長を務めていた劉維添氏を伴い、密かに米軍と交渉する。その結果「諸君はよく日本のために戦ってくれた。だが、もうよい。戦

闘の続行は戦備からも不可能である。そうはいっても、今ここで軍の命令どおり玉砕することは犬死に等しい。故国台湾には、諸君の生還を心から祈っている家族がいる。この際、米軍に投降し捕虜になっても生きて帰れ。責任は私がとる。私は日本人だからね」と言い遣して壕に入るや拳銃で自決したのであった。広枝隊長、享年40歳。

さて、この一死をもって代えた広枝隊長の決断で、海軍巡査隊の台湾青年たちはそれぞれ故郷に帰ることができた。

劉維添氏は、隊長戦死の地であるフィリピンを訪れ、その霊を弔うことを宿願としていたが、昭和58年(1983)5月、ついにその思いを遂げることになる。そして、隊長戦死の土を拾い集め、茨城県取手市に住む未亡人の広枝ふみに手渡したのであった。



広枝警部を祀る勸化堂



獅頭山の夕日



幽玄な獅頭山



中華民國外交部・ 台日文化經濟協會 表敬訪問



平成22年11月26日(金)は、烏来の高砂義勇隊戦没英霊記念碑での慰霊式を終えて、台日文化經濟協會主催の歓迎昼食会に臨みました。

会場の逸郷園に到着すると鄭祺耀会長以下協会の理事の皆様がお店の入り口で待っておられ、握手で出迎えて下さいました。テーブルには台日両国の国旗をあしらった、団長をはじめ副団長の立派な

席札が準備されており、細やかな配慮に感じ入りました。

鄭会長の歓迎の挨拶、団長の答礼の後、昼食会が始まり台湾ビールと紹興酒で盛り上がりました。各テーブルでは名刺が交換されると同時に台湾の現状や経済の話題にも花が咲き、大いに懇親が深められました。従前とは少し違う素朴な客家料理に舌鼓を打ち、料理の早い段階で御飯が出て、御飯と

一緒に料理を楽しむのが特徴とかで、すぐ後に中華民國外交部表敬訪問を控えた訪問団への協会の皆様の配慮を感じました。

一年振りの再会ということで、話は尽きませんでした。外交部への約束の時間も迫っており、後ろ髪を引かれる思いで来年の再会を約して和やかな宴はお開きになりました。



鄭祺耀会長と記念品交換



台日文化經濟協會の歓迎昼食会





外交部での訪問団歓迎セレモニー

台日文化経済協会を後にした訪問団一行は中華民國外交部へ向かいました。当初は表敬訪問は午前中に予定されていたのですが、参加者が47名に増えたため、収容定員の関係で午後に変更になりました。広いレセプションルームに通された一行を待ち受けておられたのは外交部亞東關係協会副秘書長の粘信士氏です。

名刺交換、記念品交換に続いて、粘氏が6箇所の辦事處に勤務

し、大阪が一番長かったので私の日本語は関西訛りであるとユーモアたっぷりに自己紹介された後、「先祖からの日台関係を維持、発展させることが自分たちの責務である」と強調されました。小菅団長は三万三千余柱のご英霊を今も顕彰し、宝覺寺を大切に遺しておられる台湾の皆様には謝意を述べ、第12次訪問団の特徴と永続性を獲得しつつ全国版のプロセクトに発展してきたことを答礼で話し、

代表的な団員を数名紹介しました。

帰国の飛行機の時間の関係で慌ただしく過ごし、質疑応答は割愛、記念写真の撮影も省略、全員揃っての正式な挨拶もないままでバスに乗り込み、粘信士副秘書長はじめ外交部の皆様には、誠に失礼であったと深く反省しております。第13次の訪問の折には真つ先に、ご無礼をお詫びしたいと思います。



粘信士亞東關係協会副秘書長と歓迎の握手



外交部での名刺交換

第12次台湾親善友好慰霊訪問の旅

結団式・壮行会～帰朝報告会・新年会

平成22年度「第12次日華(台)親善友好慰霊訪問の旅」の結団式・壮行会は、台北駐福岡経済文化辦事處處長の曾念祖氏、産経新聞九州総局総局長の野口裕之氏、榎本ビル商事株式会社取締役会長の榎本巳之助氏(専門学校ライセンスカレッジ名誉理事長)、台湾在日福岡留学生会会長の林冠廷君らの来賓をはじめ、筑後市議会議員の永田昌巳氏、春日市議会議員の松尾嘉三氏、慰霊訪問の旅参加者、九栄会会員ら約70人が参集し平成22年10月23日、福岡市中央区天神の平和樓本店で開催され、慰霊訪問の旅の成功を祈念するとともに、日台の友好親善を深めた。

今回の慰霊訪問の旅には46人が参加予定で、福岡、佐賀、長崎、大分、宮崎、兵庫、香川、東京、神奈川、埼玉から参加と全国的な広がりを見せている。なお、今回は海外統治の模範として国際的評価の高かった領台50年を植民と収奪の暗黒時代と強弁し、祖国防衛とアジア開放(大東亜共栄)のために散華された英雄的台湾人の行為を教唆誘導された非主体的なものと侮辱きった、

平成21年4月5日放送のNHKスペシャル「アジアの一等国」におけるNHKの売国的な企てを的確に突き崩すため、ビデオカメラマンが同行取材し、魂の交流の真実の姿を記録する。

第12次の日程は、11月22日(月)～26日(金)の4泊5日のAコースが福岡・成田空港から出発。11月24日(水)～26日(金)の2泊3日のBコースが福岡から出発し、台中で合流の予定。台北到着後、新幹線で台南に移動し、台湾各地を訪問、福岡・成田空港帰着となっている。

この間、明石元二郎台湾総督墓所、芝山公園の六士先生墓所(台北)、烏山頭ダム、八田與一記念館(台南)、飛虎將軍廟(同)、塩水国民小学(塩水)、濟化宮(新竹)、高砂義勇隊戦没英霊記念碑(烏來)などを訪問。台中では日本人墓地慰霊式を行い、宝覺寺では原台湾人元日本兵軍人軍属の慰霊祭に参加する。

また、何怡瀾・陳清華ご夫妻、黄明山・葉美麗ご夫妻ら現地の人たちによる歓迎昼食会や歓迎夕食会が各地で予定されており、ラハウル會、台湾台日海交會や中日海交協會、台

日文化經濟協會による歓迎会も予定されている。さらに最終日の26日には、中華民国外交部(台北)を表敬訪問する。表敬訪問は、平成19年から行っており今回で4度目となる。

午後5時30分から始まった結団式では、日台両国の国旗敬礼、国歌斉唱に続き、先の大戦で亡くなった原台湾人元日本兵軍人軍属並びに慰霊訪問事業に尽力し、志半ばに亡くなられた方に対し、黙祷を捧げた後、訪問団の西山洋氏が開式の辞を述べた。次いで、訪問団事務局の原田和典氏が経過報告を行い、訪問団名簿、行程表など簡潔に説明した。

続いて訪問団を代表して小菅団長が挨拶に立ち、「これまで215人、延べ339人が慰霊訪問の旅に参加。リピーターも多く、5回、6回と繰り返し参加している人もいる。今回は46人の参加者中、23人が初めて、23人がリピーターとなっている」と紹介し、「訪問団を見送る人たちも立派な参加者であり、皆さんが一緒になって“家族交流・兄弟交流”の大事業に邁進されることを祈念します」と述べた。



和やかに記念撮影



安河内副団長へアルバム等の贈呈

“感動と感謝、日台の絆さらに深く”

大日本帝国の軍人・軍属として亡くなった台湾人を慰霊するため昨年11月に台湾を訪れた、「第12次日華(台)親善友好慰霊訪問団」の「帰朝報告会・新年会」が平成23年1月22日(土)、福岡市中央区天神の平和楼で開かれた。台北駐福岡経済文化辦事處處長の曾念祖氏代理の黄水益氏、同文化課長の林育柔氏、産経新聞九州総局総局長の野口裕之氏、榎本ビル商事株式会社取締役会長の榎本巳之助(専門学校ライセンスカレッジ名誉理事長)、台湾在日福岡留学生会会長の陳澄琦さんらの来賓をはじめ、筑後市議会議員の永田昌巳氏、慰霊訪問の旅参加者、九栄会会員ら約80名が参加、訪問団員の無事帰国を祝うとともに、日台の親善友好をさらに深めた。途中、元台湾総統府国策顧問の金美齡氏も飛び入りで参加し、団員らの話に聞き入った。

帰朝報告会は、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷に続き今回の訪問団に参加した田中純夫氏が開会の辞を述べ午後5時から始まった。田中氏は「純粋で素晴らしい慰霊団」参加への感謝の気持ちを語った。次いで小菅団長が挨拶に立った。小菅団長は、報告会の寸前まで作成に当たった慰霊訪問の旅の詳細な資料について説明、団員の書いた感動的な感想文の一部を紹介して、「日本と台湾のこれからの益々の発展、そして日本と台湾の生命の絆がこれから益々強固なものに、また、長いものになることを祈念します」と述べた。来賓挨拶後、訪問団事務局の原田和典氏(九州不動産専門学校グループ専任講師)が帰朝報告をした。

今回の「慰霊訪問の旅」は4泊5日のコース(平成22年11月22日～

26日)と2泊3日のコース(同11月24日～26日)のコースを設けて実施され、小菅団長以下、市議会議員や教育関係者や会社員、主婦ら全国から46名が参加。これまでで最多の参加者となり、台湾各地を慰霊訪問、親善友好を果たした。

主な訪問先は、芝山公園・六士先生墓所(台北)、烏山頭ダム・八田與一夫妻墓所(台南)、海尾朝皇宮・飛虎將軍廟(同)、保安堂(高雄)、鹽水國民小學(塩水)、宝覚寺(台中)、勸化堂(苗栗)、濟化宮(新竹)、高砂義勇隊戦没英霊記念碑(烏來)などで、鹽水國民小學では、児童の心温まる歓迎を受けた。今回は、飛虎將軍廟の上宮にあたる海尾朝皇宮と、フィリピンのマニラで台湾兵に帰国命令を発し、自ら生命を絶った広枝警部を祀る勸化堂を初めて訪問、献花式を行った。勸化堂では、台湾人部下の最後の生き残りの劉維添氏と感動的な出会いがあった。11月25日には宝覚寺で行われた「大東亜戦争原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰霊祭」に参列、小菅団長が祭文を奏上した。

また、この間、台北市での団員夕食会で、司馬遼太郎の著書「街道を行く一台湾紀行」にも案内役として登場する台湾の知日派実業家・蔡焜燦氏の興味深い講話を聞き、何怡涵・陳清華ご夫妻、黄明山・葉美麗ご夫妻ら現地の人たちとの交流会や台湾台日海交會、ラバウル會、台湾中日海交協會、台日文化經濟協會の皆様との交歓会に出席した。各地で歓談を重ね、親日国・台湾の姿に直接触れるとともに、親善友好の絆をさらに深めた。最終日の26日には中華民国外交部を表敬訪問、帰国の途についた。

原田氏は、福岡空港での出発式後、中華航空・JTB・新亞旅行社の各支店長の挨拶、見送りがあり、機内では客室乗務員が、「日華(台)親善友好慰霊訪問団」の固有名詞でアナウンス。12回目を迎えた訪問団に対する温かいエールがあったことを報告、慰霊と交流という所期の目的を達成するとともに、全員無事に帰国できたことを報告した。

帰朝報告後、団員感想発表に移り、訪台した福岡教育連盟の藤村一氏は「教育の大切さを改めて深く認識し、教育に携わる者として、その責任を痛感した。皆様のご期待に応え、我が国の教育の正常化を果たしていくことをお誓いして、お礼に代えたい」と述べた。その後幹事旅行社謝辞などがあり、報告会は終了した。

第2部の新年会では慰霊訪問団の林克紀氏(九栄会理事)が開会のことばを述べスタート。来賓の台北駐福岡経済文化辦事處處長の曾念祖氏が開会のメッセージを伝え、「小菅団長はじめ皆さんで慰霊訪問団を組織して毎年台湾に行かれ、各地で草の根の交流を重ねられており、台湾と日本の友好親善に対する多大な貢献に心から感謝します」と祝辞を述べた。次いで、これまでの訪問団で副団長を務めた金澤明夫氏が第13次に向け力強く乾杯の音頭をとり祝宴に移った。

祝宴では、小菅団長が出席者ひとりひとりをエピソードを交え紹介、会場では旅の様子を記録したDVDが上映され、焼酎が当たる抽選会も催されるなど和気藹々とした雰囲気なかで、台湾の話に花が咲き、日台の親善交流をさらに深めるとともに第13次訪問への新たなスタートが切られることとなった。

日台の魂の交流11周年 第8回台湾特別講演会

— 郷土福岡が生んだ世界的英雄・偉人 —

『明石元二郎台湾総督の生涯』



「日華(台)親善友好慰霊訪問団」は、大東亜戦争で散華された台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱の慰霊と、台湾の人たちとの“家族交流・兄弟交流”という民間団体としては異例の事業を11年の長きに亘り毎年行っているが、台湾を深く愛し大きな足跡を残した「郷土福岡が生んだ世界的英雄・偉人—明石元二郎台湾総督の生涯」をテーマに第8回台湾特別講演会(産経新聞社、福岡県神社庁など後援)を、明石元二郎のご令孫で画家の明石元紹氏と文明史家の黄文雄氏を講師に招き、去る平成22年6月5日、福岡市中央区の福岡ガーデンパレスで開催した。

台湾特別講演会は、平成22年11月22日から5日間予定している「第12次日華(台)親善友好慰霊訪問の旅」への参加呼び掛けを兼ねたもので、第1部は明石元紹氏が「明石元二郎台湾総督の生涯」と題して、①その生い立ちと幼年時代②日露戦争中の謀略工作③朝鮮半島併合時の活躍④台湾総督時代とその生涯—の4点について、当時の時代背景や明石のエピソードを絡め、郷土福岡が生んだ世界的スケールの偉人の業績、波乱の生涯を興味深く語った。

第2部では、黄文雄氏が「明石元二郎総督と台湾近代史」と題して、①日本三大植民地説と台湾の植民地論争②台湾総督と台湾の近代史③台湾近代史の中での明石元二郎台湾総督④台湾軍司令官列伝⑤謎の島台湾の扉を開けた日本の博物

学者、などについて、台湾の近代化に貢献した日本の統治政策を明石元二郎総督を軸に熱っぽく語った。

会場には周碩穎・台北駐福岡経済文化辦事處長(講演会当時)代理の黄水益氏、水城四郎・福岡市議会議員、永田昌巳・筑後市議会議員、廣瀬千秋・産経新聞九州総局長、山本泰藏・日本会議福岡理事長らの来賓をはじめ、明石元二郎の出身地である福岡市中央区大名の前公民館長・大崎信昭氏や九州不動産専門学院グループの同窓会・九栄会の会員、台湾に関心を持つ市民など多くの人が詰めかけ、明石氏と黄氏の講演に熱心に耳を傾けていた。

講演に先立ち式典が行われ、国旗敬礼、国歌斉唱、黙祷、「生命の絆」唱和、開会の辞のあと主催者を代表して慰霊訪問団の小菅団長が挨拶に立った。小菅団長は講演会が8回続いてきた理由と講演会の目的を、慰霊訪問団の発足経緯を交えてつぎのように語った。

「台湾の方が日本兵として三万三千余の命を捧げられた。このことを見過ごす訳にはいかないと、年1回の宝覚寺での慰霊祭参列を決意しました。慰霊訪問団を継続していくうちに①団員募集②団員と台湾の人との交流③集大成としての本製作④事務局の設置—の4つの難問に直面し、これをクリアしながらやってきた11年でした。講演会は、新聞各紙での広告掲載を断られたため、旅行の案内を兼ねてスタートさ

せた次第です。その参加者も増え、平成20年からガーデンパレスで行っています。今日の講演を聞かれ一人でも多くの方が旅行に参加されるように、ご協力をお願いします」。続いて来賓を代表して台北駐福岡経済文化辦事處の黄水益総務部長ら3氏が祝辞を述べた。黄氏は、慰霊訪問団が台日の友好親善に尽力していることに敬意と感謝を述べたあと、周氏の挨拶を次のように代読した。

「台湾の現在の馬政権も対日関係を非常に重視しています。親善友好を促進する一方、航空路を新設するなど大きな成果を上げています。また、九州・山口各県との交流も活発化しています。知事・副知事をはじめ政財界のリーダーの台湾正式訪問も相次ぎ、観光客誘致、技術交流、物産展開催など人的・物的交流を広く展開しています。そのような中、11年間続けてこられた慰霊訪問団の交流活動は民間外交として、長年に亘り両国間の堅い絆を築き上げてこられたと信じています」。来賓挨拶終了後、「台湾の声」を読み上げ式典を終了し、講演会に移った。

講演会終了後、午後5時すぎから同会場で明石・黄両氏を囲み、台湾からの留学生も参加して懇親会が開かれた。懇親会では錦川流師範教授の錦川岳泉さんによる祝舞などもあり、第12次の慰霊訪問団への参加の気運が大いに盛り上がった。



明石元紹氏の講演内容(概要)は次のとおり。

明石元二郎は、福岡市出身の職業軍人で、黒田藩士の明石助九郎の次男として元治元年(1864)、大名町に生まれ、大正8年(1919)同地で波乱の生涯を閉じた。

私は明石と直接同時に過ごしたことはないが、いろいろ調べてみると、激動の世の中で、立派な極めて珍しい人物だったようだ。明石は生涯で3つのことを行った。一つはロシア革命の時の工作。二つ目は朝鮮半島の併合。これが日本の一番役に立った。民族独立、国家独立は力ではやるしかないと、言論統制を徹底的に行った。明石は無血で朝鮮民族を作ったと思っていたに違いない。三つ目は台湾総督を務めたこと。台湾時代は短かったが、明石は水力発電事業などを推進し、八田與一が技術指導した嘉南大圳(灌漑用水路)の建設も最初に提唱した。

明石が諜報活動を行った時代は、レーニンのような階級闘争を唱える革命家は一部であった。貴族や知識人と一般国民の落差は激しくロシアは遅れていた。ロシアの周辺には衛星国家や侵略された国が数多くあった。ロシアの圧政に苦しみ、帝政打倒をめざす勢力が散在していた。明石はヨーロッパ各地の反

ロシア活動組織を精力的に回り、ロシア軍の動員妨害、反戦運動などに資金を提供した。

明石には山縣有朋の英断により、今の貨幣価値にして100億円を超える工作資金が支給された。当時の国家予算からすると途方もない金額で、いかに日露戦争が日本にとって敵しかったかが分かる。日露戦争をロシアやヨーロッパ側から見たのは明石で、明石は諜報活動でロシアやヨーロッパの動きを熟知していた。一方、大勝利と思った日本国民は、賠償金も取れない政府に激昂、日比谷焼打ち事件をはじめ各地で暴動が起こった。日本が大騒ぎした割にはロシアは静かだった。日本が戦勝に沸きあがっていたときに明石は帰国、汚い格好で児玉源太郎の前に姿を現した明石を見て、児玉は泣いて喜んだという。

その後、朝鮮半島の統治に手を焼いていた伊藤博文は、抵抗活動を沈静できる軍人の派遣を田中義一に要請、田中は明石を推薦した。明石は寺内正毅の説得に、内政の手伝いということで泣く泣く韓国へ渡った。ヨーロッパで散々苦勞した明石は、独立運動というのは理屈で言ってもダメだということを熟知しており、割り切った力の政策を断

行した。当時の李氏朝鮮は非常に遅れ、経済的にも弱体だった。インフラを整備し、精神的な教育を行い道徳心を植えつけたのは日本人だった。当時の日本は朝鮮を併合したが、侵略したとは思っていなかった。

日本の統治政策は、欧米の白人が行った植民地政策とは全く違った。白人は資源を求め、富を持ち帰るための植民地だった。日本人にはそういう考えはなかった。

明石は、服装には気を遣わず、私的なお金には無頓着であった。台湾総督時代には給料を家に持って帰ることができなかった。ズボンに穴が開いていたりして、途中で落としたり失くしたりしていた。また、何かに夢中になると他の事は忘れてしまう性格で、山縣有朋に面談に行った時には話中に夢中になって2度までも失禁してしまったという話も残されている。とにかく相当変わっていたようだ。

福岡で死去した明石の遺骸は台湾に葬るよとの明石の遺言により、福岡から台湾に移され、三板墓地(現森林公園)に埋葬された。その後、公園整備に伴って、台北県三芝郷の福音山基督教墓地に改葬された。



黄文雄氏の講演内容(概要)は次のとおり。

明石元二郎は郷里福岡で逝去するが、遺言によりその遺骸は台湾に移され埋葬された。中国浙江省出身の蒋介石総統は台湾で亡くなって台湾に埋葬され、中国に帰ることはなかった。日本人の生と死の考え方がいかに違うか、象徴的なことだと思う。私が連想したのは、小菅団長がなぜ10年以上も慰霊訪問団を続けてきたかということだ。あくまで想像だが、日本人というのは死を見つめなければ生の意味が分からないのではないかという考え方で、その象徴的なものが「日台の生命の絆」ということではないか。慰霊訪問団の報告誌に「日台の魂の交流11年」と書いてあるが、魂の交流というのは日本人以外にはあまりないと思う。中国に魂があるかといえられない。中国の国際交流は友好を強調するが、魂の交流はない。友好を口にしていく間に戦争が起り、対立が激化している。日本人は、死を見つめ生を考える。祖先について考え、長い歴史の中で心と魂を強調してきた。靖國神社はその一つのシンボルであり、他の民族の考え方は全く違う。日本人は、政治的な外交交流でも魂と心の交流を行う。日本人の死者に対する思いは、日本人

の美德として世界中どこにも見られない。映画「おくりびと」がアカデミー賞外国語映画賞を貰ったのも、死者に対する日本人の思いが、世界に感動を与えたからだ。台湾人が尊敬しているのは戦前の日本人だ。日本が過去の良さを学び、本当の日台交流、魂の交流が必要だ。

明石元二郎はどういう人間か、まず当時の社会的背景を述べたい。戦後の日本の歴史が非常におかしいのは、台湾、朝鮮、満州について三大植民地としているが、こういう考えは全く間違いだ。当時の天皇陛下の詔書や法的根拠にも植民地としての定義はなかった。台湾は植民地的色彩は持っていたが、日清戦争の結果、清国から割譲されたものであり、台湾をどう統治するか決定的思想はなかった。日本三大植民地という考えは戦後の創作であり間違いだ。

歴史を見る場合、すべて戦後の価値観で見ると往々にして間違う。もう一度日本の歴史を見直さなければならない。とくに歴史の中の数字を見る場合、中国と韓国の教科書には過大に書かれ間違っている。

明石は台湾で活躍した軍人で第4代総督の児玉源太郎の統治時代か

らコンピでやってきた。台湾の近代化と関係が深い。明石を含め、歴代総督の殆どが日露戦争と関係があった。関係しているだけでなく主役だった。台湾は米と砂糖を日本に送ったが、不足した戦費の募金についても東京市、大阪府に次ぐ多額の金額を拠出した。

もし、台湾が独立をしたかったら日本が困っていた日露戦争当時に、日本を背後から叩けばよかった。独立を考えていなかったのではないか。台湾人は戦勝祝いの提灯行列も相撲大会も募金活動も行った。当時の人たちの心がわかる。学者が書いている歴史はおかしい。

台湾に日本が進出なかった場合、台湾は今より以下だったのではないか。当時の学校教師、医師、軍人らがどう台湾を作ったか、なぜ警察官が神様として祀られたかを考えたら分かる。とくに植物学者や動物学者はあまり評価されていないが台湾に大きな貢献をした。病虫害の研究に成功して砂糖黍や農産物の生産が倍増したことはもっと評価されてよい。歴史を見る場合、細かいところから見なければ正しいことは分からない。



日台の魂の交流 第9回 台湾特別講演会

尖閣ばかりか沖縄まで「領土」と主張する中国の狙いは何か

中国が沖縄を獲る日

— 中国の「千船保釣」を打ち砕こう! —

日本は、迫り来る中国とどう付き合うべきか?

昨年の尖閣諸島沖衝突事件であらわとなった中国の対日強硬姿勢。東シナ海の石油・天然ガスの開発を巡る緊張状態のうえに、「沖縄は中国の領土だ」と主張し、日本国内の水源や森林を買い漁り、韓国やフィリピンなどの南シナ海諸国とも次々に争いを起こしている。

尖閣諸島を包囲・上陸するという「千船保釣」宣言も出されているいま、無防備な日本人が知らない“中国の領土拡張・海洋進出政策”の真の狙いとは何か、日本はどのように対処していくべきか?

中国を知り尽くし鋭い筆法で評論活動を続ける黄文雄先生が、最新事情を講演する。



黄文雄先生 (文明史家)

【略歴】昭和13年(1938)台湾高雄県岡山鎮生まれ。昭和36年(1961)来日。昭和44年(1969)早稲田大学商学部卒業。昭和46年(1971)明治大学大学院、政治経済学研究科西洋経済史学修士。現在、拓殖大学日本文化研究所客員教授・同百年史編纂委員。アメリカの華字新聞に掲載した論文が『中国の没落』(新台政論社)として昭和61年(1986)に台湾で地下出版され大反響を呼び、反体制運動家の必読書に。中国を批判し日本を激励する言論を展開している。

日時：平成23年6月4日(土)

開演 13:00 開場 12:30

どなたでも
ご参加できます!

会場：福岡ガーデンパレス 1階ホール

福岡市中央区天神 4-8-15 TEL(092)713-1112

講演会 (13:00~17:00)

※ 講演会開始前に式典(45分間)を催します。

会費：1,000円(学生500円) 定員：200名

懇親会 (17:15~19:00)

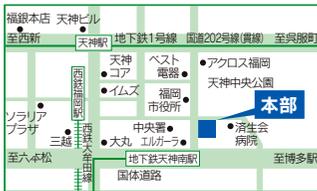
※ 講演会終了後に先生を囲んで懇親会を催します。

会費：5,000円 定員：100名

申込締切日：平成23年5月31日(火)

主催：日華(台)親善友好慰霊訪問団(結成平成11年)

〒810-0001 福岡市中央区天神 1-3-38 天神 121ビル13階 TEL 092-722-0021 担当 原田・黄
 協賛：九栄会(九州不動産専門学院グループ同窓会) JTBトラベル九州 協力：福岡県護国神社
 後援：産経新聞社 福岡教育連盟 福岡県神社庁 日本会議福岡 教育研究会未来 福岡県モラロジー協議会
 西日本台湾学友会 日本協議会 福岡県郷友連盟 福岡県海友会 スタジオ日本



日華(台)親善友好慰霊訪問団

本部 福岡市中央区天神1-3-38
TEL(092)722-0021
FAX(092)725-3190

台湾支部 高雄市鳳山區南正一路
2巷11弄5號
TEL(07)751-4906
FAX(07)751-4906

URL <http://www.i-mate.net>
Eメール mate@i-mate.co.jp

